
仮面ライダーディカイザー ～世界の支配者～

DEADPOOL ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディカイザー〜世界の支配者〜

【Nコード】

N7477U

【作者名】

DEADPOOL ZERO

【あらすじ】

元世界の支配者、ディカイザー。九つの世界を巡り、彼の新たな支配は何を起す？

支配をあきらめた元帝王は、崩壊しかけた世界の少女と新たなる世界を巡っていく。その先に何があるかは世界の意志にも分からない。
・・・

その男、元帝王（前書き）

気持ちを切り替えて、新しく執筆するのであえて連載します。わが
ままをお許しください。

その男、元帝王

ここには世界が無数に存在する。

人々の笑顔のために戦う古代の力を持つ戦士の世界、皆の居場所を守るために戦う黄金の戦士の世界、戦いを止めるために戦う龍の戦士の世界、戦いという罪を背負いながら誰かの夢を守るために戦う赤い光を放つ戦士の世界、愛した人々のために自分を犠牲にしてまで戦い続ける青いスピードの戦士の世界、古き怪物を音撃によって清める鬼の戦士の世界、人々に擬態する怪物を音速を超えるスピードで倒す天の道を行き全てを司る男と豪語する赤いカブトムシの戦士の世界、不幸で気弱でも仲間とのつながりや全ての時間を守るために戦う電車の戦士の世界、人の命を吸う種族の女王と人間の音楽家のハーフでありながらその種族と戦い続け人々の心の音楽を守るコウモリのような戦士の世界、その世界の戦士達の力を持ち破壊者でありながらその戦士達と絆を作り新たな力を生み出しながら旅して戦う戦士の世界、風の吹く街に蔓延る人を怪物に変える悪魔の装置を壊し変えられた人々を助ける二人で一人の戦士の世界、無欲でありながら欲望から生まれる怪物を欲望から生まれし力で戦う三色の戦士の世界。

そう、世界は一つだけじゃない、それぞれの世界にその世界の主役がいるのだ。その内の一つの世界に新たなライダーが生まれようとしていた。

く????

たくさんのライダーが一人のライダーを倒すためにそこにいた。空中から攻めるライダー達、地上からマシンに乗ったり走ったりしながら攻めようとするライダー達、水中からもライダー達が攻めてくる。

それはただ一人のライダーを倒すため、しかしそのライダーがいる

と思われる方向から眩しい黄金のレーザーが地面を薙ぎ払う。それと同時に地面から火柱が飛び出し、何人ものライダーを吹き飛ばす。

「ぐわああああああ！」

「ぎゃああああああ！」

【FINAL - VENT】

【EXCEED CHARGE】

爆発の中から緑色の牛のようなライダーと白いラインが走るライダーがそれぞれの必殺技を放つが、その目標であるライダーは黄金の光の壁によって攻撃を防ぎ一瞬で近寄ると黄金の光を纏った剣で斬り裂き爆発させる。そこからさらに多数のライダーが必殺技を発動していく。

【【FINAL - VENT】】

【【EXCEED CHARGE】】

『スピニングダンス！』

「音撃射！疾風一閃！」

『エターナル！マキシマムドライブ！』

『セルバースト！』

炎や光を足に纏いキックを放ち、重火器を撃ちまくり、剣から強力

な斬撃を放ち、楽器のような物から清めの音を鳴らし、メモリの力やメダルの力を解き放つ。

しかしその目標のライダーらしき者は突如として7人に分身し、更に強力なキック、射撃、斬撃でその殆どを爆発させた。

その証拠に爆発の起こった場所にはそのライダーが描かれたカードが大量に落ちていた。一人のライダーを除いて。

「これが究極を超える究極、黄金の帝王を名乗るライダーの力か！」

そのライダーは黄金に輝き虹色の宝玉が埋め込まれたベルト、白銀のスーツ、スーツと同じ色の宝玉が埋め込まれている銅色の鎧に、青い複眼と透明に輝く後ろから短い2本の角とさらに鋭く長い1本の角が生えたマスクという姿だった。

[illegible]

「ハアッ！」

お互いに右腕を黄金と虹色に光らせ、ぶつけ合うとさらに大きな爆発が起きるのだった。

{
 ?
 ?
 ?
 ;
 }

古びた大きな城がそびえ立つ、辺り一面砂漠の世界。その城に一人の青年が住んでいた。

「また……あの時の夢か。最近多くなつたな。」

彼の名前は天海てんかい地帝ちてい。とある事情によつてこの城を出ようとし
ない彼は、まるで王様が座るような椅子に座つて寝ていた彼は先程のラ

ライダー達が謎のライダーと戦う夢を懐かしそうに思い出していると目の前の扉が大きく吹き飛ばされる。

当たりそうだった彼は、人間とは思えない程高く飛び回避する。そして何故か無傷だった椅子の上に立つ。

「まったく。何だよ？俺はもう世界の帝王なんてやめたのによ。」

と言う彼の目の前にいるのは闇のディケイドであるダークディケイド（Dディケイド）、その後ろに仮面ライダーの一人である電王の世界の仮面ライダー、幽汽スカルフォーム（幽汽S）とハイジャックフォーム（幽汽H）が人形のように立っていた。

「悪いな。いい加減、お前のその帝王の名を持つライダーの力が欲しくてな。今日でお前も潮時さ！」

Dディケイドが指を指すと、ダブル幽汽が勢いよく走りだし帝の上から専用武器の剣とザウエシガツシャーを振り下ろす。

しかしそれをいくらかかわすと攻撃を受け止める。そして手から放った光と共にその二人をカードにする。

「残念。俺のカードは俺にしか使えないからな、でもお前は特別さ・・・久しぶりに帝王の世界への凱旋だ！」

そして帝は仮面ライダーの一人、ディケイドのベルトであるディケイドドライバーを黄金にし真ん中が青色の感じのベルト「ディカイザドライバー」を腰に巻く。そしてサイドバックルを引き、左腰のディケイドの武器であるライドブッカーに酷似した物から一枚のカードを取り出し叫んだ。

「変身！」

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

カードを装填しバックルを押すと同時に12体の虚像が現れ、どんどん帝と重なり最後の1つが重なるとドライバーから白銀のライドプレートが9枚顔に刺さり全身に色を付ける。

その姿はディケイドに酷似しているが、マゼンダの部分と白い部分は黄金に輝き、黒い部分は白銀に染まっていた。さらにディケイドの物が二つ左右非対称で合体したような青い胸の装飾と同じ色の複眼があるマスクにあるライドプレートはとても鋭く1、3、5、7、9枚目が長い。

「ついに、ついに現れたか！世界の帝王・・・ディカイザー!」

「だから、俺はもう帝王はやめたの。てか、世界を支配するなんて間違いだったんだよ。」

ディカイザー、それがこの黄金のライダーの名前である。しかし今の本人は戦おうとはしない。さらに帝王の部分も否定している。

「ならば、何故渡さない!」

「悪の組織に渡すより、自分で守った方がいいだろ?」

「ならば力尽くだ!」

Dディケイドがライドブッカーを構えながら向かってくるのに対し余裕に構えるディカイザー。まずはDディケイドが一撃を放つ。

「おっと。まだまだだな?」

「だ、だまれええええええ！」

その一撃をかわし、挑発するディカイザーへさらに斬撃を放つていくディケイド。さらにそれを最低の動きでかわしていくディカイザーはついにパンチを放つ。そこからさらにパンチやキックのラッシュを放った。

「ぐはあ！」

「ふう。それでもさ、結構動きが鈍くなってるんだぜ？やっぱダークライダーでもあの時の方が強かったようだな？」

「くそが！」

今まで戦ってなかったらしいにも関わらず軽くDディケイドを圧倒する程強いディカイザーに対し、今度はガンモードのライドブッカイで攻撃するDディケイドだがディカイザーにも武器はある。ディケイドの専用武器「ライドブッカイ」を黄金と白銀に染まった「キングライドブッカイ」とライダーの一人、ディエンドの武器「ディエンドライバー」のほとんどを白銀に染めた「クイーンンドライバー」である。

そのキングライドブツカーをソードモードにし、光弾を弾きながらクイーンドライバーから大量の光弾を放つ。

「な、何！？がああああああ！」

「もう終わるか？つまらないな。」

「まだだ！これで決めてやる！」

【KAMEN - RIDE・・・ORGA!】

Dデイクイドは1枚のカードを装填し、発動と同時に黄金のラインが現れファイズの世界のライダーの一人であるオーガとなった。

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・O・O・O・O・ORG
A!】

ダークデイクイドオーガ
DDOは黄色い縁のカードも発動し巨大な黄金の刃を振り下ろし、城の壁ごとデイカイザーを斬り裂いた。

「や、やった!勝った!しとめた!」

と元のDデイクイドへ戻り後ろを振り向いたその時だった。

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・DE・DE・DE・
DEKAI SER!】

後ろから光のカードが20枚現れ、その中を高速でデイカイザーが通り抜けてくる。

「あの程度で倒せると思うなよ!それでも元世界の帝王なんだぜ!」

「し、しまった!ぐ、ぐわあああああああ!」

すっかり油断していたDデイクイドは何も出来ず、そのままデイカイザーの必殺技「デイメンションダイナミック」を食らい爆発、消滅した。それと同時に城が崩れたそうとしていた。

「戦い過ぎたか？でも、どうしようかな？この城結構気に入っていたのに。」

思い出深い城から中々出ようとしなかったデイクイザーだったが、崩壊が大きくなり瓦礫などが落ちてくるとあきらめたかのようにデラスから外へ飛び出す。そして彼が着地するのと同時に城は完全に崩れ落ちた。

「……どうやら一難去ってまた一難か。」

と言いながらある方向を見ると、歴代平成ライダーが戦った敵がずらっと並んでいた。

「……元帝王の出現の祝いにはちよつと多すぎるぜ！」

【ATTACK-RIDE・・・FLAME-BLAST！】

一枚のカードを発動し、キングライドブッカーガンモードとクイーンドライバーから炎を纏った光弾を放つ。それは何体かの敵に触れただけで大爆発を起こし、周りの敵も巻き込み消滅する。それでも全然減っていない。

「超疲れてるけどしょうがねえ。一気にまとめてパーティに誘ってやるよ！」

その様子を見ながら、二つの武器を剣に変えデイクイザーはその敵達の中へ突っ込んだ。それと同時に襲ってくる敵達、攻撃をかわしながら縦に横に斜めに時にはまとめて斬っていくデイクイザー。遠距離からの攻撃には、弾き返したりガンモードで反撃したりと正に一人VS多人数の大乱戦がずっと続いた……

「数時間後」

「おらああああああ！」

あんなにたくさんいた敵をほとんど倒し、疲労困憊な状態で最後に残った緑色の牛のような敵を最後の力を振り絞り何発も放った光弾で爆散させたデイカイザーはその場に力なく倒れる。

（やべえよ、もう動けねえ。例えこの俺でもさすがにあればきつかったな……）

変身が解け、敵達の内部まで響いた攻撃で傷だらけの帝は休息のため眠ろうとしていた。しかし彼の目の前に何者かが現れる。

「まだ眠るには早過ぎるよ、帝君。」

どこかの民族衣装のような服が特徴の彼を見て、帝は驚く。

「仮面ライダーオーズ、火野……映司。」

そう彼は仮面ライダーオーズに変身する火野映司その人だった。

「悪いけど、その力を使ってやって欲しい事があるんだ。」

「残念だけど、あんたは自分で味わったはずだぜ？俺の世界への干渉能力の強大さをさ。」

「確かにあの時はすごかったよ。本当に世界を支配して意のままに操るその力、でも今はそれを言い争ってる場合じゃないんだ。」

「また世界の崩壊とか、大ショッカーとかの復活かい？そんなのデイクイド達がいりゃ大丈夫だろ？」

と言つてまた眠ろうとする帝に少し困惑しながら映司は告げた。

「そのデイクイドの力では到底干渉出来ない、君と同じくらいに強大なライダーの世界が大ショッカー以上の組織に狙われていたら？」

それを聞いた瞬間、起き上がる帝。だるそうにしながらもしつかりと聞く態勢になる。

「そういやあ、あの夢に知らないライダーが出たのはそのためか。理解したぜ、火野映司。元世界の帝王に任せな。」

「ありがとう。それじゃまず、君はこの名もない世界に一番近い世界を救い、その後ライダー達の世界を巡ってその世界を正義の支配で悪の支配を倒す。それだけさ。」

「いいけど、その近い世界を救えばどうなるのさ？」

「新しい明日を生きる力が手に入ると思っていてくれればいいよ。それじゃ家やマシンはその世界に先に送っておく。頼んだよ！」

「えっ！いきな……」

説明を聞き終えた直後、灰色のオーロラによって世界を移動させられた帝であった。こうして元世界の帝王の平和な世界にするための支配の旅が始まった。

その男、元帝王（後書き）

この作品で今度こそ連載作品は最後です（リメイクしようとしていた作品は別）。

とある世界での出来事（前書き）

こんなに長く書いたのは初めてだ！

とある世界での出来事

自分の世界へやってきた悪の力を倒した後現れた仮面ライダーオーズこと火野映司に頼まれ、見たことも無い自分と同等もしくはそれ以上の力を持つライダーの世界を、今まで以上に強力な悪の力から救うために正義の力による支配を行う事になった「元世界の帝王」と名乗る天海地帝こと仮面ライダーディカイザーは今、もっとも近い世界にいきなり飛ばされていた。

突如として、今いるこの世界で新たな明日への道が見つかると言われ、いきなり飛ばされた事への怒りを何とか抑えた帝は周りを見渡した。

「なんていうか、超平和なんですけど。」

自分がいた世界に比べ、建物が多く、人々もたくさんいるこの世界に本当に自分に役立つ物があるのかと一瞬疑った帝だが映司がこの世界に家とマシンを送っておくと言っていたのを思い出し、少しめんどくさがりながらも探しにいく帝であった。

「世界を支配する帝王、ディカイザー。その力で何を支配する？」

数十分をかけて、自分の苗字が書かれた掛札がある家を見つけた帝はすぐさま近くにあったマシンらしき物にかかっていた大きな目の布を取る。

「帰ってきたか、マシンディカイザー！」

ディケイドの専用マシン「マシンディケイダー」のマゼンタの部分を金に染め、黒い部分を白銀に換えた感じのマシンがディカイザー

の専用マシン「マシンデイクイザー」である（ライトと白い部分は青）。

「あの時、天道と加賀美のダブルハイパーキックで一瞬の隙を突かれて破壊され、どこかに飛ばされてたと思ったけど直されていたんだな。」

と懐かしさを感じながら呟く。ちなみに天道は仮面ライダーカブト、加賀美は仮面ライダーガタックに変身する者である。

次に行ったのは家の中の確認である。一応生活に必要な物は全てそろっており、それに安心すると近くにあったあの城にある椅子と似た椅子に座り唯一の趣味である昼寝をするのであった。

一方その頃、どこかの学園から沢山の生徒が下校しているがその中で一際目立つ生徒がいた。太陽の光を反射して輝く、透き通るような水色の髪と瞳。きれいに整っているプロポーションを持つ彼女の名前は月海冬花^{つきつみふゆか}。この学園に通う高校2年生でいつもなら友達と帰るのだが、今日はその友達が部活でまだ帰れないため一人で帰っていた。

「今日も平和でいいな。しかも、今日は雲がない快晴。いつも以上に月がきれいに見えるな。」

ちなみに彼女の趣味は月を眺めること。理由は見ていると心が落ち着くからである。しかし、その平和な時間は長く続かなかった。世界の崩壊という現象によって。

「な、なんだあれは！」

「ビルが消えていつてるぞ！」

「えっ？」

突然の叫び声が聞こえ、冬花がその方向を見ると謎のオーロラがビルの上に現れ通過するとその後にはビルが存在していなかった。そのオーロラは、デイケイドを敵視する世界の監視者鳴滝が使う灰色のオーロラとは違い、必要以上に輝く禍々しい虹色であった。

「な、何なの？あれ・・・」

冬花がその光景に驚き、動けずにいると今度は別の方向からオーロラが現れその中からさらに驚きの光景を目にする。

「ギ、ギギギギギギギ！」

「ガアアアアアアア！」

「シュー！シュー！」

蟻を模した黒い異形の集団はアギトの世界の「アンノウン」、カブト虫のような灰色の怪物はファイズの世界の「オルフェノク」。そして蛾のような感じの緑色の怪人は剣の世界の「アンデット」だった。

「な、何なの？」

「ぎゃあああああああ！」

「うわあああああ！」

「に、逃げろおおお！」

「……！う、嘘でしょ？こんなの……こんなの酷すぎるよ……」

あまりにも不思議な現象に身動き一つすら出来ない冬花がさらに聞こえた悲鳴のした方向を見ると、さらにオーロラが出現し、その中から現れた多数の見たことも無い存在が近くの人々をそれぞれの手段で殺し始めたのだ。

鋭い爪や己の武器で斬り裂き、銃や針などで撃ち貫き、牙で肉や骨を食いちぎる。普通の人間ならば見ただけで、失神するか嘔吐したりするだろう。

しかし、冬花は失神や嘔吐をするどころか普通にそれを見続けていた。

「どうして？こんなにも酷くて、気持ち悪いのに私はこんなにも平気にいるの？」

自分の状況に対応出来ず、座り込んでしまった冬花。そしてその近くに鯨のようで全身をステンドグラスのような感じで光らせる、キバの世界の怪人「ファンガイア」が迫っていた。

そしてそのファンガイアが冬花へ向けて生命エネルギーを奪う吸血牙を出現させたその時である。再び虹色のオーロラが出現し今度は冬花だけを通り過ぎる。すると彼女に変化が起きる。

「何だろう？身体の底から力が……みなぎってくる。」

その言葉と共にユラリと立ち上がる。だがしかし、冬花からは彼女の物とは思えない謎のオーラがあふれ出していた。それに髪の色も白銀へと変わり、目付きも鋭くなっている。

「そつかあ…考えてみれば、私のこの平和な日常が壊れたのはあなた達のせいだね…責任、取ってよ！」

叫ぶと同時に右手にオーラが集まり、一本の刀を形成する。そして刀を鞘から抜き、目にも止まらぬ速さでファンガイアを切り裂く。

「グギヤアアア！」

人間業とは思えぬ鋭い一閃を浴びせ、ファンガイアはステンドグラスが割れるように爆散した。

「ハア…ハア…い、今の私がやったの？」

刀を鞘に戻すと元の冬花に戻るが、今起きた出来事に驚いていた。すると何処からか声が響く。

（ソナタハアレニ…テキゴウシタノダ…）

「え？何なの？頭の中に、声が…？」

（ソナタハエラバレタ…ダカラコソヤラネバナライコトガアル…）

まだ少し状況を飲み込めていない冬花であったが、やるべき事は何なのか頭に響く声へ聞いてみる。

「な、何を？」

（ワタシヲツカエ…ソシテ…セカイヲシハイスルテイオウヲキルノダ…！）

会話しき物を終えると再び刀を抜いた時と同じ状態になる。その様子からしてどうやら刀に操られてしまったようだ。

「そうなんだ。私の世界が壊れたのは、たぶんその帝王って奴のせいなんだ。……だったら絶対に許さない。私の平和を奪った責任を取ってもらわなきゃ……」

そして狂喜の笑みを浮かべると、世界の崩壊や怪人達によって壊れた建物や殺されてしまつて面影が殆ど無い人間を見つめた後、目の前に見えた怪人達や生き残った人達へ向かつて刀を抜きながら走り出すのであつた。一筋だけ涙を流して……

謎のオーロラが出現した時と同じ頃、帝は世界の雰囲気が変わつた感じがしたためにマシンディカイザーで街中を走っていた。

「一体どういう事だ？昔見た、あのオーロラはまた現れるし、怪人の気配もいっぱいするし、どうなつてんだ？」

そして急に広くなつた場所へ出ると、そこには人間が死んだ跡もあるが何故か真つ二つにされた怪人の死体もあつた。

「こいつはひでえ。まるで見境無くぶつた斬つたような感じだ……ん？何だあれ？」

帝が見た先には1本の刀が刺さつていた。帝は危ないと警戒しながら近づいたその時だった。

「見つけた。」

「何っ！」

突如、地中から冬花が飛び出し刀を取って斬り付ける。それを何とかかわし、ドライバーを取り出すがその姿を見て帝は驚いた。

「お、女の子！？ちよつと待てよ！何で俺を斬ろうとするのさ！？」

「最初は世界を歪めたあなたを殺そうとしてたけど、もうどうだっていいわ。今はただ、人でも怪人でも何でもいいからブツた斬りたいのよ！」

その言葉と共に再び刀を抜き斬り掛かる冬花。帝は変身する訳にはいかないため、攻撃をかわすしかなかった。

（くそ！怪人ならともかく、こんな女の子じゃ変身も出来ない。だからといって止めない訳にもいかない。一体、どうすればいいんだ！？）

と考えながら、物陰に隠れたその時肩に激痛が走る。良く見ると大きな斬り傷が付いていた。

「ぐわっ！ま、まさか……」

「そう、そのまさかよ。この刀は物体を通り抜けて斬ることが出来るのよ。」

いつの間にか近くにいた冬花にさらに斬られる帝。いくらか食らってしまいが、一瞬の隙を突いて刀を蹴り飛ばす。

（シマッタ……コントロールガキレテシマッタ……）

「きゃっ！」

「おっと、危ない。」

その衝撃で倒れそうになった冬花を抱きかかえるようにキャッチする帝。よく見ると、目つきや髪の色が元の冬花に戻っていた。

「あ、あれ？私は何してたんだろ？」

「たぶん、君はあの刀に操られていたと思うよ。」

状況が分かっているような冬花に今までの事を説明する帝。それを聞いた冬花は信じられない表情で帝を見つめていた。

「そんな・・・私がそんな事を・・・」

「残念だけどこれは現実さ。そして君が浴びたオーロラはたぶん「支配と覚醒の虹」だと思う。」

「支配と覚醒の虹？」

「ああ。かつて、俺がとある理由で世界を旅していた時にも現れていた。そのオーロラは通常なら、ビルとかの無機物の存在を消滅させ、人とかの生物をさっき君を襲ったりした怪人に変化させるという形で支配する。」

「だけど、時々君のように何らかの力を得て仮面ライダーと同等の力とかを得た者達は覚醒したと呼ばれている。」

と出来るだけわかりやすく説明する帝に対し、冬花は一つの疑問を

浮かべる。

「あの、仮面ライダーって何ですか？」

「ああ、それはね……」

そして立ち上がるとクイーンドライバーをある方向へ発射する。その方向には先程倒されていた怪人と一人の青年が無表情で立っていた。

「……この力さえあればこんな世界、直ぐ壊せる。変身。」

その青年は腰に黒いベルトを出現させると、怪しい光と共に装甲のような物に包まれ、月のキングストーンを持つ仮面ライダーBLACKの最大のライバルである「シャドームーン」へと変わった。

「ああいう、悪い奴らをぶっ倒す正義の味方……かな？」

そして帝はデイクイザドライバーを装着すると、1枚のカードを取り出す。

「もしかして、あなたは……」

「そうさ。でもまあ、見てなよ。元世界の帝王の戦いぶりって奴をさ。変身！」

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

住んでいた世界での戦いの時と同じように変身した帝は、12体の虚像に包まれその姿を黄金に輝く次元戦士デイクイザーへと変える。

(ドウヤラ・・・アイツガセカイヲシハイスルテイオウノヨウダ・・・)

「えっ！いつの間に私、刀なんて拾ったの？」

冬花がその姿に驚いているとまた頭に声が響いたため、右手を見ると先程の刀を既に握っていた。

(ソレヨリモ・・・ハクヤツヲキレ・・・デナイトコノセカイガタイヘンナメニアウゾ・・・)

「で、でもそんな悪い人には見えないよ？きっとそう言われるのは訳があるのよ・・・」

(シカタガナイナ・・・コウナレバソナタヲムリヤリアヤツツテデモヤツヲキル・・・)

「や、やめて！そ、そんな・・・の・・・」

冬花が言い終わる頃には勝手に刀が抜けてしまったがために冬花は再び覚醒状態へとなるが、今度はそのまま動かない。

(ドウシタコトダ・・・ナゼウゴカナイ・・・)

「いや・・・私はあの人を・・・斬りたくない・・・！」

(ナンドト・・・ワタシノチカラヲウワマワルイシデウゴキヲトメテイルノカ・・・)

「私は・・・信じたい・・・あんなにたくさん、人や怪人を斬ってしまった私でもしつかりと色々教えてくれた・・・あの人の事を・・・」

そのまま彼女はディカイザーを見つめているのであった。

「さあて、感覚を取り戻すための準備運動を始めますか!」

一方怪人達と戦い始めたディカイザーは感覚を取り戻すため、色々な攻撃を始めていた。

「まずは格闘戦から。そらよ!」

近くにいた怪人達から手当たり次第に殴り、蹴り、投げ飛ばしていく。最初は荒々しかったが、段々とそれは正確かつ速く強烈な一撃となっていた。

「ギシャアアアアア!」

「グオオオオオオオ!」

その攻撃から逃れたイモリのような龍騎の世界の「ミラーモンスター」、青い鳥のような電王の世界の「イマジン」が剣や銃などを構える。

「そつちが武器ならこつちもこれで行くぜ!」

それを見たディカイザーもキングライドブッカーとクイーンドライバーを構える。ブッカーの方は最初ただ振るだけだったが、敵の攻

撃を防ぎつつ斬っていく内に動きが洗練され確実に強烈な一撃を叩き込む。

クイーンドライバーも狙いが定まらずほとんど当たらなかったが着実に1発1発が当たるようになっていき、最後には全弾命中した。

「んじゃ、本領発揮だ!」

デイクイザーの左右からやってくる大量の怪人達に対し、2枚のカードをブッカーから取り出すとベルトとクイーンドライバーヘカードを入れ発動した。

【ATTACK-RIDE・・・FLAME-SLASH!ICE-BLAST!】

電子音声と共に、ブッカーの刃は炎をクイーンドライバーの銃口は氷のようなエネルギーを纏う。さらにそのまま、近づいて来た怪人は連続で斬り倒しクイーンドライバーから冷気を纏った光弾を連続発射し怪人達を一気に全滅させた。

「さあ、残ったのはお前だけだぜ?」

「フツ、こしゃくな。俺はさっきの奴らとは違うぞ!」

シャドームーンは金の持ち手に赤い刀身の「サタンサーベル」と銀の持ち手に青い刀身の「デビルサーベル」を構えて高速でデイクイザーに迫る。

「やっと大物てつか?いいぜ、かかってきな!」

二つの武器を構え、デイクイザーも向かっていく。そして二人は何

度も何度も剣をぶつけ合う。

「シャドービーム！」

「うわっ！」

一端離れると、シャドームーンが剣先から赤と青の光線を連続で放つがデイクイザーはぎりぎりです。

「確かに強いな……だったらこいつを使うぜ！」

【KAMEN - RIDE・・・BLACK!】

デイクイザードライバーに1枚のカードを入れて発動すると、眩しい光と共にベルトはそのままで姿形は仮面ライダーBLACKと同じDBLACKへと変わった。

「トアッ！」

「何！？姿が変わった！……ぐわっ！」

その行動に驚いていたシャドームーンはDKBLACKの飛び蹴りを食らう。その後も2本の剣やビームで攻撃するが全部躲かれ反撃を食らい大きく吹き飛ばされる。

「な、何故だ！俺のこの力は最強のはずだ！」

「それはな、覚醒した力にお前自身がついて行けてないのさ。さっきの攻撃とか最初は危なかったけど今はもう、簡単に軌道が読めるぜ！」

と元に戻ったデイクイザーの説明によってシャドームーンは狂ったように走り出す。

「ち、違う！最強は俺だああああ！シャドー、キック！」

「仕方ない。楽に終わらせてやるよ、帝王直々にな。」

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・DE・DE・DE・
DEKAISER！】

「ハアアアアアア！」

そして二人の強烈な一撃がぶつかり、爆発を起こす。

「一体、二人はどうなったの？」

何とか元の状態まで戻った冬花が近づくとその炎の中に、先程の青年とデイクイザーが膝を地に付けて立っていた。

（帝宅）

帝の家の中でこの世界の状況を聞いていた冬花は悲しい表情だった。何故ならあのオーロラが現れたら最後、完全に世界が支配されるまですべての世界は元に戻らないと聞かされたからである。

「それじゃあ、私はどうすれば・・・」

「仕方ないよ。俺はこういうのをいくつも見てきたから本当の事なんだ。でもね・・・」

「えっ？」

「俺はその度に、その世界の事を心に覚えておくんだ……最後の瞬間まで。そして生きていく、だから君もそうしてみればいいよ。」

と帝の話を聞き終えると、冬花は決心したように立ち上がる。

「それじゃあ、私にもその旅に連れて行ってください！」

「はっ？」

「迷惑にはなりません。あの刀も協力してくれるはずだし、何より私もそんな世界を出来る限り救いたいんです！」

と深く頭を下げる。そこから数秒、突然の提案に驚いていた帝はあきらめたように呟いた。

「分かったよ。ただし、その自分で決めたことはしっかり守れよ！」

「は、はい！ありがとうございます！」

「俺は天海地帝。君は？」

「私は月海冬花です。よろしくお願いしますね。」

自己紹介を終え、二人が握手したその時だった。何と、壁に掛かっていた絵画の絵が変わりだしその中から9枚のピンぼけしたカードが出てくる。

「帝さん！これは？」

「これは新たなるライダーのカード・・・そして、この世界のライダーは何となくだけど分かる。名前は・・・シャイニングキバ！」

その絵画は、ステンドグラスの破片が舞い散る中に向かい合って立つ、白銀のエンペラーキバとダークキバのようだった。

とある世界での出来事（後書き）

次回は設定です。

設定その1（前書き）

ようやく設定が完成しました。

設定その1

（主人公・ライダー設定）

てんかいちみかど
天海地帝

身長178？

体重69？

辺り一面砂漠で大きな古い城にたった一人で住んでいた元世界の帝王と名乗る見た目20歳前後の青年（誕生日と本来の年齢は不明）。金色に輝くちよつと鋭い瞳にウェーブのかかった銀髪に地を意味する赤、海を意味する青、空を意味する緑のメッシュを入れた2枚目な顔をしている（メッシュの意味は帝曰くそれっぽい色だったから）。

性格は基本困っている人や世界は放っておけない尚且つ、ライダーや怪人の知識に詳しくそれを冷静に分析して戦ういわゆる良い王様な感じである。

一人称は俺で好きな人のタイプは月の光の様に淡く輝いている様な人という一見理解不可能だが、これには過去の「究極ライダー大戦」（説明は後述）が関係しているらしいが過去の帝自身の部分も含め謎となっている。

変身者を全ての世界を支配する帝王へと変える「デイカイザドライブバー」と専用武器の「キングライドブッカー」と「クイーンドライブバー」を所持している。これを扱えるのは次元を超えて世界中を探しても帝ただ一人らしい（帝曰く世界の意志が俺を選んだ）。

因みに何故他のライダーや変身者などに詳しく、親交が深いのは一つは大戦で何度も戦っている内に友情が芽生えたのと罪滅ぼしの旅の途中に出会って仲良くなったからである（特に一緒に旅したオリジナルの仮面ライダークウガの五代雄介や仮面ライダーオーズの火野映司とは親友と呼べる程仲が良い）。そして今、その火野映司に

よって新たなる9つの世界を救う旅へ出発させられるのであった。
服装は黄金に近い黄色のシャツに白銀に近い白のコート、赤いコート、青いコート、緑のコートをかわりばんこに着ている（同じ色のスーツに近い服も所持しているが帝曰くこれは暑い所用）。

好きな食べ物はポレポレのカレー、城戸真司（オリジナルの仮面ライダー龍騎）の作る餃子、甘い物。嫌いな食べ物はしそ巻き杏。

趣味は絵を描く事、ローラースケートやスケボー等の滑る系のスポーツ。

仮面ライダーディカイザー

身長198?

体重90?

走力100mを4.8秒で走る

ジャンプ力ひとつ飛び480m

パンチ力8t

キック力12t

帝曰く世界の意志と全てのライダーの力、人々のライダーを覚えて
いる記憶が融合し作りだされた黄金に輝くディカイザドライバーで
帝が変身する黄金に輝くボディと白銀のライン、青いディメンション
プレートと複眼を持つ戦士。

昭和・平成・ダークを問わず全てのライダーに変身する事が可能で
「世界の帝王」「世界を支配する者」

「究極の支配者」などと言われているが当の本人はもうやめている
と言っている（それでも力を狙っている輩は多い）。

ドライバー自身が変身者を選ぶため、選ばれし者が変身しようとする
と黄金の粒子となって消滅してしまう。

ディケイド、ディエンドを超えるスペックと両者の大きな特徴を一
気に所持しているため本気を出せば一つの世界をまるごと支配出来
る（帝もかつてはいくらかの世界を支配していた）。

これが生まれてから灰色のオーロラ以上に危険な「支配と覚醒の虹」

（詳しい事は後述）が出現する様になった（デイクイザーでは無い何かが人為的に発動している模様）。

動力源はデイクイドのトリックスターの4倍の力があるネオトリックスター（色はロイヤルブルー）。エネルギー源はデイクイドの次元エネルギーの8倍の力がある超次元エネルギーである。

武器であるキングライドブッカーはソード、ガンモードがあり刃が刀の様になっている（長さもデイクイドの物より長い。色はデイクイザーと同じ）。デイエンドライバーを模した白銀のクイーンドライバーもソードモードに出来る（長さは普通のライドブッカーと同じ）。

通常のアタックライドの他、属性（炎や氷など）の付いたアタックライドも所持し必殺のファイナルアタックライドで20枚の3Dカードをくぐり抜けて放つ「デイメンションダイナミック」（キック）、「デイメンションジャッジメント」（斬撃）、「デイメンションバースト」（射撃）の三つを発動する。

専用マシンはマシンデイクイザー。最高時速480?で疾走し、次元を超えたりするなど帝の遠くへ行く足の変わりとなっている（帝曰く大戦の時に天道（オリジナルの仮面ライダーカブト）と加賀美（オリジナルの仮面ライダーガタック）の変身したハイパーカブト、ガタックのダブルハイパーキックによって1回破壊されたらしい。それでも耐久力はとても高いのである）。

実はデイクイザーには支配者専用のフォームとコンプリートを超えるコンプリートフォームがあるらしいが詳細は不明。

「ヒロイン・世界用語設定」
つきつみふゆか
月海冬花

誕生日9月9日

年齢17歳

身長162?

体重46?

支配と覚醒の虹によって崩壊という支配を受けた世界で帝が出会った優しい雰囲気の子。腰まで伸びていてサラッと整えられている髪と同じ色の瞳のタレ目という美しい顔を持ち、通っていた学校のロイヤルブルーのブレザーとミニスカートの制服を着ている。

自分も虹を通った影響で、覚醒し青い鞄と銀の鍔に透き通った刀身の刀と自由自在に扱いこなせる力を手に入れる。

最初は刀に操られてしまい、怪人同然となっていたが帝に助けられ世界を廻る旅に同行する。何故か月の光を浴びると髪と瞳が透き通った青へと変わる特異体質を持つ。刀を抜くとツリ目で銀髪となる。好きな食べ物唐揚げと甘い物、嫌いな物は苦い物とまずい料理（特にまずいお菓子だとそれを作る人も嫌いになる）。趣味は月を眺める事、料理作り（特に得意なのはシチューとチャーハン）。

因みに性格は几帳面で頑張り屋、丁寧で少し天然。刀を抜くと言葉使いが荒くなり、何でも斬りたくなってしまふ（なんとか抑える事に成功した）。

せうげっか
雪月花

冬花が持っている意志のある刀。冬花を操ってその世界の人間や怪人を斬殺した後、帝を本能的に斬ろうとするがはじき飛ばされコントロールを解かれる。しかし再び操り斬ろうとするが冬花の意志がコントロールを上回りそのまま冬花の所有物になる。

刃がとても薄く目をこらさないと見えない（冬花には普通に見える）ためほとんどは斬られた事に気づかず死ぬ（刃は薄いが逆にとても固い）。

月の満ち欠けによって斬れ味が変わり、満月だと存在する物質全てを斬る事が可能（月が全く出てないと全て峰打ちにしかない）。青い三日月状の斬撃波を飛ばしたり、物質をすり抜けて斬る事も可能。さらには刀自身も成長していくため、斬れなかった物質を斬れたり勝てない相手に勝てるようになるという。性別としては女であり、最近では冬花のアドバイザーとなる。

究極ライダー大戦

ライダー大戦にはいなかったW、アクセル、スカル、エターナル、オーズ、バースも加わり世界の支配者となっていたデイクイザーを倒すために発生した新たな大戦。

最初は互角の戦いだったが、デイクイザーが真の支配者の姿になった途端戦況は一変、デイクイド、ディエンドは消滅、全てのライダーはデイクイザーにカードの姿で支配される。しかし突如として見たことの無い9人のライダーが出現、デイクイザーと激しい戦闘の末に相打ちとなり世界とライダーは再び復活した。

帝も支配にはすっかり興味が無くなり、全てのライダーの世界を巡り謝罪し続けたおかげで彼もライダーの一人となる（なるまでの道のりは言葉では表せない程に困難と苦痛が常にあっただらしい）。

支配と覚醒の虹

灰色のオーロラ以上に大きく、禍々しい程虹色に輝くオーロラの名称で通り過ぎた物が無機物ならば消滅、生物ならば怪人化という支配を与え、まれにライダーと同等もしくはそれ以上に力を与えられるか既存のライダーに変身させられる者達がいるが纏めて覚醒したと呼ばれている。

どちらにせよ、オーロラが通った生物は殆どが自分の意志を失ってしまうため冬花のような存在はとても珍しい。

設定その1（後書き）

次回から本編が始まります。

第1楽章「光と闇の不協和音」（前書き）

仮面ライダーディカイザー、この後すぐ！

第1楽章　光と闇の不協和音

既に悪によって支配された世界やその他の強大な力を持つライダーの世界を救うための旅に出た、元世界の帝王こと天海地帝とその悪の支配を浴びた世界の住人月海冬花が最初に訪れた世界は「シャイニングキバの世界」だった。

「なるほど。こういう感じで世界を旅しろってか、結構楽だな。」

「それじゃあさっそく、情報収集ですね！」

「その前に忠告だ。」

「忠告？」

「そう。仮面ライダーキバ系の世界には大きく分けて二つの特徴がある。まずファンガイアと人間がお互いに手を取り合ってあまり時間がたっていない世界。もう一つはすでに手を取り合って仲良くしている世界。だからその雪月花でいきなりファンガイアが居ても倒そうとしないでね。」

「分かりました。それじゃあいきましょう！」

そして二人が外に出ると、目に映る光景に驚く。普通の人間もいれば、顔にステンドグラスの模様が入った人。そして全身がステンドグラスで出来た異形「ファンガイア」が普通に並んで歩いていたり、会話をしているのだ。

「あれがファンガイアですか？」

「そう。・・・てかその格好何？」

「帝さんこそ何でタキシードなんですか？」

さらに二人の格好も変わっていた。帝は白いスーツに薄い青のシャツ、金色の蝶ネクタイでトランペットを持っている。冬花は水色のドレスと三日月の髪飾りを付けフルートを持っている。

「演奏出来るか？」

「一応出来ますけど、帝さんは？」

「やったことはないけど・・・」

くくくくくくくくくくくくくくくく

トランペットを構えると吹き始める。その音色はとても幻想的で、初めてとは思えない程にうまかった。そして一通り吹き終わるとそれを聞いていた人達やファンガイアが拍手を送る。それに帝は一礼すると歩き出す。

「どうだ？」

「・・・恐れ入りました。」

少し落ち込んだ冬花を引き連れ、色々と探索するが逆に平和すぎて何もおかしい部分は見つからないのであった。

「一体どうすりゃいいのさ？」

「でも、平和でいいですね」

「……はあ」

あまり気にしていない冬花にため息をつくど、どこからか悲鳴が聞こえる。どうやら女性が追いかけているようだ。

「きゃああああ！誰か助けて！」

「どうした？」

それを見た二人は逃げている女性をかくまると、それを追いかけていたかのように白い装甲の戦士がやってくる。

「君達、その女性を離しなさい。その女性是我々、聖なる光の親衛隊が保護する。」

「ほう。すでにイクサに変身している状態ですか？何か裏があるんじゃないのか？」

「君には関係ない事だ！」

白い装甲の戦士、イクサは専用武器であるイクサカリバー・ガンモードから銃弾を発射するがそれを覚醒した冬花が全て弾き落とす。

「帝さん。今のうちに！」

「ありがとさん。」

そして女性を冬花に任せるとデイカイザドライバーを装着し、キングライドブッカードからカードを取り出しサイドバックルを引いてカードを装填する。

【KAMEN・RIDE・・・】

「変身！」

【DEKAISER!】

バックルを閉じ音声を響かせると12体の虚像が帝に重なり、ライドプレートが顔へ突き刺さるのと同時に色が付き姿は仮面ライダーデイカイザーへと変わっていた。

「君も仮面ライダーのようだな。おもしろい！」

「つまらないけどな、俺は。」

イクサカリバーをソードモードに変え、突っ込んでくるイクサに対し腕を組んでいるデイカイザーは暇そうにしている。

「フツ！ハツ！テヤア！」

「教えてくれないかな？あの人追いかけてる理由。」

「私に勝てたらな！」

「なら、勝たせてもらう。」

攻撃を躲し、キングライドブッカードから1枚のカードを取り出すと

それをドライバーに素早く入れ発動する。

【KAMEN - RIDE・・・REY!】

氷の紋章がデイクイザーを包み、キバの世界のライダーの一人である対レジェンドルガ専用の冷気を操る戦士、仮面ライダーレイへと姿を変える。

「な、何だと!」

「その反応久しぶり。さらにこいつらもだ。」

仮面の下で少し微笑むとキングライドブッカーからDデイクイザーレイはさらに2枚のカードを取り出し、クイーンライダーへ装填し発動した。

【KAMEN - RIDE・・・KIVA!SAGA!】

するとクイーンドライバーからいくつもの虚像が現れ、その姿をフアンガイアの脅威から人間を守るため戦うコウモリを模した戦士仮面ライダーキバと、フアンガイアの幹部であるチェックメイトフォアのキングが変身する戦士仮面ライダーサガへと変わる。

「キバっていくぜ!」

「王の判決を言い渡す・・・死だ!」

「な、なんだそのキバは!?見たこともない!」

「これが本物って奴だぜ?」

召喚したライダーが一言しゃべった後3対1となったDレイはイクサをブツカーで連続で斬り裂き、それを防げば後ろからサガが専用武器であるジャコーダーを伸ばし打ち付ける。遠距離で戦おうとすればキバの格闘で邪魔される。イクサはほとんど何も出来ずに吹き飛ばされる。

「ぐっ！・・・なんて力だ！」

「それじゃ、とどめといこうか？」

召喚したライダー達が消え、Dレイはキングライドブッカーから黄色い必殺のカードを取り出し発動した。

(FINAL - ATTACK - RIDE . . . RE • RE • RE •
REY!)

ドライバーから冷気が放出され、イクサの足を凍らせると同時に腕のカタナが外れ専用武器「ギガンディック・クロー」が出現すると大きくジャンプしてイクサを縦に引き裂く。さらに横へ斬り裂くと全身から火花を散らし、爆発すると変身が解ける。

「ぐわあああああ！」

「さて、教えてもらおうか。あの女性を追いかける理由を。」

「その必要は無い！」

ディカイザーへ戻り、変身していた白い軍服に身を包んだ青年へ聞いたさうとするとどこからか叫び声が聞こえその方向を見ると一人の白いコートのような服に身を包んだ銀髪の青年がいた。

「誰だ？お前。」

「な！貴様、光の皇帝に対して無礼なまねをするな！」

よく見ると、変身していた青年もその周りにいる人間やファンガイア達全てがひざまづいているようだった。

「正義！よく俺が来るまで持ちこたえた。そこの金色の魔帝は俺が倒す！」

遠くの方では気絶させられて元に戻っている冬花とファンガイアが死んだとき見せるステンドグラスの破片のような物が散乱していた。

「シャイキバ！」

「お、出番だな。いつでもいけるぜ！」

「変身！」

全身が白銀で金色の線のような装飾と青い瞳のキバットらしき生物を掴み、かみつかせると青年の顔にステンドグラスのような模様が浮かび青いベルトが出現する。そしてベルトへ装着すると彼の姿を別の物へと変えた。

一見ダークキバのようだが、全身の装甲が白銀で鋭くスーツは金色。胸の部分の翼のような鎧は青く魔皇石は虹色で複眼と背中のマントも青い戦士へと変わっていた。

「俺は白夜奏^{ひゃくやそう}。そして光の皇帝シャイニングキバ！貴様に聖なる光の裁きを与える！」

「なるほど、お前がシャイニングキバか。今度こそ俺が勝つたら、色々と教えてもらおうか！（魔帝じゃないけどな）」

「よかるう！」

そして二人は人気の無いところへ移動すると同時にパンチを放つ。ほぼ互角の威力でお互いに吹き飛ばされるとディカイザーが跳び蹴りを放つ。それを躲したシャイニングキバは両手から光弾を連続で放つ。それを様々な動きで回避するディカイザーはキングライドブツカーのガンモードを放ち相殺する。光弾の威力は凄まじく爆発の衝撃が大きいうえに、当たった地面や鉄パイプなどが消滅していた。

「やるな。だがそれだけじゃないだろ！」

「その通りだ！」

クイーンドライバーもソードモードにして二刀流で突っ込むと、シャイニングキバもザンバットソードとガルルセイバーの二刀流で応戦する。高速の斬撃を連続で放つ二人の周りの物はその余波でどんどん斬り裂かれていった。

「まさかのアームドモンスターとザンバットソードの瞬間的な召喚に光による攻撃。結構強いな！」

「皆を守る皇帝としてこれだけの実力を身につけなければならないのは当然だ！」

「フツ、お前良い奴だな。」

「貴様も正義に対して手加減していただろ？」

「見てたんだな？」

「ああ。だが、貴様の今の攻撃などを見て分かった。お前は悪い奴ではないとな。」

お互いにゆつくりと立ち上がりながら武器を戻し、変身も解除しようとしたその時突如として赤黒い光線が放たれそこら一帯を巻き込む爆発が起きる。

「「うわあああああああ！」」

二人がその光線がやってきた方向を見るとそこにはシャイニングキバとは正反対の姿の戦士がいた。ワインレッドの装甲に黒いスーツ。緑の魔皇石が埋め込まれた黒いコウモリの翼のような鎧。小さい翼が生えた緑の複眼のマスクと黒いマントが特徴の戦士の名前をデイクイザーが告げる。

「ダークキバか……」

「絶人……はあああああああ！」

「おい待て！」

シャイニングキバがドッカハンマーを振りまわして行くが、それをヒラリと躲し緑と黒のキバの紋章で動きを止めると赤黒い何かを纏った漆黒のザンバットソードを出現させる。

「ぐっ……やめろ絶人。どんな事をしようとお前の愛した響は

光線がぶつかり合う中心で大爆発が起き、その衝撃で両者とも吹き飛ばされる。先にダークキバが立ち上がるとどこからか多数のファンガイアが現れ、ダークキバはどこかへと消えた。

「くっ！絶人おおおお！」

「こいつらは俺に任せろ！」

【ATTACK - RIDE・・・BIG - SLASH!】

直ぐ様1枚のカードを取り出し発動すると、黄金の光を纏った巨大な光の刃となったキンググライドブッカーから強烈な斬撃を放つ。そして大量にいたファンガイアを数回薙ぎ払うだけで全滅させた。それが終わるとお互いに変身を解き帝は呟いた。

「話してもらおうか。今まで何が起こったのか……………」

それに奏牙は黙ってうなずくしかなかった…………

第1楽章 光と闇の不協和音 (後書き)

次回をお楽しみに！

第2楽章～鍵は音の響き、そして月は覚醒する～（前書き）

今回、冬花にさらなる変化が！

第2楽章　鍵は音の響き、そして月は覚醒する

　白光城

　ダークキバとの戦闘を終え帝と奏は、目を覚ました冬花とイクサに変身していた青年、青井正義あおいせいぎと合流し奏牙が住んでいる純白に輝く城、白光城しろひかりじょうへと来ていた。

　「へえ、いい城に住んでるな。」

　「そうか。さてお前達にも話さなければな、俺と絶人の関係や光と闇の戦いをな。」

　王室へ案内される途中、実態化したアームドモンスターに驚いて冬花が斬りかかろうとしたのを帝が説明の補足として味方だと教えて阻止していたのはここだけの秘密である。

　「さて、ここが俺の部屋だ。自由に座ってくれ。」

　奏は専用の椅子、正義はその隣に立ち残りの二人は近くのソファに座る。そして紅茶とお菓子を用意されると奏牙は話し始める。

　「改めて、俺が光の皇帝の白夜奏だ。俺達の目的は人間とファンガイアの共存の維持と邪悪なる闇の精鋭隊の人間やファンガイアへの襲撃を防ぐ事だ。」

　「俺は元世界の帝王、天海地帝だ。よろしく。」

　「私は月海冬花です。」

「俺は……」「雑魚は引っ込んでろ。」「何だと貴様！」

「ほら、短気で奏よりえらそうにしてるその態度。気に入らないな。」

「確かに俺も気になっていた。正義、まずは精神面だな。」

「……申し訳ありません。」

正義は落ち込みながら部屋を出て行き、それを見送った後奏は話を続ける。

「そういえば、お前達は見たことも無い力で戦うな。あれは何なんだ？」

「あれは別世界の力。俺達は世界を旅する者さ。」

そして帝はディカイザーの簡単な説明と冬花の世界の事情などを教えた。それに奏は静かに聞くことしか出来なかった。

「まさか、俺の他にもキバがいるとはな……」

「ああ、そのキバにも俺はなれるし他のキバの世界のライダーにもなれるぜ。」

と言いながらキバの世界のライダー達のカードを見せる。それを奏は興味深く見ていた。そのまま帝は話を続けた。

「俺の親友に言われてな、この世界と他に8つの世界が危機を迎えていると聞いて俺達はまずこのシャイニングキバの世界に来た訳だ。」

「
と言った後、支配と覚醒の虹の説明や体験した冬花の説明も追加で教える帝であった。それを全て聞き終えたと今度は奏がしゃべりだす。」

「お前達の目的や話は、未だに信じられんが今はそれよりも絶人の事などを話しておくべきだな。」

「ああ、そうしてくれ。」

それに奏はうなずくと、近くの本棚から埃をかぶった古い分厚い本を出す。

「えっと、これは何ですか？」

「滅音絶人。光の皇帝である俺と対となる存在として生まれてきた闇の皇帝さ。奴は俺とまるで双子のように暮らしてきたその時の様子を納めたアルバムだ。」

帝がその埃を払いつつ、開くと確かに奏らしい子供と似た感じの子供が遊んでいる写真や皇帝の即位式らしき写真がたくさんあった。その時、冬花があることに気づく。

「あの皇帝さん。この私に似てるっぽい人誰ですか？」

「確かにどの写真にもこの人が映ってるな。誰なんだ？」

映っている女の子は冬花の様なドレスに銀髪で碧眼の冬花に似ている感じであった。それに対して奏は少し悲しい表情で答えた。

「その人こそ、絶人が誰よりも愛したファンガイアと人間のハーフであった音乃響^{おとのひびき}。彼女は生まれてから何年かで親を亡くし、ちょうど見つけた絶人に連れられこの城に来了。俺とも城に住んでる皆とも仲良くなつた響は特に絶人に懐き絶人もそんな彼女を愛した。」

「だが、その響つて子に何かが起きたからあいつは性格が変わつたんだろ？」

帝が言つた言葉に奏はうなずく。

「彼女は、この世界に出現した見たことも無い怪物に襲われ抵抗する間もなく殺された。その怪物は響だけではなく、多数の人間とファンガイアの命を奪つた。しかし、奴らはダークキバとなつた絶人の圧倒的な力で倒された。それでもあいつの悲しみは消えず、ずっと自分の部屋にこもり怪しげな実験や研究を行い続けた。そんな時にあいつは俺の目の前から自分の率いていた闇の精鋭隊を連れて姿を消した。」

「なるほど、それでお前やあいつは闇側のファンガイアを捕まえて反抗してくる方の奴は倒してた訳か……」

とさっきの行動を思い出しながら帝はしゃべる。それにうなずきながら奏は立ち上がり、帝の目の前まで来ると頭を下げて叫んだ。

「お願いだ、俺と一緒に絶人のしよつとしてゐる事を暴いてくれ！あいつは今、自分の部下を使って人間やファンガイアを見境無く襲っている……これ以上奴の暴拳によって人間やファンガイアの命が失われる所は見たくないんだ！そんな事、響は望んでないと思うんだ！」

「……頭を上げろよ、光の皇帝さん。俺達はこの世界を救いに来たんだ、この世界の仮面ライダーであるお前に協力しないなんて思ってたさ。」

帝は笑顔で、奏の手を取る。それに反応するように奏も顔を上げ、自然と笑顔になると手をしっかりと握る。

「私も出来るだけ協力します！」

その手を冬花も握り、三人はお互いに絶人の目的を暴く事を誓うのであった。

〈暗黒城〉

一方、黒雲によって空を覆われたどこかの森にそびえ立つ暗黒城の王室に絶人はいた。彼の両手からは人間のライフエナジーとファンガイアの魂がエネルギー状にした何かが王室の中心に設置された石化した恐ろしい姿の蝙蝠を模した鍔の付いた両刃の剣と禍々しい形をした盾へと注がれていた。絶人はそれを狂気の手で笑顔で見守っていた。

「もう少しだ……後もう少しで禁断の力を秘めた、全ての命を狩る剣と吸い尽くす盾が俺の物となる！待っている、奏牙。貴様とあの世界を支配する力を持つ戦士の命をいずれこの「メツバットセイバー」と「ゼツバットシールド」で奪い、必ず響を蘇らせてみせる！」

絶人の叫びと共に、赤い雷が石化した剣と盾に落ちその姿を現すのと同時に絶人はそれを合体させ後ろにたくさんいる部下のファンガイアに叫ぶ。

「良く聞け！ たった今、全てを絶滅させる禁断の力を俺は手に入れた！ 今こそ、光を闇が支配するときだああああああ！」

『ウオオオオオオオオオ！』

ファンガイア達が叫ぶのと同時に、彼らは絶人の作った魔方陣を通り奏牙のいる白光城へと進撃していくのであった。

「今こそ真の皇帝を決めるとき。いくぞ……キバットバット二世！」

「ああ、絶滅タイムだ。ガブリ！」

二世が噛みつく、絶人の顔に赤と緑のステンドグラスのような模様が表れ鎖と共に黒いベルトが出現。それにキバットを前に突きだし装着すると奇妙な音楽と共に波紋が広がるのと同時に絶人は叫んだ。

「変……身……！」

叫びと共にさらに波紋が広がり、彼の姿を闇の皇帝ダークキバへと変える。黒いマントを翻し彼の姿と同じように赤黒い波動を纏った闇のザンバットソードをゆっくりと構え魔方陣へと消えた。

「大変です！ 邪悪なる闇の精鋭隊が大勢で攻めてきました！」

「何だと！ まさか、絶人は最初から俺狙いか！」

「そうかもな。でも俺達は仲間だ、一緒に戦うぞ！」

「分かつてる！正義、冬花と一緒に戦える者達を集める！その他の者は避難させる！」

「お任せください！冬花さん、いきましよう！」

「はい！」

二人は近くの窓から飛び出すと、逃げ遅れた人達をかばいながら戦い始める。その様子を見ながら帝と奏も正門から出るとすでにたくさんファンガイアが迫ってきていた。その中にはチェックメイトフォーと呼ばれる凄まじい力を秘めたファンガイアと仮面ライダーサガがその中心で光側のファンガイアをどんどん破片へと変えていった。

「これ以上、被害は出ません！行くぞ、帝！」

「了解だ、奏！」

奏牙はシャイニングキバットに腕を噛ませ、帝はバツクルの装着と同時にキングライドブッカーからカードを取り出し構えると同時に叫ぶ。

「変身！」

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

奏牙は高貴な音と共に青白い波紋に包まれ、光の皇帝シャイニングキバへと姿を変え、帝は黄金に輝く12体の虚像に包まれ顔にライドプレートが刺さり色が付くのと同時に世界の元帝王ディカイザー

となった。

「そついえば聞きたいんだが、お前は何者なんだ？」

「平和という支配を与える通りすがりの元帝王だ。しっかり頭に覚えろよ！」

そう言いながらキングライドブッカーをソードモードにし、何体かのファンガイアを斬り裂きながらチェックメイトフォーとサガの居るところへ向かうデイクaiserを見ながらシャイニングギバはフツと笑った。

「おもしろい元帝王だな。さあ、聖なる光の制裁を味わえ！」

青白い光の波動を纏った光のザンバットソードを出現させ、また彼もファンガイア達へ斬りかかっていった。

「さあ、お前達の命を神様に返せ！」

街にいた人間などの避難を終え、その中で襲い来るファンガイア達をイクサカリバーの斬撃で斬り飛ばしていくイクサ。その隣では戦えるファンガイアと冬花が協力して戦っていた。

（ツギハミギ、ソノツギハマシウメン。シツカリネラツテキルン
ダ……）

「分かったよ！えいっ！やあ！」

「グワアアアア！」

雪月花の戦えば戦うほど強くなる性質のおかげで、数が減るほど冬花の斬撃と身のこなしは鮮麗されていく。そのおかげで他のファンガイア達も負けにくいぐらいに頑張って戦っていく。しかし、その場の全員へ向かって大きな三日月状の赤黒い斬撃波がいくつも飛んでくる。

「うわあああああ！」

「ダークキバ様あああああ！」

それをイクサと冬花はギリギリで躲すが、反応が遅れた光側のファンガイアと突然の事に驚いた闇側のファンガイアは躲せずそのまま斬り裂かれ悲鳴と共に破片とкас。斬撃波が飛んできた方向には闇のザンバットソードと漆黒の禍々しい形の刃と小さい黄色い魔皇石が目のように埋め込まれた真紅の蝙蝠のような鍰と黒い持ち手が特徴の全ての命を狩る禁断の力の一つ「メツバットセイバー」を構えたダークキバがいた。

「やはり雑魚では意味がないな……」

「……くっ！絶人様、あなたともあろう者が何故こんな事を！」

イクサは勢いよく、向かっていくがそれに対しダークキバは赤黒い光線を連発してイクサを吹き飛ばす。さらに空中を吹き飛んでいるイクサをダークキバが追い打ちするように闇のザンバットソードで斬り、吹き飛ばした。

「うわあああああ！」

「正義さん！」

地面にひびが入るほど叩き付けられたイクサに駆け寄る冬花。それを見てダークキバは少し動揺するがすぐさま冬花へ近づき斬撃を叩き付ける。

「きゃあ！」

「一瞬、響かと思ったがあいつは俺の目の前で息を引き取った。顔の微妙な部分が違う！」

連続で斬撃を叩き付けるがそれを冬花は雪月花で何とか受け流す。そして一端離れると斬撃波をぶつけ合うのであった。

その頃、デイクイザーはクイーンドライバーのソードモードも使って1枚のカードを発動した。

【ATTACK - RIDE・・・CROSS - SLASH!】

「ハアアアアア！ハア！デヤア！ウリヤア！」

「な、なんだこの力はあああああ！」

「バカなああああああ！」

強烈な二刀流の斬撃が何体ものファンガイアとチェックメイトフォアのルーク、ライオンファンガイアとビジョップのスワローテイルファンガイアを連続で斬り裂きそのまま破片へと変えた。

「続いてこれだ。」

【ATTACK-RIDE・・・STING-SLASH!】

今度は連続で放たれる強烈な突きで後ろから襲ってきたファンガイアを貫き爆発させる。するとどこからか真珠のような物がディカイザーを襲うがそれを何とか全て斬り裂くとクイーンであるパールジェルファンガイアがジャンプしながら襲ってくる。その攻撃をかわすとパンチやキックのラッシュを躲しながらガンモードにしたキングライドブッカーとクイーンドライバーの銃撃を近距離から食らわし吹き飛ばす。

「闇の皇帝に逆らう愚か者は私が倒す!」

「残念だが俺は元でも帝王なの。しかも世界を支配していたな!」

キングライドブッカーから一枚のカードを取り出すと、それをクイーンドライバーで発動する。

【ATTACK-RIDE・・・THUNDER-BLAST!】

「あんたの夜が来る・・・ってな。」

「私のをパクるなああああ!」

電撃を纏った光弾を受けながら向かってくるパールジェルファンガイアを見て1枚のカードを今度はディカイザードライバーで発動した。

【FORM-RIDE・・・KIVA-EMPEROR!】

「テンション、フォルテッシモ!」

その音声と共に左腕に小さい金の龍のような生物タツロットがくつき、黄金の蝙蝠がディカイザーを包み姿をキバの最強形態エンペラーフォームへと変わりDキバ・エンペラーフォームとなると黄色い縁のカードを直ぐ様発動した。

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・KI・KI・KI・KIVA!】

「エンペラーフォームブレイク!」

そのままカウンターのように、赤いキバの紋章のような爪を纏った連続蹴りをパールジェルファンガイアへ放った。

「ふ、不覚!」

いくらか小さい爆発を起こしながらパールジェルファンガイア叫ぶと、結晶のように固まり爆発して破片となった。そしてシャイニングキバの方も終わりが近づいていた。

「どうした、その程度か? キングとやら。」

「くっ、何故この俺の攻撃が通じないのだ!」

そう、サガは知らぬ間にシャイニングキバの放つ光によって姿がほとんど確認出来ていなかった。

「さあ、制裁の時間だぜ!」

シャイニングキバットが叫ぶと、シャイニングキバは白の羽のマークが付いた透き通った青色のフェッスルを啜えさせそのまま吹かせ

る。

「ウェイク！アップ！」

それと同時に、シャイニングキバの周りにガルルセイバー、バツシヤーマグナム、ドッカハンマーが浮かぶ。さらに青く輝く白いキバの紋章がサガを捕らえしびれさせる。

「ぐおわあああああ！」

「行くぞ！」

まずはバツシヤーマグナムから白い光を纏った水弾をこれでもかといくらに放ち、その次にガルルセイバーを持ちながら光速で斬りつけると空中からドッカハンマーで紋章ごと砕くように叩き付ける。

「があああああああ！」

「そろそろとどめだ！」

フラフラ立ち上がったサガへ光を纏ったパンチとキックのラッシュを食らわせた後ザンバットソードに纏わせた白い大きな刃で一閃し空中へ斬り上げるとそれ以上に高く飛び、後ろに宙返りし叫ぶ。

「ドカバキ・シャイニングザンバットブレイク！」

そのまま白、青、緑、紫の四色の光を纏った強烈な両足蹴りをサガに決めると、サガはそのまま白いキバの紋章と共に消滅した。そして地面に着地したところへ元の姿になったデイクイザーと合流しイ

クサの元に向かうのであった。

その頃、冬花の方も何だか決着が付きそうだった。どちらも肩で息をしながらまた剣と刀をぶつけ合う。そんな中、ダークキバが呟いた。

「おいお前、響にそっくりなんだ・・・俺の后になれ！」

「いやです！私の相手は私で決めます！」

「ならばこのまま死ね！」

「きゃあ！」

強烈な横薙ぎで雪月花を吹き飛ばされ、さらに自身も壁に叩き付けられ元に戻る。その時には赤黒い波動を纏わせたザンバットソードを構えたダークキバがフェッスルを発動していた。

「ウェイクアップ4！」

「絶滅・ザンバット斬！」

さらにその波動は大きくなり、波動を纏った闇のザンバットソードをダークキバが冬花の頭上に構えるとそのまま振り下ろす。その時冬花の周りがスローモーションのようになり、やって来たディカイザー達もそれを見て叫んだ。

「やめろおおおおおお！」

「絶人やめるんだあああああ！」

「冬花さああああああん！」

（フユカアアアアア！）

（私、もう終わりなのかな・・・）

そう冬花が思ったとき、何か不思議な事が起きた。冬花にしかなじられないが、自身を何かが貫く感じがすると瞳の黒い部分が獣のようになるのと同時に彼女の中の何かのスイッチが発動した。

ガシッ！

「何！？」

「冬花・・・？」

「ザンバットの一撃を素手で？」

「一体何が・・・ハッ！皇帝様、デイカイザーあれを！」

イクサが指を差した冬花の背中を見ると、そこからは大きなロイヤルブルーの結晶のような翼が生えていた。それに全員が気を取られていると冬花はダークキバを蹴り飛ばす。彼女の髪も再び銀となりそこからさらに刃のような形状となると同時に青いラインが入り冬花は冷たい声で叫んだ。

「あなたを・・・斬る！」

叫びと共に空は夜となり、その時の月は禍々しい程に青く輝いてい

た。

第2楽章ゝ鍵は音の響き、そして月は覚醒するゝ（後書き）

ディケイド系はすごく難しいという事を改めて実感した気がしました。

第3楽章 〽️ 思いをレクイエムに乗せて 〽️ (前書き)

今回でシャイニングギバの世界は終了です。

第3楽章　思いをレクイエムに乗せて

謎の変化を遂げた冬花は壁に突き刺さっていた雪月花を勢いよく引き抜くと、更に手の中に出現させた光の中から大きな青い剣を引きずり出しダークキバへ巨大な青い波動を十字にして放つ。

「ぐっ……ぐはあああああああ！」

ザンバットソードとメツバットセイバーで何とか防ぐが、吹き飛ばされ遠くのビルにめり込み下の地面に落ちる。それに伴い変身も解除される。

「冬花！目を覚ませええええええ！」

【ATTACK-RIDE・・・BLAST！】

デイクイザーは暴走している冬花を止めるために両手に持ったキングライドブツカーとクイーンドライバーから黄金の光弾を大量に連射する。しかし……

「すでに私は斬ったという結果しか残さない！」

その光弾は出た直後に全てが真つ二つにされ、消滅してしまう。それだけではなく、近くに残っていたファンガイアも含めデイクイザー、シャイニングキバ、イクサも斬られたように火花を散らしファンガイア達は全滅してしまう。

「な、何て力なんだ……光のキバの鎧でも耐えきれないなんて……」

「冬花さんには一体何が……」

そして冬花が大技を放とうとした直前、まるで糸の切れた人形のようにつつと元に戻り倒れてしまう。その冬花の近くに急いで近寄る、変身を解いた奏、正義、帝。絶人はそれを気にすることなく、メツバットセイバーにファンガイア達の魂を取り込んでいく。

「絶人お前一体何を！」

「……つつ、知りたければ明日の午前9時に思い出の教会まで来るがいい！その時こそ、響の復活とこの世界の終わりの時だ！」

奏の叫びに答えながら、絶人は闇の扉の中へと消えていった……

（白光城）

「思い出の教会って何だ？」

王室のベットに気絶している冬花を寝かせながら、帝は絶人の言っていた思い出の教会について奏に聞く。すると、奏は静かに呟く。

「俺と絶人、そして響がいつも遊びに行った今はもう誰も使っていない教会だ。それでも、俺達の思い出の地には変わりはない。」

「そうか。言っておくが俺も行くからな？」

「分かっている。お前と一緒にならあいつを止めれるはずだからな……」

そして、正義に明日は冬花の側にいるようお願いした後、帝は外を散歩していた。しかし、唐突に振り向くと闇の中へ向かって眩く。

「出てこいよ。そろそろお前らの正体が知りたかったしな。」

そして闇の中から出てきたのは青いスーツに身を包んだ髪も瞳も青い青年だった。そして青年は不適な笑みを浮かべながら腰に謎のベルトを巻き付け、クリスタル状の棒の様な物を差し込み叫んだ。

「変身！」

【CHANGE - AQUA!】

謎の音声と共に強烈な水流に包まれ、水しぶきを起こしながら出てきたのは青年ではなく見たことも無いライダーだった。

「俺の名は仮面ライダーアクア。世界から忘れられた全てを超越するライダー達の集う究極の組織、エレメントの水を司る者！」

アクアは叫びながら、ベルトからクリスタル状の棒を取り出すとそこから青い光刃を出現させ帝へ斬りかかる。それをいくらか躲し右腕で防ぐと、そこだけを変身させてから一気に変身する。

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

デイカイザーに変身すると、キングライドブッカーをソードモードに変えアクアの剣とぶつけ合う。いつの間にかどこかのドームに変わり、観客席を間に挟みながら剣をぶつけ合っていく。そして互いに光弾と水弾を浴びせるとアクアは武器を納めデイカイザーといくら殴り合い、デイカイザーがカードを発動しようとした瞬間、液

状化して距離を取り、支配と覚醒の虹を出現させる。

「な、お前らだったのか!」

「まあ、そういう事さ。今回はただの自己紹介だが、次の世界ではもう容赦しないぜ?」

そう言っただけでアキラはその赤い複眼を輝かせながら虹の中へ消え、デ
イカイザーの変身を解くと元の世界へ戻る。

(あいつは一体何だったんだ?そしてエレメントとは?)

と考えながら帝は奏の城へと戻るのであった。

〔午前9時〕

約束の時間となった朝、二人は思い出の教会へと来ていた。まわり
にはファンガイアの気配も邪魔をする者のいる気配はない。ただ、
感じるの教会の中から感じる執念だけだった。

「なあ、帝よ。」

「……何だ?」

「もしもの時だから教えておく。貴様を全てを支配する魔帝と俺に
教えたのは、白いドレスの少女を中心とした何人かの男女の集団だ
と。」

「……ありがたいが、これから俺達が行うのは説得だ。死に行
く戦士じゃなくて、一人の皇帝としてもう一人の皇帝を止めるんだ
ろ?」

「そうだな。あいつは、本当は良い奴なんだ。こういうのはもっと早くやるべきだった……響はこういうのを望んでない。この世界の平和を守り続けるのがあいつの……響の願いだと俺は絶対に伝える！」

真の目的が判明した時、キングライドブッカーから虹色の光と共に3枚のカードが現れ絵柄を復活させる。それを確認しながら教会に入った二人の見た物は想像を超える物だった。

「絶人、お前は何をしているんだ？」

奏牙と帝が見た物それは……絶人の正体であるバットファンガイアの姿で今まで集めたと思われるライフエナジーと魂をメツバットセイバーに込めた状態でゼツバットシールドから抜こうとしている様子であった。1? 抜くことに凄まじいエネルギーが周りに流れ、教会が壊れかけていた。

「よう、奏牙。俺はな、響が死んだ日からずっと悲しみに満ちた日々を送っていたんだ……。でもそんな死人同然の俺に禁断の力を秘めたこの剣と盾について書かれた書記を世界の旅人という女がくれた！そして今日というこの日まで、この剣と盾に人間のライフエナジーとファンガイアの魂を吸わせ続け今、この剣を抜いてお前らごとこの世界を一端リセットし、響と新たな世界を築くのさ！あはははははははははは！」

どんどん剣を抜いていく絶人。だが奏牙の表情に帝と出会ったときに見せた迷いなどは無かった。親友が暴れるかもしれない、だけどその時は自分が止めるし全部終わったらこれから自分が支えていくという覚悟と親友の悲しみを知らなかった罪を背負うという覚悟の

二つが分かる表情で奏牙は呟きだした。

「響は、お前の響はこんな事で復活しても喜ばないぞ！」

「何？」

「あいつがいつも望んでいたのは何だ！何かを失ってまで壊してまで新たな世界を築いて自分を蘇らせることじゃない！人間もファンガイアもずっと一緒に平和に暮らしていける世界を作る事だ！」

確かにお前の悲しみを癒せなかった俺にも罪はある。でもこれから！俺が、いや俺達が響の分まで生きて一緒に平和な世界を作ろう！もう絶対にお前を一人で悲しませやしない！」

「……それがお前の答えか？」

「ああ。」

「……笑わせるな！俺に大事なものは響だ！お前や地位や共存などどうでも良いのだ！」

そう絶人が叫んだ時、帝が反論するように叫ぶ！倒れそうになった奏牙を支えながら。

「どうでもよくはない！こいつはお前が変わったのは自分のせいだと、悲しみを分かってやれなかった自分のせいだ！いつも罪の意識に捕らわれていた。」

それでも今までこの世界の平和を守り続けてこれたのは何故だと思っ！それはな、響やお前そして部下やこの世界に住む者全てに支えられていたから！そして自分も皆を支えたいと思い続けていたから！

大事なのは一つの事や過去の事に集中するんじゃなく、物事全てを見ることとお互いに支え合って行くことだ！だからお前もまずはこいつを見習ったらどうだ！」

帝の言葉に表情を歪ませながらダークキバットに腕を噛ませ、絶人は叫んだ。

「貴様は一体何者だ！」

奏牙がしっかりと踏みとどまったのを確認すると、デイカイザドライバーを装着しキングライドブッカーから1枚のカードを取り出し見せつけると叫んだ。

「平和という支配を与える通りの元帝王だ！しっかりと頭に覚えとけ！変身！」

「俺達も行こう、シャイキバ！」

「おう！いつでも行けるぜ！」

「行くぞ、絶人！変身！」

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER！】

自分を表す言葉を言い放つと、隣の奏牙もシャイニングキバットを腕に噛ませ二人は同時にデイカイザーとシャイニングキバに変身する。そして絶人も叫びながらメツバットセイバーを引き抜き、闇の波動と共にダークキバへと変身する。

「いでよ！我が下部達よ！」

ゼツバットシールドから赤黒い光を放つと教会の床から大量のファンガイアを出現させる。しかし、すぐさまシャイニングキバが光線を放ちファンガイアを吹き飛ばすとその煙の中からディカイザーがクイーンドライバーを撃ちながら近づいてくる。

「無駄なあがきを！」

「無駄じゃないさ！」

光弾を弾きながら空間を歪める程の斬撃を放つダークキバに対し、キングライドブッカードをソードモードに直ぐ様変え、鏑競り合う。そこに間髪入れずシャイニングキバが光のザンバットソードを振り下ろすがそれはゼツバットシールドによって防がれる。さらにディカイザーとシャイニングキバが連続で斬撃を放っていくが、ダークキバはそれをメツバットセイバーとゼツバットシールドでうまく防御しながら二人を吹き飛ばす。

「甘い甘い甘い！甘すぎるぞ！そんなので俺を止められると思うのか！」

追い打ちを掛けるかのごとく、赤黒い光弾、光線、斬撃波を放ち教会の壁の一部ごと吹き飛ばす。

「フツ……俺に逆らうからこうなるんだ……響さえいればそれでいい。」

そして後ろを振り向いた瞬間、何かがぶつかってくる。そしてもう一度振り向くとそこにはほぼ無傷で立っているディカイザーとシャ

イニングキバが光弾を放った後のようだった。

「何度でも言う、響が望むのは平和！復活じゃない！」

「今度はこっちの反撃だ！」

「俺はそれよりも、愛が欲しいんだよおおおおおおお！」

二人の言葉に激怒したダークキバはメツバットセイバーとゼツバットシールドを合体させ「ゼツメツバットソード」にすると、ウェイクアップエッスルを何度も叩きメロディを奏でる。

「ウェイクアップ！オーバー！」

「真！絶滅ザンバット斬！終わってしまえええええええ！」

赤黒い虹の光を纏ったゼツメツバットソードを振り下ろし、ディカイザーとシャイニングギバを襲う。それをシャイニングギバが光の壁で防ぐが直ぐ様ひびが入る。しかし仮面の奥で帝はニヤリと笑いながら、キングライドブッカーから新たに現れた虹色の縁と金の背景でシャイニングギバが虹色の複眼とマントの姿で虹色のザンバットソードを掲げているカードを取りだし、発動する。

【FINAL - WEAPON - RIDE . . . SH . SH . SH .
SHINING - KIVA !】

「くすぐりも痛みもないぞ！」

「な、何だと!？」

そしてデイクイザーが両手で背中に触れると、シャイニングキバの胸の中から虹色のザンバットソードが現れ、シャイニングキバの複眼とマントを虹色に変える。それに反応するかのように、光と闇のザンバットソードが合体し回転、強力な斬撃をそのまま跳ね返しゼツメツバットソードごと外へ吹き飛ばした。それによってゼツメツバットソードが破壊され、ダークキバも全身の装甲にひびが入った状態で倒れていた。

「ば、バカな……その力は何だ！」

ダークキバはボロボロの状態で立ち上がり、叫ぶとシャイニングキバは静かに呟いた。

「帝との絆の力だ！」

「ふ、ふざけるなああああああ！」

「ウェイクアップ2！」

ダークキバはウェイクアップエッスルでダークネスバーストエントをそのまま走って放ってくる。それに対し、ディカイザーはもう1枚の虹色の縁のカードを発動した。

【FINAL - ATTACK - RIDE . . . SH . SH . SH .
SHINING - KIVA!】

それに合わせ、虹色に輝く聖なるザンバットソードを矢のように闇と光とザンバットソードを弓のように構え、どんどん光を集める。

「響かせろ。お前の思いを！」

「ああ！」

そして完璧に光がたまるとザンバットが剣の先端に移動、そしてそのまま聖なるザンバットソードを放つ。それはダークキバを貫き、いつの間にかそれを後ろにいたデイカイザーがキャッチ。光と闇を纏ったザンバットソードを構えながら走ってきたシャイニングキバに合わせデイカイザーも走り、そして同時にダークキバを斬り裂く。その必殺技の名前は「デイカイザーレクイエム」、それを食らったダークキバは全身のひびから光を放ちながら眩いた。

「そうか……間違っていたのは……俺の方か……」

「お前の響への愛は間違いじゃない。だけど、方法を間違えていたんだ。」

「お前の思い……やっと……分かった……もうちょつと早く……分かった……」

そして白い光と共に、彼は消滅した。シャイニングキバは静かに、仮面の奥で泣いていた。そして彼は呟く。

「あいつは……救われたのだろうか……」

「お前の思いが分かったんだ……救われたんだろうよ。」

シャイニングキバは闇のザンバットソードを地面に刺す。そして振り向くと変身を解きながら、同じく変身を解いた帝へ言った。

「ありがとう、帝。」

「フツ……俺はちょっと手伝っただけさ。」

そして二人は空を見る、あの世でやっと再会した親友とその親友に愛された少女の事を思いながら……

（翌日）

帝と起きた冬花、そして奏牙はそれぞれトランペットとフルートとヴァイオリンを演奏していた。それはまさに絶人の悲しみが起こした事件で命を失った者達全ての魂と絶人と響に安らぎを与えるためのレクイエムとなっていた。そして……演奏を終え、帝と冬花は城の門の所で奏牙に別れを告げていた。

「さびしくなりますね。」

「ああ。でも、俺はあの二人の分までこの世界を平和で有り続けられるようにしていくさ。」

「頑張れよ。俺達も、頑張るからな。」

「もちろんだ！」

そして三人は握手し、それぞれの家へと戻っていく。奏牙は世界の平和のために、帝と冬花は他の世界を救うために……

（しかし、あの冬花の変化は一体？）

と考えながら、帝と冬花が家に入るとシャイニングギバとダークギバが描かれていた絵画の絵が変わっていた。

「あつ！奏牙さん達の絵になってますよ！」

「確かにな……」

その絵はヴァイオリンを演奏している奏牙を見守るかのように、空から絶人と響が穏やかな笑顔を浮かべているようで、横には薄く向かい合っているシャイニングキバとダークキバが映っていた。それを近くで見ようとした冬花が手に取った瞬間、絵が再び変わりだす。

「こ、これって……」

「次は、ツヴァイの世界のようだな……」

映っていたのは暗い空間で、オレンジの複眼を光らせる青いラインが特徴の戦士だった……

第3楽章〱思いをレクイエムに乗せて〱（後書き）

次回はファイズ系の世界です。

設定その2（前書き）

今回はディカイザーの使用するカードについての設定です。数は多いですが、全て使われるかは不明。

設定その2

デイクイザー所持カード設定

〈昭和ライダーカード設定〉

デイクイザーは世界と全ライダーの意思で生まれたと言っても過言では無い。それを象徴するかのごとく、平成だけではなく昭和のライダー達にも変身が可能となっている。昭和ライダーズのカードの特徴はそのほとんどに、アタックライドやフォームライドが少ないもしくは存在しない代わりにバランスが取れており、どんな状況にでも対応出来ると言ったところである。

弱点やデメリットがあるとすればやはり、アタックライドやフォームライドがほぼ存在しないためにさらに強力な攻撃などを行える場合が少ない事と同じカードばかり使い続けて相手にパターンを読まれる危険性があるために帝並みの存在で無ければ、扱うのは難しい物となっている。

〈所持昭和ライダーカード一覧〉

- ・1号（アタックライド有り）
- ・2号（アタックライド有り）
- ・ショッカーライダー？1〜6（アタックライド有り）
- ・V3（アタックライド有り）
- ・ライダーマン（アタックライド有り）
- ・X（アタックライド有り）
- ・アマゾン（アタックライド有り）
- ・ストロンガー（アタックライド、フォームライド有り）
- ・スカイライダー（アタックライド有り）
- ・ZX（アタックライド有り）
- ・BLACK（アタックライド有り）

- ・RX（アタックライド、フォームライド有り）
- ・シャドームーン（アタックライド有り）

・真（無し）

・ZO（アタックライド有り）

・J（アタックライド、フォームライド有り）

↳平成ライダーカード設定

昭和ライダーカードとは違い、枚数、アタックライド、フォームライドがかなり多く、昭和以上のパワーと手数を持つ。しかし、万能というわけでは無く強力なカードを使用したり、何枚ものカードを同時併用すれば例え帝であれど、とてつもないくらいに疲労してしまふ。さらに通常の状態であっても昭和の方より負担が大きく、長期戦には向いていない。そのため帝は常に状況によって昭和と平成ライダーのカードを使い分けていかなければならないのである。

クウガ（アタックライド、フォームライド有り）

アギトライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り。マイルドとV-1は除く）

龍騎ライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

ファイズライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

剣ライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

響鬼ライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

カブトライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

電王ライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）

キバライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有

り)

Wライダーズ（アタックライド、フォームライド、オリジナル有り）
オーズライダーズ（アタックライド、フォームライド有り。プロト
バースは除く）

フォーゼ&オリジナルライダー（不明）

因みに奥の手として「禁断のカード」と呼ばれる物を何枚か所持しているがどういったものかは不明。

↓デイカイザー専用カード設定↓

デイカイザーはデイケイド、ディエンド以上の力を持ったライダーとされている。それを証明するかのごとく、他の次元を超えるライダーには無いカードや技を発動する事が可能となっている。色々組み合わせると新たな力が生まれることもある。

↓アタックライド（攻撃系）↓

スラッシュ（黄金の光刃を纏わせ強力な斬撃を放つ）

クロススラッシュ（キングとクイーン両方に黄金の光刃を纏わせ、

スラッシュ以上の威力を持つ斬撃を連続で放つ）

ビックスラッシュ（大剣もしくは長い太刀のような黄金の光刃を纏わせ重い一撃を放つ）

ステイングスラッシュ（黄金の光刃を纏わせ、高速かつ正確な突きを連続で放つ）

ウェーブスラッシュ（黄金の斬撃波を敵に飛ばす中距離専用の技）

フレイムスラッシュ（真紅の炎の刃を纏わせ敵を斬る。敵を少し燃やすレベルから極焰並みのレベルまで出力を調整可能）

アクアスラッシュ（青い水の刃を纏わせ敵を斬る。高圧水流のように何でも斬れたり、鞭のように伸ばす事も可能）

サンダースラッシュ（黄色い雷の刃を纏わせ敵を斬る。少し離れた敵に放電したり、電気ショックや黒こげになるほどの電撃を浴びせ

ることも可能)

ウィンドスラッシュ(緑色の風の刃を纏わせ敵を斬る。風の力で敵を高速で斬り刻み、カマイタチを放ったり回転させることで竜巻を起こせる)

アイススラッシュ(水色の氷の刃を纏わせ敵を斬る。ただ凍らせるだけでは無く、冷氣放射や湖を一瞬で凍らせる程の一撃を放つことが可能)

ポイズンスラッシュ(紫の毒の刃を纏わせ敵を斬る。様々な効果や強弱、時間差に調整でき最大レベルはいかなる物も30秒ほどドロドロに溶かす)

ライトスラッシュ(白銀の光の刃を纏わせ敵を斬る。戦意を奪ったリ、癒しを与え邪悪を浄化する事も可能)

ダークスラッシュ(漆黒の闇の刃を纏わせ敵を斬る。恐ろしい破壊力を持ち、敵の命を奪うと傷などを回復できる)

ブラスト(黄金の光弾を連続で敵に放つ。ホーミング弾やスプレット弾のように放つ事も可能)

ツインブラスト(キングとクイーン両方からぶらすと以上に強力な光弾を広範囲且つ大量に放つ)

レーザーブラスト(黄金の光線を放ち、攻撃するだけでは無く光線が通った場所を爆発させる)

チャージブラスト(黄金のエネルギーを集め強力な光弾を放つ)

ナパームブラスト(山なりに飛ぶ爆発する黄金の光弾を放ち、広範囲を攻撃する)

スナイプブラスト(遠く離れた敵を打ち抜く高速の光弾を1発ずつ放つ。距離は最大で5000m)

ピットブラスト(浮遊する光弾を最大8発放ち、それぞれを自由自在に操る。本人の集中力と正確さが大事)

フレイムブラスト(フレイムスラッシュのような真紅の火炎弾を連続で放つ。火炎放射も可能)

アクアブラスト（アクアスラッシュのような青い水流弾を連続で放つ。水流放射も可能）

サンダーブラスト（サンダースラッシュのような黄色い電撃弾を連続で放つ。電撃放射も可能）

ウィンドブラスト（ウィンドスラッシュのような緑色の疾風弾を連続で放つ。竜巻をそのまま放つ事も可能）

アイスブラスト（アイススラッシュのような水色の氷結弾を連続で放つ。冷氣放射も可能）

ポイズンブラスト（ポイズンスラッシュのような紫色の猛毒弾を連続で放つ。毒液や毒ガスを放つ事も可能）

ライトブラスト（ライトスラッシュのような白銀の光弾を連続で放つ。閃光弾や光線を放つ事も可能）

ダークブラスト（ダークスラッシュのような漆黒の暗黒弾を連続で放つ。闇の波動や重力弾、ブラックホールを放つ事も可能）

（アタックライド（防御・特殊系））

バリア（ディカイザーの前方のみにどんな衝撃にも耐えることの出来る黄金の壁を出現させる。後方や横が守られず、動けなくなってしまうのが欠点）

リフレクト（ディカイザーの周りに全てを反射させる黄金のバリアを張る。強力な衝撃や連続攻撃、同時攻撃には耐えられない）

インビジブル（ディカイザーや指定した存在の姿を見え無くさせる。逃走や時間稼ぎに有効）

スキャン（透視、赤外線、サーモグラフィーの効果を与えディカイザーの視覚を強化する他、対象物の情報を得ることが出来る）

ミラージュ（ディカイザーの幻影を出現させる、イリュージョンの劣化版。主に時間稼ぎなどに使われる）

イリュージョン（実体のある分身体を最大で7体出現させ、同時攻撃を行う）

このカードをディカイザーは確かに所持されていると思われるが実際に使われたカードはまだまだ少ないし、未使用な物や存在が不確かな物もまだまだ存在する。ディカイザーの戦いと旅はまだまだ始まったばかりなため、これからの活躍が期待されている。

設定その2（後書き）

あくまで設定ですが、色々使っていけるよう努力していこうと思います。

再会と遭遇（前書き）

ツヴァイは最後にちょっと登場します。後、二人目のエレメントも少し出ます。

再会と遭遇

シャイニングギバの世界に平和という支配を無事与えることに成功した元世界の帝王、天海地帝こと仮面ライダーディカイザーと、妖刀雪月花を片手に帝と旅をする女子高生、月海冬花。二人がたどり着く世界に待っているのは希望か絶望か、世界の意志ですら分らないこの旅を二人は乗り越えられるのだろうか……

「ツヴァイの世界……か……」

絵柄が変わり、新たなライダーを描き出した絵画を見ながら呟く帝。その絵画を取りまじまじと見つめる冬花。二人は少し黙り込むと同時に呟いた。

「ピццаが食べたいな……」

どうやら二人は考えすぎてお腹が空いてしまったようである。帝は電話でピццаの出前を頼み待っている間にカードの整理とエレメントについての考察をし、冬花も雪月花の手入れをしていた。

（そういえば、冬花が変化したあの暴走形態。あれは何だったんだ……）

エレメントの事を考えつつも冬花に秘められし力の一端を心配する帝。チラッと冬花を見ると、冬花もこっちを見ていてニコツと笑う。それを見た瞬間、帝は物凄いスピードで顔を赤くする。

（な、何だこの笑顔！す、すげえ綺麗だ……ハッ！いけないいけない、変な妄想をすることだったぜ……俺の仲間の事を思

い出すんだ・・・シャイニングキバの元になっっているキバに変身する渡はディケイドと俺じゃまるで態度が違ったからな・・・観察者としての対応と親友としての対応って奴かな。そして忘れちゃいけないのがツヴァイの元となったであろうファイズに変身する乾巧、通称たっ君だ。まあ、あいつはその呼び方やめる！とか言って結構面白かったな。あいつら何やってんだろ？)

♪

「あ、はい。帝さん、ピザ取ってきますね。」

「おう頼むぜ。」

考え事の途中でインターホンが鳴ったので思考を一時中断。そして冬花がピザを取りに行き、帝も今度は1枚1枚カードを確認していく。途中でブレイドのカードを某オンドウル王子のように投げたり、カブトのカードを高く掲げてみたりして時間を潰しているが、中々冬花が帰ってこない。このままじゃ熱々トロトロなチーズが固まるだろ！と思った帝が玄関に向かうと口論しているような叫び声が聞こえる。良く耳を澄ますと・・・

「だから！マヨコーンと牛カルビを頼んだはずですよ！なのに何でポテトとバターベーコンなんですが！」

「うるせえ！腹の中に入りやあ同じだろ！てかおいしいピザをせっかく持ってきてやったのに何だその態度は！」

「ふ、二人とも落ち着きましょう・・・」

「「^{あなた}渡はだまってる（邪魔しないでください）！」

その口論に耐えきれなくなった帝は飛び出して大きく叫んだ。

「うるさい！俺は四つとも頼んだんだ！てか早くしないとチーズがかたま……るだろ？」

帝が叫びながら見た人物は先程思考の中で思い出していた親友であり仲間である二人だった。

「渡！たっ君！」

「お久しぶりです、帝さん。」

「おう……てかつその呼び方やめろ！恥ずかしいんだよ！」

「えっ……知り合い？」

帝が懐かしむように呟いた二人とは仮面ライダーキバに変身する人間とファンガイアのハーフ「紅渡」と、仮面ライダーファイズに変身するぶつきらぼうだが心優しいウルフォルフェノクの「乾巧」通称たっ君である。冬花をそっちのけに再会を楽しんでいる三人はそれぞれの性格を表したかのような反応をする。

「よし、二人とも。中で一緒にピZZaを食おうぜ。」

「いえ、お構いなく。」

「いや、この際一緒に食おうぜ。」

そして中へと入っていく三人を呆然と見ていた冬花は、ハツとなっ

て急いで床に放置されていたピZZaを持って居間へ戻っていった。

「いやあ、まさか映司の他にもこうして会えるとはな〜どうだ皆元気か？」

「はい。皆それぞれの自分の世界でやれることをやっています。」

「最近は原点とリイマジが融合したおかげで結構にぎやかだしな。」

「そうか・・・なあ、雅人はまだ俺のベルトを狙ってるのか？」

「いや、それがようやくあきらめたらしくてな。自分を見つめ直してくるとかで旅に出てたぜ。」

「渡の方は？ネガの世界から音也が帰って来たんだろ？」

「ええ。何だか最近は大ークライダー達によるコミュニティまで作り始めました。」

とそれぞれ話し合いながらピZZaを食べていく。因みに雅人とは仮面ライダーカイザに変身する青年の名前で、音也とは大ークキバに変身する渡の実の父親である。そしてピZZaを何枚か食べていたとき、巧は冬花のある仕草を見てあることに気づく。

「・・・おい、お前まさか猫舌か？」

「えっ？・・・あゝ、はい。ちよつと熱い物は苦手なんです。」

すると男三人で座っていたのに巧が急に冬花の隣に座り、目をキラキラさせ（帝達にはそう見える）ながら話し始めた。

「俺は乾巧。仮面ライダーファイズで今はクリーニング屋とピザ屋のバイトをやってる。よろしくな……後、さっきは怒鳴って悪かった。」

「いえ、こちらこそ。……もしかしてあなたも？」

「ああ。俺も猫舌だ。」

「本当ですか！？私、月海冬花って言います！よろしくお願いしますね！」

どうやら猫舌同士で気が合うようで、その様子を帝と渡は苦笑しながら平和そうに眺めていた。それから数十分後、渡と巧はそれぞれ時々こうして会いに来るかもしれないという事とまたいつか会おうと約束をして帰って行った。

「さて、俺達も行こうか？」

「はい。この世界も早く助けてあげましょう。」

そして二人が外に出ると、服装が変わっていた。帝は白色のどこかの学校の学ランで、冬花は青いブレザーにミニスカートで白い手袋を履き、網タイツとブーツにお嬢様風の帽子という服装を着ていた。

「なんだそれ？」

「さあ？分かりませんが……少しきついです。」

いや少し所の問題ではない。冬花の制服は結構サイズがきつく、色

々な部分を強調しすぎていた。帝はそれにドキドキしながらそれを
ごまかすかのごとくポケットや鞆をあさり、生徒手帳に書かれてい
た「スマートブレイン学園」へと向かった。それを近くの建物から
見下ろす、冬花より小さい緑色のワンピースタイプのドレスに身を
包んだ少女が居たという事に気づかずには……

「スマートブレイン学園」

帝と冬花が到着したスマートブレイン学園は、男子は白色の学ラン
で女子が青いブレザーというのが決まりらしく男子生徒と女子生徒
がそれぞれ細かい所は違えど、帝達と同じ制服を着ていた。

「うむ。ここがスマートブレインの経営している学校だったのは
分かったが、何をすればいいかは分からんな。」

「そのオルフェノクって何なんですが？」

「あゝ、それは『ぎやあああああああ！』あの悲鳴を上げて
る灰色の怪人のことさ。」

帝達が悲鳴の聞こえた方向を見ると、蛙の特徴を持つフロッグオル
フェノクがアルマジロの特徴を持つアルマジロオルフェノクにボコ
ボコにされていた。

「や、やめてください……」

『だまれ！貴様はラッキクローバー親衛隊の俺様に傷を付けたんだ・
……罰を与えてやる！』

そしてアルマジロオルフェノクが右手に持っていた剣をフロッグオ
ルフェノクに振り下ろすが当たる事は無かった。何故なら冬花が雪

月花を鞘に収めている状態で防いでいたからだ。

『おい貴様！俺の邪魔をして「いいんでしょ！」ぐはあああああ
！』

冬花はそのままアルマジロオルフェノクを蹴飛ばし、抜刀。髪と目つきを変化させると斬り込んでいった。

「あゝあ。冬花ってああなると止められんぞ。」

『あの、あなた達はまさか今日転校してきた……』

「ああ、天海地帝。あつちは月海冬花だ、お前は？」

フロッグオルフェノクは、しっかりと制服を着たおとなしめの眼鏡を掛けた男子となる。その男子は眼鏡を綺麗に拭いてから呟いた。

「僕は伊藤健吾。二人が転入する2年C組のクラス委員長をやっているんだ。」

「なるほどな、それで？あの幸せ四つ葉親衛隊に襲われた理由は？」

「えつと……ただ肩をぶっつけただけで……」

その理由に帝が啞然としていると、二人の近くまでアルマジロオルフェノクが飛ばされてくる。状態はもう健吾以上にボロボロで息も絶え絶えであり、灰もいくらか出ている。冬花はというと……

『許さない……そんなくだらない理由で……』

少しエコーの掛かった声で髪に刀のように青いメッシュを入れ、結晶の翼を2枚から4枚に増やした状態のまま呟くと刀を納刀し元に戻る。

「あれ……？私は何を？」

『しめた！くらえ蛙野郎！』

冬花が戸惑っている内に、直ぐ様回復したアルマジロオルフェノクが強そうな右ストレートを放ってきたが帝は片手一つで抑えつけそのままカードを入れた状態のデイクイザードライバーを装着し、バツクルを閉じた。

「変身！」

【K A M E N - R I D E ・ ・ ・ D E K A I S E R !】

『な、何iiiiiiiiiiiiiiii！』

アルマジロオルフェノクが叫ぶのと同時に、帝の体にデイクイザーのラインなどが金色の光を放ちながら流れるとほぼデイクイザーの姿となつて一気にライドプレートが顔に突き刺さり、光が放出されると共に仮面ライダーデイクイザーへの変身を終えた。

「さあ、お前にはこいつで十分だぜ。」

【K A M E N - R I D E ・ ・ ・ K A I X A !】

一枚のカードをドライバーに入れて発動すると、先程のデイクイザーに変身したときのように今度は黄色の光のラインが流れ、光を放

出すると共に姿を変える。黄色いXを模したラインと紫の複眼を持つファイズライダーの一人である仮面ライダーカイザへと変身した。

「うそ！帝君が！？」

「おい、あいつ仮面ライダーになったぞ！」

「生徒会長にしかねないのに！？」

と健吾を含め、戦いを見ていた生徒達が驚きながらそれぞれの言葉を呟いていく。それを気にすることなくキンググライドブッカーをガンモードにするとさらにもう一枚カードを発動した。

【ATTACK - RIDE・・・KAI X A - BRAYGUN！】

カイザの専用武器である「カイザブレイガン」を右手に出現させ、キンググライドブッカーと合わせて連射していく。

『があああああああ！』

「お前をこのまま倒す・・・って事でいいのかな？」

某ヤンデレな幼馴染みのように呟くと両方の武器をブレードモードに変え、どんどんアルマジロオルフェノクに斬撃を放っていく。アルマジロオルフェノクもパンチやキックを放っていくが全部躲され返り討ちにされてしまう。

「デーーカイザー！デーーカイザー！デーーカイザー！」

戦いを見ている生徒達がカイザコールを送ると、DKKはそれに手を上げて応える。そして、ライドブッカードを納めると2枚のカードを発動した。

【ATTACK-RIDE・・・KAIXA-POINTER!】

【FINAL-ATTACK-RIDE・・・KA・KA・KA・KA・KAIXA!】

「まあ、オルフェノクは元々人間だし・・・とどめは刺さないから安心しな!でいやああああああ!」

カードの効果でカイザポインターを付けたDKKはストレートキックと共に黄色い四角錐のターゲットサイトを放ちアルマジロオルフェノクを動けなくすると、そのターゲットサイトにドロップキックで突っ込む必殺技「ゴルドスマッシュ」を放ち、アルマジロオルフェノクをドリルの様に削るとそのままアルマジロオルフェノクの後ろに黄色い光と共にディカイザーの姿に戻った状態で出現する。

それと同時にアルマジロオルフェノクは青い炎と共に爆発し、黄色いXのマークを浮かび上がらせる。人団の勲章をいくつか付けた生徒は白目を剥いた状態で気絶していた。

「わあああああああああ!」

それと同時にわき上がる歓声にディカイザーは手を振りながら仮面の奥で笑っていた。

(やべえ。俺なんかすごい存在になってる。)

と思っていると、突然どこからか青い薔薇の花びらが舞ってくる。

その方向を見るとそこにいたのは一人の青いブレザーをゆったりと着こなし、たくさんの勲章を胸ポケットの部分に付けロングスカートと革靴を履いている茶髪の髪の一部をポニーテールにしている少女がいた。

「あの親衛隊のお方を吹き飛ばしたのはあなたですか？世界の元帝王さん。」

「……ここにも俺をそう呼ぶ人がいるのか。まあいい、質問の答えはYESだぜ？」

「そうですか……結構あの方は強い部類なんですけど、仕方ありません。あなたの実力を確かめさせてもらいます。」

「もしかして……あんたか？」

「……どうでしょうか？ただ私はあなたを悪いお方では無いと思っていますので。」

「模擬戦って奴だな……なら、いいぜ？……かかって来な。」

その少女は、ディカイザーとある程度の会話を終えると懷から青を主体としたボディに銀のラインや装飾をつけたベルトと液晶部分の大きい携帯を取りだし、ベルトを腰に装着。その携帯にコード281を入力すると、とある電子音声と共に携帯を顔の部分まで持ってきて斜めに構えると呟いた。

【STANDING BY】

「変身。」

【COMPLETE】

ベルトに携帯を斜めに差し込み、そのまま横に倒すともう一つの電子音声と共に彼女の体を複雑な形を描きながら青い光のラインが彼女を包み込んでいった。

「まさか……もう会えるなんてな、仮面ライダーツヴァイ！」

デイクイザーが叫びながら見つめるその先には、白銀に輝くボディに金色の装甲を持ち、オレンジ色の複眼を輝かせるギリシャ文字のTとYをいくつも組み合わせたような形の青いエネルギーラインとマスクを持つ戦士「仮面ライダーツヴァイ」が優雅に立っていた。

再会と遭遇（後書き）

原典ライダーの二人の性格はちゃんと表せたでしょうか？ツヴァイの戦闘力は次回にわからせていこうかと思います。後、変身に使ったのはiphoneです。

実力、シグマ、竜巻（前書き）

サブタイは今回の話を見ていれば分かるかと思います。

実力、シグマ、竜巻

仮面ライダーディカイザーこと天海地帝は、とある崩壊しかけた世界の住人で支配と覚醒の虹を通り抜けた少女、月海冬花と共に世界に平和という名の支配を与えるための旅をしていた。その二つ目の世界「ツヴァイの世界」で懐かしい友との再会の後、向かったスマートブレイン学園で自分たちの転入するクラスのクラス委員長でフログオルフェノクである伊藤健吾を、ラッキークローバー親衛隊という組織に所属しているアルマジロオルフェノクから抜刀した後、様子がおかしい冬花の助けもあって撃退（と言う名の気絶）するが突如現れた少女がツヴァイに変身し、ディカイザーとの戦いを始めるのであった……

「始めに名乗っておきます。私はこの学園で生徒会長をしている蔡^{さい}文姫鳳^{いぶんきほうき}姫です、以後よろしくお願いしますね。」

「俺は世界の元帝王の天海地帝、またの名を仮面ライダーディカイザーだ。」

お互いに自己紹介を終えると、ディカイザーはキングライドブッカイをソードモードで構え、ツヴァイはベルトにセットされたiphone型の変身端末「ツヴァイフォン」の液晶画面をタッチする。

【ZWEI・MUBA】

そして一つの電子音声と共に彼女の右手の中に球体状の光が生まれ、銃の様な形になると光が消えはつきりと形を映す。

（どうやら、デルタムーバーみたいな武器の様だ……つまり遠

距離なわけだが、こっちがあっちの懷に飛び込めばあるは……
」

とデイクイザーがファイズの世界のライダーの一人、デルタの持つ武器を思い出しつつ考えているとツヴァイがムーバーの照準をこちらに合わせているのに気がつき、右に側転すると今までいた場所にレーザーが飛んでくる。それに合わせデイクイザーは突っ込んでいくが……

「近距離ですね……ならばこれです。」

【MUBA - EDGE】

「何!？」

ツヴァイが再びツヴァイフォンの液晶画面にタッチすると、先程とは別の電子音声流れツヴァイムーバーの形を変える。ツヴァイムーバーの持ち手が垂直になるように曲がり、銃口らしき部分からはツヴァイの全身にあるエネルギー流路「フォトンストリーム」の中を流れる強力なエネルギー「フォトンブラッド」と同じ青色の光刃が生まれていた。

そしてデイクイザーの振り下ろそうとしていたキングライドブツカイをはじき飛ばし、連続で斬りつけ左足で思い切り蹴り飛ばす。

「ぐはっ!……っ、強え……奏牙とはまた違う感じで強え……」

「お褒めいただきありがとうございます。では今度はこれはどうでしょう?」

学園の芝生のある広場に建てられているオブジェに叩き付けられた
デイカイザーがツヴァイの力に驚愕していると、再びツヴァイがベ
ルトのツヴァイフォンの液晶画面にタッチした別の電子音声を響
かせる。

【MUBA - GATLING】

「が、ガトリングだと!？」

光に包まれムーバーエッジの形が大きく変わっていく。そしてムー
バーをトンファーの様に構えた形で銃口の下には大きな機関砲が装
着され銀と青のラインで彩られた「ムーバーガトリング」の引き金
を引くと、青い光弾がこれでもかというくらいにデイカイザーに直
撃する。

「うわああああああっ!」

体中から火花を散らし、今度はいくつものオブジェを壊しながら地
面に叩き付けられる。そしてツヴァイがムーバーに戻した状態で近
づいてくるのを見ながらデイカイザーは一枚のカードを取り出した。

「新しい力を試すでしょうか!変身!」

【KAMEN - RIDE・・・SHINING - KIVA!】

「・・・!なるほど、そうやって姿を変えるんですね。」

ツヴァイが感心している間に、デイカイザーが白銀の波紋と共に姿
形を変え何かをはじき飛ばす様な音と共にデイカイザーは新たな
姿、Dシャイニングキバとなりさらに一枚のカードを発動した。

【ATTACK - RIDE・・・HIKARINO - ZANBAD
- SWORD!】

そして右腕から引き抜くようにして、全てを白銀に染めた光の皇帝のみが持つことを許された「光のザンバットソード」を左手に構えると光速でツヴァイに近づき連続で斬り裂いた。

「きゃあ!・・・急に力加減が変わりましたね・・・」

「そうか?あまり変えてはいないぜ?」

ツヴァイは大きく吹き飛ばされながらも何とか着地し、DKSの強さの違いを眩きながらムーバーを連射するがDKSはそれに答えながら光の壁を最小限の大きさで発生させて防ぐ。そして再び光速で近づき斬り裂こうとするが・・・

「そう何度も食らいません!」

【MUBA - WHIP】

ツヴァイフォンの液晶画面をタッチし、別の電子音声と共にツヴァイムーバーをムーバーエッジの様に変えると銃口部分から青い光の鞭を出現させ、辺り一帯を薙ぎ払うように振り回す。するとDKSの姿が現れ、その腰にはぐるぐるとムーバーウィップが巻き付いていた。

「ハアアアアアアッ!」

「うおっ!?!」

そのまま地面に叩き付けられるのを何回も繰り返され、大きく飛ばされながらも態勢を立て直すとオブジェの上に立って別のカードをクイーンドライバーに挿入し発動した。

「ファイズ系にはファイズ系だよな！」

【KAMEN - RIDE・・・RIO - TROOPER!】

そして黄金の虚像が重なり、ファイズライダーズの量産型ライダー「ライオトルーパー」を3体呼び出しツヴァイに向かわせる。

「頑張れよ、兵隊さん。」

「そんな！大勢だなんて卑怯です！」

と言いつつも、ツヴァイはライオトルーパー達の攻撃をかわし、斬り裂いていく。さらにツヴァイムーバーに戻し一人ずつ的確に狙い撃ちし消滅させた。

「さすがだな・・・さて、そろそろフィニッシュと行こうか？」

「そうですね。十分あなたの實力という物は分かりましたし。」

二人はお互いに最後の攻撃にすると呟きながら、キングライドブッカーとツヴァイフォンに手を掛けようとしたその時だった。

「会長大変だ！この学園の近くにシグマが！」

胸ポケットに勲章を付けた制服を崩して着ている生徒が慌てた様子

でやってくる。それを聞いたツヴァイは驚いた様子で腕を震わせる。

「すみません・・・帝さん、着いてきてください！」

「あ・・・ああ・・・冬花！お前も来い！」

「・・・はっ、はい！」

それぞれ叫ぶと、デйкаイザーはマシンデйкаイザーに跨がりその後ろにずっと立ち尽くしていた冬花を後ろに乗せ、ツヴァイはツヴァイフォンの液晶画面をタッチしマシンを呼び出す電子音声を響かせる。

【AUTO - VAJIN - ZWEI】

するところからか、ファイズの専用ビークルであるオートバジンを青くし銀のラインを描いているバイク、オートバジンツヴァイが走ってきてツヴァイの目の前で止まりそのままツヴァイが乗り学園の正門から猛スピードで走り去っていき、デйкаイザーもそれに冬花を落とさないようにして追いかけた。

生徒達はそれぞれ、興が冷めたように教室の中へ戻っていったり先程の戦闘のことについて語ったりしていたが、健吾だけは何かすごく深刻な表情でデйкаイザー達の出で行った正門を睨んでいた・・・

（学園付近の道路）

デйкаイザーと冬花がツヴァイに着いていつてやって来た場所は、周りに色々な家のある広い道路だが今は平和とは言える状況では無かった。車は全て爆発した後のように炎を上げており、道路の至る所には衣服と大量の灰が残っていた。

「な、何ですかこれ……？」

「使徒再生だ……」

「えっ……？」

あまりに残酷な風景に言葉があまり出ない冬花の疑問に怒りを込めた声で答えるデイクイザー。そしてデイクイザーは説明する。使徒再生とは人間をオルフェノクに変える行為で適応出来た者はオルフェノクとなるが、それ以外は灰となると。そしてオルフェノクにも種類があり、自然と死んでオルフェノクに覚醒した者は「オリジナル」と普通のオルフェノクがあり、そのいずれも短命であると。

「……でも、私達の世界はそれでも人間とオルフェノクが共存して生きてくれました。でも……シグマが現れてからは……！」

冬花が顔を青くしていると、冬花が今何が起きているかを説明しようとして静かに呟いている時彼女は何か気づく。デイクイザーと冬花もその方向を見るとそこにいたのは大量のオルフェノクと……

「俺が現れてからは何だつて？ ツヴァイ？」

そのオルフェノク達の目の前を歩く強烈な殺気を放っている全身の姿を金色に染め、ギリシャ文字のΣをモチーフとしたフォトンストリームと緑のフォトンブラッドを持つ真紅の複眼とΣを90度回転させた触覚を持つ緑のマントと両腰にファイズライダースの一人で最強の部類に入る戦士、オーガの専用武器であるオーガストランザーの長剣モードのような武器を鞘に収めた戦士「仮面ライダーシグ

マ」が立っていた。

「あなたが現れてからその平和は壊れてしまった！人間や同族のオルフェノク達に使徒再生を行うのではなく、その命を吸って存命しさらに強力な存在となるという考えに共感した者達は今この瞬間も命を奪い続けているんですよ！そんな・・・そんな考え、私は認めたくないです！」

【MUBA - RIFLE】

ツヴァイムバーの持ち手の後ろ部分に長いグリップがあり、銃口が長く伸びたムーバライフルから高速の光弾を放つ。しかしシグマは左腰の鞘から専用武器「シグマ・ストライクテイル」を抜き、光弾を近くにいたソードフィッシュオルフェノクにはじき飛ばす。

「ぎゃあああああああああ！」

ソードフィッシュオルフェノクはそのまま灰化するが、それを気にすることなくシグマは歩き出しツヴァイ達に向かっていく。ツヴァイは何度も引き金を引くが全て弾かれるか、手下のオルフェノク達が盾にされて灰化していく。

「何てやろうだ・・・オルフェノクも元々人間。それを気にすることなくあそこまでやるなんてな！」

「私も許すことが出来ません！」

デイカイザーと抜刀した冬花もシグマに向かっていくがその目の前に突如として緑色の巨大で強烈な竜巻がオルフェノクを何体か巻き込みながら現れる。

「ほう……いいタイミングで現れたな。緑の暴風少女よ。」

ツヴァイとすでにムーバーエッジとシグマ・ストライクテイルで鏢競り合いをしているシグマが呟くのと同時に竜巻の中から一人の少女が現れる。黄緑色に輝く髪をポニテにし、同じ色の瞳を持ち同じ色の少し大きめのワンピースのようなドレスを着た小学生と中学生くらいの間の身長で麦わら帽子をかぶった殺気を纏っている女の子が現れた。

「ふふん♪アクアのお兄ちゃんが言ってた通り、眩しいお兄ちゃんだね♪」

（な、何だ？こいつもエレメントなのか？）

「ハアアアアアアッ！」

「………！冬花、よせ！」

仮面の奥で帝は疑問に思っていると、冬花がそのエレメントらしき少女に一気に接近し雪月花を振り下ろすが……

「まだ刀のお姉ちゃんには興味ないよ？」

「………！………きゃああああああっ！」

見えない風の壁で斬撃を防がれ、動きを止められたまま突風によって吹き飛ばされてしまう。そのまま冬花は電柱にぶつかり地面に倒れると気絶してしまう。

「冬花！……てめえ、ガキだからって許さねえぞ！」

とディカイザーが叫んだ途端、その少女の目つきが変わる。しかも先程とは比べものにならないほどの殺気と突風が噴出される。

「ガキだと？……勘違いしてんじゃねえよ！私はこれでも19だ！大学生と同じだぞゴラァ！」

（なっ！こんな小さい奴がか！？やばい……こういうときって大体は……）

言い方が荒くなり、自分の言い方も変わった少女に対して一種の危機感的な物を感じたディカイザーの予想は当たり、少女はアクアの男が変身に使ったベルトとクリスタルの棒の緑色に染まった物を合体させ腰に巻き付けるとクリスタルを引き抜き少女は叫んだ。

「変身してやるぞ！覚悟しやがれ！」

【CHANGE・TORNADO！】

アクアとは違う電子音声が響き、辺り一帯を吹き飛ばしかねない緑色の竜巻が吹き荒れ少女の姿を変える。その姿はアクアに酷似しているが、背は少女の時より大きく伸び、色も結晶のように輝く緑となり金色のラインに彩られた赤い複眼の戦士「仮面ライダートルネード」となり竜巻を振り払って姿を現す。

「フッ、あれだけの實力なら貴様ごと吹き飛ばしてくれるだろう……さらばだ弱き頂点に立つ者よ。」

「くっ！待ちなさい！」

ほぼ互角だったシグマとツヴァイの戦いはシグマが余裕だと感じ撤退した事によって終わったが、ツヴァイは周りに大量にあるシグマの灰化や命を奪われた者達の灰を見ながら膝から崩れ去った。

「ふっ……さて、この姿になったからには死刑確定よ？世界の元帝王。」

（また言い方と性格？が変わった……正直やりにくいぜ……）

先程とはまた言い方が違うトルネードに困惑しながら、ディカイザーはキンググライドブッカードクイーンドライバーを構え突っ込んでいった……

「……………」

気絶していた冬花の瞳が開かれたが、その瞳が妖しく輝いていた事には誰も気づいてはいないのであった……

実力、シグマ、竜巻（後書き）

次回でツヴァイの世界が終わり・・・何とトライRさんの「仮面ライダーディライト」世界の光導者」とコラボです！

限りある命を大切に（前書き）

今回、水音ラルさんの作品の仮面ライダー（のカード）が少し登場します。

限りある命を大切に

ツヴァイの世界で遭遇した、世界に悪の支配を与えるライダーシグマと、性格がどんどん変わる謎の少女が変身するエレメントのライダートルネード。スマートブレイン学園の生徒会長でツヴァイの変身者、蔡文姫鳳姫と共に、元世界の帝王で仮面ライダーディカイザーに変身する天海地帝と、とある世界で支配と覚醒の虹で覚醒した月海冬花はそれぞれ戦いを開始したが、ツヴァイの方はシグマが自分が有利と見て撤退し、冬花はトルネードの少女の攻撃らしい物で気絶、そして今ディカイザーとトルネードが戦闘を開始していた・・

【ATTACK・RIDE・・・BLAST!】

ディカイザーは手始めにキングライドブッカーをガンモードにし、黄金色の光弾を連射するが、それら全てはトルネードの発生させる風の壁で防がれディカイザーへと跳ね返って行く。それを回避するとディカイザーはキングライドブッカーをソードモードに変え、トルネードに接近し斬撃を幾度となく放つ。しかしトルネードは腰のベルトからクリスタルのロッドを抜き、緑色の光刃を発生させ受け止めディカイザーと同じくらいの斬撃を放つがこっちの方がディカイザーよりもスピードが速く、ディカイザーの体から火花を散らす。

「ぐおっ！・・・何て速さだ、俺でもギリギリで見えるくらいだぜ・・・」

「それだけじゃないわよ。」

ディカイザーが荒い息を吐きながら、トルネードを見ると彼女の両

手に緑色の風を凝縮したエネルギー弾が出現しており、それをトルネードは勢いよく両手を突き出し発射した。

「烈風弾！」

彼女の叫びと共にそのエネルギー弾のスピードはどんどん加速し、最高スピードに達するとデイクイザーに直撃し緑色の竜巻を発生させ吹き飛ばす。

「ガハアツ！？うあつ・・・・・・・・ぐふつ・・・・・・・・」

デイクイザーは数十mも吹き飛び、地面にクレーターを作るほどにめり込んでいた。トルネードは足から竜巻を発生させ近づくとデイクイザーの腹部を踏みつける。

「ウゲッ！？」

「アンツ、良いわ・・・・・・・・あの世界の帝王と言われたデイクイザーの悲鳴は格別よ・・・・・・・・」

トルネードにはどうやらSな部分があるらしく、デイクイザーを踏みつける度に聞こえる悲鳴による快感で体を震わせていた・・・・・・・・そんな時、トルネードは後ろから変な感覚を感じる。

「ん？何かしら・・・・・・・・！」

そこには先程気絶させたはずの冬花が無傷で立っていた。しかし様子が違っていた・・・・・・・・禍々しい青いオーラを身に纏い、背中からは青い結晶の翼が四枚出現させている銀と青の刃の様に変化し、うねうねと動いている髪をなびかせながら雪月花を抜刀すると三日月

のような歪んだ笑みを浮かべトルネードを斬り裂いた。

「キャア！？い、いつの間に……」

『帝さんに……手は出させない……私の恩人を……死なせない……』

冬花は青い結晶の刃と黒く長い棒で形成されている槍を出現させると狂ったように振り回しながら、トルネードをどんどん傷つけていく。そして青いエネルギーを纏わせた強烈な斬撃でトルネードをデイクイザー以上に吹き飛ばし、変身を解除させる。

「驚いた！刀のお姉ちゃんはまだまだ覚醒するんだね！今回はここまでにしておくよ！」

トルネードの少女に姿が戻っていたため、言い方と性格が最初に現れた時と同じ状態になっていた。そして少女は支配と覚醒の虹を出現させその中へと消えた。それと同時に駆け寄ってくるデイクイザーと動きが遅いツヴァイの方を振り向くと元の冬花に戻り倒れる。それをデイクイザーが支え、そのまま変身をお互いに解きそれぞれバイクに跨がる。

「復活させられなくてすいません……でも忘れません……」

「何か言ったか？」

「いえ、何でもありません……」

悲しげな表情の鳳姫を不思議に思いながら帝は一緒に学園をそのまま目指した……

「数日後」

あれから、シグマの発見情報は無く鳳姫も何だか元気が無い。帝は学園の外を歩いていると、そこに勲章を胸に付けた三人の生徒が居た。

「お前らは確か……」

「あなたは転校生の……我々ラッキクローバーに何か用でも？」

帝が話し掛けると、七三分けの眼鏡を掛けたキリツと制服を着ている生徒が答え、その両隣にいる制服を崩して着ている短い金髪の生徒と首の部分だけを開けている茶髪のウェーブが掛かった生徒が帝を見つめる。帝は思いきつてある質問をした。

「お前らの長である鳳姫のオルフェノク態や能力を見た訳じゃ無いんだが……あいつは灰となった人間やオルフェノクを復活させられるのか？」

「……！！」

三人が驚いた表情をし、制服を崩している生徒が怒りのあまりドラゴンオルフェノクになった状態で帝の制服を荒く掴む。

「てめえ！会長の何を狙ってるんだ！言え！」

「やめる龍也！……確かに鳳姫様には灰化してしまつた存在を蘇らせる事が出来るよ……でもそれはいつもって訳じゃ無い……」

茶髪の生徒が何とか引き離し帝の質問に答えると、さらに帝は質問する。

「どういう事だ？」

「あのお方は、限られた命を大事にしている……それだけです。」

「なるほどな。ありがとよ、教えてくれて……百井、鰐塚、辰尾。」

帝は微笑みを見せながら、鳳姫が教えてくれた彼らの名字を呟きつつ、彼女がいるであろう生徒会室へと向かった。

（廃工場）

一方、どこかの廃工場では大量のオルフェノクが機材などが積み上げられた足場に立つシグマを見ている。そのシグマはベルトに備え付けられているi p h o n型端末「シグマフォン」を取りだし、操作すると緑色の光と共にその正体を現す。その正体は眼鏡を外し、柔らかそうな瞳では無く鋭い憎悪に満ちあふれた瞳の本物の健吾だった……そして健吾は叫ぶ。

「いいか？お前達は灰化することを恐れず、ずっと生き続けたいという欲望の元に集まった精鋭達だ……今日の夜から学園に忍び込み、明日の午前七時に一斉に奴らを襲い大量の命を得るぞ！」

『おおおおおおおおおっ！』

オルフェノク達は勢いよく健吾の叫びに応え、健吾もその表情を歪ませる。彼の秘めている野望は大きかった……それを影から学

園で最初に帝達と出会った影武者の伊藤健吾が見ている事に気づかず。

（生徒会室）

「そうですか・・・聞いたんですね、私の秘密を。」

「ああ、でもえらいな・・・灰化したらすぐ復活させるんじゃないかと、敢えて限りある命だったと自分の心に刻みつけておくなんて・・・本当はどんな復活させたいのに。」

その頃帝は、百井達から聞いた全てを鳳姫に話した。そんな鳳姫は怒るどころか、ある程度の微笑みを浮かべながら生徒会室の窓から校庭にいる生徒達を見る。そして話し合っていた。

「私は・・・分からなかったんです。オルフェノクと人間の命の違いという物が・・・私の復活能力が大きく作用しているのはこの私自身ですからオルフェノクでもずっと生きていられる。でも周りは限りある命があつて、それでも生きている・・・それが出来ないとなるとなんだか悲しくて・・・」

帝はそんな鳳姫を見ながらため息をつく、優しく鳳姫の肩を掴み呟く。

「俺の友達にもさ、そうやって自分は異形だから人間を裏切るんじゃないかってずっと悩んでた奴が居たぜ・・・でもそいつは今では仲間達と仲良く生きてる。何故か？その仲間達がそいつを受け入れ、あいつをちゃんと支え続けたからだ。今のお前もちゃんと支えてくれる仲間達がいるんじゃないか？」

その言葉にハツとなつて振り向く鳳姫。帝は微笑みつつ生徒会室の入り口に向かいながら、もう一度振り向き呟いた。

「仲間が信じてくれてるんだ……お前も自分とその仲間を両方信じてみるよ。」

「……はい。」

冬花は静かに頭を下げ、帝はそれにうなずきながら生徒会室を出るとそこには健吾が居てビクツとなるが、入れ違いになるように入っていく。そして数時間後に出てきた健吾は何か決意を決めた感じで呟いた……

「僕も、彼女を信じてみたい……」

「深夜」

目の前を歩く健吾とそれに付いてくる大量のオルフェノク。彼らは学園の校庭にやってくるとそれぞれ散開しようと動き出した直後、何かの光が彼らを映し出す。

それは学園の屋上に備え付けられたスポットライトであつたが、その屋上から突如何かの影が接近してくると何体かのオルフェノクを吹き飛ばし校庭に着地する。

それはクレインオルフェノクよりもスタイルが良く、全身の至る所に翼を模した装飾や模様があり、背中に翼をたたんだ龍騎ライダーズの一人であるオーディンのような顔の「フェニックスオルフェノク」であり、オルフェノク達にどんどん火炎弾を放っていくが、突如背中から強烈な衝撃が襲いかかる。

その衝撃を放つたのは、ドラゴンオルフェノクよりもさらに厚い装甲と鋭く長い爪と尻尾を持つ巨大な翼を持つ「ワイバーンオルフェノク」だつた。

『ほう、生徒達を巻き込まないために自分一人で戦うという訳か。だがこの多勢に無勢な状況では結果は変わらない。』

影が健吾の形に変わり、フェニックスオルフェノクに言い放つ。それに対してフェニックスオルフェノクも影を鳳姫の姿に変え、反論する。

『私は確かに生徒会長失格かもしれませんが。でも……それでも私は！信頼してくれる皆を守り続けていきたいんです！』

『それが貴様を長失格とさせるのだ！我々オルフェノクは誰でも生き続けていきたいと思っている！短命で限られた命など、必要ないのだ！』

「違うな！」

影の健吾の叫びに、反論するように暗闇の中から現れた帝。それに続くように現れた冬花、ラッキクロバーの百井、辰尾、鰐塚も現れる。

「百井君、辰尾君、鰐塚君……どうして？何も言っていないのに……」

フェニックスオルフェノクから人間態に戻った鳳姫が呟くと、ため息を吐きながら百井が答える。

「辰尾が、会長なら怪しい人物に目星を付けてて、何かしでかすんじゃないかって心配してたので。」

「いつもはぶつきらぼうなのに、会長の事には真剣な辰尾君ですから。」

「うるせ！・・・まあ会長、何かあったら俺達にも相談しろって事ですよ！」

鰐塚は苦笑し、辰尾は照れくさそうにしながら会長に微笑む。それに影の鳳姫も微笑むのであった。その様子が気に入らないのか、ワイバーンオルフェノクは咆哮と共に姿を健吾に戻す。

「何故だ！俺の計画は完璧で誰にも分からなかった！それに何故、貴様らはそこまでこの長失格の者を信頼できる！」

「お前は上に立つ者と下から支える者とは何かという物自体、分かつてない！鳳姫は自分に灰化した存在を復活させる能力があったのに使わなかった！それはその存在の限りある命を自分が心に刻んでおこうという苦渋の決断があったからだ！」

普通なら途中で心が崩壊するかもしれない・・・でも彼女はしなかった！それはここにいるラッキークローバーやこの学園の生徒、そして彼女を知る皆が支え続け例え灰化しても復活させなくていいと、心に刻みつけてくれればそれでいいと彼女の決断を受け入れたからだ！

それが分からずに、ただ自分の部下を利用する物としか見られないお前の方こそ長失格だぜ！だからこそ、お前の計画はばれたんだよ！そこにいるフロッグオルフェノクになれるお前の影武者に教えられてな！」

「何だと！」

健吾が振り向くと、影武者をしていたもう一人の健吾が決意のこもった表情で立っていた。そして彼は拳を握りしめ思い切って叫ぶ。

「僕も、僕もこの限りある命を精一杯生きたいんだ……！」

「貴様ああああああっ！」

【COMPLETE】

本物の健吾が叫ぶと、健吾が腰に装着していたシグマドライバーにセットされていたシグマフォンが自動的に動き、電子音声と共にギリシャ文字のΣを模した緑色の光のラインが流れ、更に健吾の顔に歪んだ模様が浮かぶのと同時に緑色の光が爆発し影武者の健吾やオルフェノク達を吹き飛ばす。

影武者の健吾は鳳姫が抱え込んで跳び、隠れるように言われたために何とか助かったが、他のオルフェノク達は吹き飛ばされつつ、灰化してしまう。

その光が晴れるとそこに立っていたのは腰の部分にシグマドライバーとシグマフォンが融合し、緑色のラインが走ったさらに禍々しい装甲と角、翼、シグマ・ストライクテイルが融合し二本に増えた尻尾、鋭く伸びた角を持つ「ワイバーン・シグマ」なる存在であった。ワイバーン・シグマの胸に健吾の顔が浮かび上がるとその顔は大きく叫んだ。

「見る！これが真の長の力だ！全てをひれ伏させる大いなる存在だああああああああっ！」

「暴走してやがるな……鳳姫、冬花、百井、辰尾、鰐塚。あいつを止めるぞ！」

「分かりました！」

「帝さんに協力するのは当然です」

「会長を守るのが我々ですからね。」

「俺は会長のために戦う、てめえのためじゃねえ！」

「素直じゃないんだから……」

冬花が雪月花を抜刀し、百井がムカデの特徴を持つ「センチピート
オルフェノク」、辰尾が龍の特徴を持ち厚い装甲の姿である「ドラ
ゴンオルフェノク・魔神態」、鰐塚が鰐の特徴を持つ「クロコダイ
ルオルフェノク」へ変化すると、ワイバーン・シグマが灰から出現
させたオルフェノク軍団に向かっていく。

それを見ながら帝はデイクイザドライバー、鳳姫はツヴァイフォン
を装着しキングライドブッカードからデイクイザーのライダーカード
を構え挿入、ツヴァイフォンにコード281を入力し同時に叫ぶ。

【KAMEN - RIDE・・・】

【STANDING BY】

「変身！」

【DEKAISER!】

【COMPLETE】

そして二人はディカイザドライバーのバックルを閉じ、ツヴァイドライバーに挿入。12の虚像とフォトンブラッドのラインに包まれ、ライドプレートが顔に刺さり、光が晴れるのと同時にその姿をディカイザーとツヴァイに変えそれぞれの武器を構え、ワイバーン・シグマに突っ込んでいった……

「ハア！」

雪月花を振りかざし、オルフェノク達を斬り裂いていく冬花。そして何体かオルフェノクを斬ると、突如彼女の瞳が輝き、動きが止まるのと同時に背中から翼が出現する。

（フユカ？ドウシ……！コ、コノカンカクハ！）

『帝さんの……ために……強くなりたい……』

髪が刀状に変化すると、あの槍が6本出現し、そのまま冬花の体を翼が包み込む。そして翼が勢いよく開かれると、冬花の腕と足、肩と胴体、腰部分に青く輝く刺々しい結晶の鎧を身に纏った姿となり、瞳の輝きが収まるのと同時に、ハツとなる。

「あれ？私は……って！何で浮いてるの私！？」

（イマハキニシテルバアイデハナイナ……ヤツラヲブッタキレ！）

「それもそうだね……それじゃあ行くよ！」

『結構やりますね……ハッ！』

『負けてられねえな……オラッ!』

『そうだね……ハア!』

冬花は高速で飛翔しながら、槍と雪月花を手足のように振り回し、どんどんオルフェノク達を斬り裂く。それに合わせるようにラッキークローバーの三人も鞭を振り回し、爪で斬り裂き、バックラーで吹き飛ばしていく。そして数分後には、敵のオルフェノクの気絶した人間態だけが倒れていた。命を大切に思う鳳姫の意志を守る彼らは命を奪わなかったのである。

【MUBA-SHOT】

一方のツヴァイとデイカイザーは、ワイバーン・シグマの振り回す尻尾の攻撃を回避しながらキングライドブッカーとクイーンドライバー、ツヴァイムーバーの銃身が少し伸び、銃口が二つある「ムーバーショット」から大量の光弾と拡散光弾を発射する。

「無駄なあがきを!」

しかしその攻撃を全て受けても無傷なワイバーン・シグマは口の部分から緑色の破壊光線「デストロイ・シグマスマッシュヤー」を放ち、二人を吹き飛ばす。それでも二人は果敢に接近し、今度はソードモイドのキングライドブッカーとクイーンドライバー、ムーバーエッジで斬撃を放つ。それを両腕の「シグマ・ブルムスラッガー」で全て防ぎ、跳ね返す。

「チツ……奴に弱点とか無いのか!」

「それだけじゃねえ……俺や皆とこいつの絆の力だ！」

「貴様は一体何だ！」

「平和という名の支配を与える通りすがりの元帝王だ……しつかり頭に叩き込んでおけ！」

「信じる物かあああああつ！」

緑色の炎を纏って尻尾を突きだしたワイバーン・シグマに対し、デ
イカイザーはツヴァイのマークが描かれたカードをデイカイザーは
発動した。

(FINAL - ATTACK - RIDE . . . ZW • ZW • ZW •
ZWEI!)

ディカイザーがツヴァイに触れると、金色のエネルギーが流れ込みツヴァイカノンにたまっていく。ツヴァイもそれに合わせてツヴァイフォンの液晶画面にタッチする。

【EXCEED CHARGE】

その電子音声と共に、ツヴァイカノの銃口が伸びて展開される。そして虹色のフォトンブラッドの光もチャージされその瞬間、ツヴァイが引き金を引くとさつきとは比べものにならない太さと輝きの虹色と金色の混ざり合った光線を放つ必殺技「デイカイザーストライク」が発射される。そしてワイバーン・シグマとぶつかり合うが、段々とワイバーン・シグマが押されていき、炎がかき消されるのと同時にワイバーン・シグマとシグマフォンを貫いた。

『グオツ！？バカ……。な……。俺は命を……。この命を限りない物に……。！』

その言葉と共に、ワイバーン・シグマは青い炎に包まれ灰となった。そしてそこには青いTとYが合わさったマークに斜めの線が浮かび上がった。

「あなたの事も「いや、大丈夫だ。」……。え？」

変身を解いた鳳姫の言葉を遮りながら同じく変身を解いた帝が指差した方向には健吾が倒れていた。

「ど、どうしてですか？」

「こいつのおかげだ。」

そう言つて帝が見せたのは藍色の戦士のカード。それは帝が出会った別世界を渡り歩く破壊の代行者と義妹のような異次元同位体の少女、その仲間たちとの絆の証であった。

「これは破壊の代行者、仮面ライダーディージェンドのカードだ。さっきお前が光線を放つのと同時にこれに変身し、アンチ・キルっていう殺す事のない効果を付与させたのさ。」

「さ、流石ですね……。」

帝の説明からヴィジョンを作り出した鳳姫はただ驚くのであった……。そして健吾は部下のオルフェノクを縄で縛り終えた冬花やラッキークローバー達によって学園の中へと運ばれていった。

「翌日」

ツヴァイの世界でやるべき事を終えた帝達は学園の門で鳳姫と最後の会話をしていた。

「そうか・・・健吾はまだ考えを変えないのか・・・」

「それでも、いずれは限りある命の大切さ、人間とオルフェノクの共存の素晴らしさを教えたいと思います。」

「頑張ってください！」

そして三人はそれぞれ握手し、鳳姫は学園の中へ、帝と冬花は家へと戻っていくのであった。その後、家にたどり着いた帝と冬花が見たツヴァイが描かれていたあの絵画は後ろを向いているシグマ、前を向いているツヴァイとラッキークローバーが変身したオルフェノク達の描かれた絵画となっていた。

「今は向き合ってなくてもいずれ向き合える。ってことだろうな・・・」

「そうですね、あつ、絵が変わりましたよ！」

「そうか・・・！こ、これは・・・」

だが、次に変わった絵は他の二つの絵と何かが違った。全てが破壊された街に一人だけ立っている全身が漆黒のライダーと、その地面に落ちている折れている紫色の刀、ひび割れた黒い龍の紋章が書かれた長方形の物体、大量の灰、デイカイザドライバーに酷似した黄色いドライバーという絵画であった・・・

く???く

そしてどこかの家らしき場所の居間で、この絵画をスケッチブックとして見ている人物達が存在していた。

「な、何なんだ……この恐ろしい絵は……」

「先生、私恐いよ……」

「次の世界は用心深く行かないとな……」

「そうですね……」

暗くて良く見えないが、前髪にカールがかった黒い短髪の青年と肩まで伸びている茶色の長髪の青年、黒いセミロングの髪に力チューシャを付けた少女と紫色の髪をツインテールっぽくした紫色のワンピース少女がその絵画にとてつもない恐怖感を抱いていた。さらに・

「あの世界にはどんなお宝があるのかしら」

「そしてどんなかわいい子ちゃん達がいるのか、楽しみだぜ！」

絵画を窓の外から覗いている、銀髪のショートで巨乳を目立たせるようにスリットの入った黒服に赤ジャケットの女性と、ウェーブな黒髪を後ろで括んだ白シャツに水色の半袖ジャケットと黒半ズボンに身を包んだ男性の二人組が何かを狙っている感じに呟いていた。

今、出会う事のない二つの物語が交わろうとしている……

限りある命を大切に（後書き）

（コラボ編予告）

帝と冬花がやってきたのは闇の渦巻く世界だった……

「この世界には闇がある……」

そこで出会う謎の旅人一行……

「俺は煌闇影、闇を光に導くおせっかいな家庭教師さ。」

そして明らかになるお互いの正体……

「お前が……デイトライト……世界を焼き尽くす灰燼者か！」

「違う！それはまやかしだ！」

争い続けるお互いの前に現れる最強の敵。

「お前らの闇は全て喰らわせてもらった……」

何かを隠す怪盗二人組。

「知ってる事を教える云々の前に、てめえだけは絶対に殺す！」

「ちょっと待てよ、俺様が何したんだ？」

そしてお互いが手を取り合うとき、新たな力が生まれる！

「俺は支配する．．．闇を受け入れたとしても！」

「そして導き続ける．．．光へと！」

仮面ライダーディカイザーと世界の支配者と仮面ライダーディライトと世界の光導者のコラボ、お楽しみに！

設定その3（前書き）

ファイナルウェポンライドが良く分からないという意見があったのでコラボの前に急遽作成しました。

設定その3

〈ファイナルウェポンライド設定〉

ファイナルウェポンライドカード

ファイナルウェポンライドカードとは帝が訪れた世界で、成すべき事を成し遂げその世界のライダーと絆を作ったときに現れる神秘のカード。バーコードの様な縁の色は虹色に、背景の色は金色に輝いており、ディケイドやディエンドならば、ライダーその物を変形させたり新たな効果を与えるだけだが、ディカイザーの場合は訪れた世界のライダーの全てを強化(その証拠に一番の特徴を表す部分は虹色に染まる)し、その有り余る力とディカイザーとの絆を具現化した武器を召喚する。必殺技はそれぞれの世界のライダーのFARで発動する。

FWR 聖なるザンバットソード

ディカイザーがシャイニングギバの世界で手に入れたFWRのカードを発動し、シャイニングギバに何らかの行為を行う事で発動する。光と闇、二つの力を同時に併せ持ちその二つを聖なる虹色の刀身として形成している。シャイニングギバが持つ光のザンバットソード、ダークギバ(DCK版)の持つ闇のザンバットソードよりも刀身は長く、斬れ味も倍となっている。必殺技は光と闇のザンバットソード(弓の様な形態に合体させた物)から矢を放つように聖なるザンバットソードを放って敵を貫き、その聖なるザンバットソードをディカイザーが持ち、そのままシャイニングギバとディカイザーがザンバットソードで斬りつけるディカイザーレクイエム。

FWR ツヴァイカノン

ディカイザーがツヴァイの世界で手に入れたFWRのカードを発動

し、ツヴァイに何らかの行為を行う事で発動する。虹色のラインに彩られた銀色の巨大レーザー砲で極限まで高められた虹色の高圧縮フォトンブラッド光弾を連続発射する事が可能で、その威力はツヴァイムーバーやキングライドブツカーの攻撃を物ともしなかったワイバーン・シグマの生態装甲をいとも簡単に削る程である。必殺技はディカイザーのエネルギーとツヴァイのフォトンブラッドのエネルギー全てをツヴァイカノンにチャージし、銃身部分を展開させて極太の虹色と金色の螺旋を巻いた光線を放つディカイザーストライク。

設定その3（後書き）

このFWRの設定は巡った世界が増える程に更新します。

コラボ編！～訪れたのは闇の世界～（前書き）

色々と修正していたので遅くなってしまいました・・・修正部分は前の話を読めば分かります。

コラボ編！訪れたのは闇の世界

世界の元帝王、天海地帝と覚醒せし別世界の少女、月海冬花は漆黒のライダーが描かれた恐ろしい絵画を見つめていた。

「この仮面ライダーコアに似た漆黒のライダーは分かんが・・・この刃が折れたボロボロの紫色の剣はサソードヤイバ、このひび割れたデッキはリュウガのカードデッキ、この灰はオルフェノクの物だと思う。そして・・・俺のデイクイザドライバーに酷似しているこの黄色いドライバーの持ち主がこの世界に関係しているのだと思う・・・」

世界を幾つも巡り、見てきた帝は自分の持つ知識をフル活用し推理するが確かな証拠が揃わず、髪をかき上げコートを整えると、冬花を連れて外へ出ようとするが・・・

「うゝ頭がくクラクラです」

冬花は目を回し、頭から煙を出して脳内をオーバーヒートさせていた。帝はため息を吐きながら冬花を氷などで冷やすと、そのまま外へと出る。そして辺りを見渡すが、そこには誰もいなかった。

「誰もいない・・・静か過ぎるな・・・」

「不気味ですね・・・服装も変わってないですし・・・」

いつもならその世界でやるべき事を示すために服装が変わるが何故かわらず、二人はその不気味さと奇妙さに恐怖を覚えていると、どこからともなく多数のミサイルが飛来し、それを二人は何とか飛

んで回避しドライバーと雪月花を構える。そのミサイルの飛んできた方向を見ると、そこには黄色いグローブとブーツにそれぞれ違う色のマフラーを巻いた仮面ライダーに酷似した戦士がいた。

「あれは……仮面ライダーですか？」

「違うな……あれは本郷さん、一文字さんが戦っていた悪の組織「ゲルショッカー」が作り出した「ショッカーライダー」だ！」

その叫びと共に緑色と青色のマフラーのショッカーライダー（以後SR）3号と4号が、黒い波動を纏いながら帝の目の前に瞬間移動し、その波動を纏わせたダブルパンチを放ち帝を吹き飛ばす。その攻撃で地面を転がりながらもデイカイザドライバーを装着し、バツクルを開きながら左腰にあるキングライドブツカーからデイカイザーのカードを取り出すと、デイカイザーの絵がショッカーライダーに見えるように目の前で構える。

「行くぜ？ 変身！」

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

帝はカードを回転させながら叫ぶと、ドライバーに挿入しバツクルを閉じる。そして電子音声と共に、黄金に輝く12体の虚像が円状に出現し帝に重なる。そのまま灰色のデイカイザーに姿を変えるとドライバーから9枚のデイメンションプレートが出現し、顔面に次々と突き刺さるとその灰色の姿を金、銀、青に煌めく姿へと変える。これこそ、帝が全ての世界を支配するために戦っていた時の姿「仮面ライダーデイカイザー」である。

「さあて元帝王の凱旋だぜ！」

胸の部分でコートを直すような仕草をすると、勢いよく走り出しシヨッカーライダー達とぶつかる。そして冬花も、制服の袖に隠し持っていた雪月花を取りだし抜刀、青い髪を銀色に染め瞳の目つきを鋭くすると、走り出しディカイザーと戦っていないピンクと白のマフラーのシヨッカーライダーと戦い始めるのであった・・・

一方、この世界にはもう一つの旅一行が訪れていた。一人は前髪がカールがかった黒い短髪の煌闇影。もう一人の青年は肩まで伸びた茶色の長髪の赤竜コウイチ。その隣にいる少女は黒のセミロングで、カチューシャを付けた白石黒深子。そして闇影の隣にいるのは紫の髪をツインテの様にした少女、諸刃ツルギ。この四人はそれぞれが別世界の出身で、今まで様々な世界を旅していたのだ。

「一体この世界は何なんだろ・・・」

黒一色のコートに姿が変わっていた闇影は周囲を見渡す。いつもなら家の状況が変わるのだが、何故か今回は自分達だった。コウイチや黒深子、ツルギも黒いスーツ、赤いリボンの漆黒の制服、黒いワンピースに服装が変わっており、それぞれは困惑したり、驚愕している。

「先生、私やつぱり怖いよこの世界。」

「何か色々おかしいしな・・・」

「闇影さん・・・？」

それぞれが闇影に話し掛けるが、闇影はある方向を見たまま黙っていた。その方向を黒深子達も見るとそこには、漆黒の装甲とベ

ルトを身につけた謎の青年達がいつの間にか出現していたからである。その青年達は右手に抱えていたマスクを被り、口の様なパーツを取り付け黄色の複眼を輝かせる。

「世界の光導者にして灰燼者、仮面ライダーディライト！貴様の仲間共々、その闇の力をいただく！」

「やっぱり敵か・・・皆、準備はいい？」

「ああ、いつでもいけるぜ。」

「大丈夫だよ、先生。」

「勿論です。」

それに対し、闇影達も戦闘態勢を整える。闇影はディカイザドライバーに酷似した黄色いドライバー、黒深子は顔に不思議な模様を浮かび上がらせ、コウイチはリュウガのカードデッキ、ツルギはサソードヤイバとサソードゼクターを構え、黒深子以外は勢いよく叫ぶ。

「変身！」「」

【KAMEN・RIDE・・・DELIGHT！】

【HENSHIN！CHANGE・SCORPION！】

そしてそれぞれは戦うための姿へと変わる。闇影はディケイドに酷似しているが体色はライトオレンジと白、プレートは金に近い黄色、胸の十字は黒、複眼はディカイザーと同じ青色の「仮面ライダーデ

イライト」、コウイチは仮面ライダー龍騎に酷似した漆黒のライダー「仮面ライダーリュウガ」、ツルギは蠍を模した剣使いのライダー「仮面ライダーサソード ライダーフォーム」へと直接変身し、黒深子は顔の部分が仮面ライダーファム、体の部分がイマジンのジーク、そして体がクレインオルフェノクよりスマートな「スワンオルフェノク」となり、それぞれが武器等を構え漆黒のライダー達へと向かっていった……

デイクイザーは4体のショッカーライダーを相手に互角に戦っている。中々のコンビネーションで襲ってくるショッカーライダー達の放った同時キックを跳んで回避すると、まずは青いマフラーのSR4号を掴み転がりながらビルの壁へ叩き付けるとキングライドブッカーから一枚のカードを発動する。

【ATTACK-RIDE・・・SLASH!】

電子音声と共にキングライドブッカーから黄金の光刃を出現させ、4号を斬り裂くデイクイザー。しかし4号は後ろのビルの壁に刃を突き刺させ、動けなくなった所へ連続パンチを放つ。

「グハッ！結構やるな！」

「まだまだ行かせてもらうぞ！」

デイクイザーは吹き飛ばされつつも、瞬間移動してきた4号へ飛びかかり、顔面にパンチを放つ。そこからさらに回転蹴りを数回顔面に浴びせ、倒れながら両腕を叩き付けた4号の発生させた地割れを跳んで回避、そのまま空中で、何回か回転し勢いよく左足蹴りを放つ。

「ライダー！回転キック！」

「ぐはああああああつ！」

伝説の昭和ライダー、2号と同じ技によって4号はタイフーンを粉々に破壊され、黒い煙と共にビルの中へ吹き飛ばされるが、間髪入れずに白いマフラーのSR2号と緑のマフラーのSR3号が同時に黒い波動を纏ったパンチやキックを放ってきて、それに対応していくが段々耐えきれなくなり、ついに食らってしまい吹き飛ばされるデイカイザー。

その瞬間、SR3号が両手で自身に内蔵されている爆雷を取りだし、何個も投げつけデイカイザーの近くの地面ごと爆発させる。

「ついにデイカイザーを撃退したぞ！後はダークライダーやのカードを奪うだけだ！」

「……そうだな。」

3号は歓喜し、2号は腕を組みながら一言だけ呟き警戒をしていると、突如3号はベルトのタイフーンを何発も放たれた光弾に貫かれ破壊されてしまう。

「ぐわああああああつ！」

「くっ……油断大敵だ！」

3号がエネルギー源を失った事により、全身から黒い煙を噴出しながら倒れるのを見た後、SR2号は煙の上がつている方向を見る。そこには黄金のドーム状の光の壁が出来ていた。それと同時に電子

音声が響き、光の壁が消える。

【ATTACK-RIDE・・・REFLECT!】

「惜しかったな・・・ここからが本番だ!」

ほぼ無傷でクイーンドライバーを構えているデカイザーはソードモードに変化させ、SR2号に斬撃を放つ。それを何とかかわした2号だが、次の瞬間にはデカイザーの右ストレートが顔面に深くめり込みマスクを砕く。

「・・・やってくれる!・・・ならば、これを食らえ!」

左側部分のマスクが粉々に破壊された2号は全身から毒煙を噴射、デカイザーに吹き付けようとするがデカイザーはある一枚のカードを発動した。

【ATTACK-RIDE・・・BARRIER!】

電子音声と共にデカイザーの目の前に出現した光の壁は毒煙を完全に遮断し、それに驚いている2号のティーン目掛け、デカイザーは勢いよく走りながら拳を叩き付け叫ぶ。

「ライダーパンチ!」

「み、見事・・・!」

2号が振りかざした拳より早く突き出されたデカイザーの左拳はティーンを貫き、2号の動きを完璧に止める。その腕を抜き、倒れた2号に振り向いて数秒間立ち尽くした後、デカイザーは残つ

ているSR1号へ向かっていった。

同じ頃、少し離れた所で冬花も雪月花と槍を振り回し、紫のマフラーのSR5号とピンクのマフラーのSR6号と互角に戦っていた。

「お嬢ちゃんも大変だなーSRの中でもメツチャ強力な能力を持つわいらと戦うなんてなー」

「何気楽に話し掛けてんだよ！俺らはこいつらを抹殺するんだろ！」

「いやいや抹殺やのうて、力の奪取や。間違いはいけまへんでー」

「何でそこだけ真面目に聞いてんだよ！調子狂うだろうが！」

「ボケとツツコミやなーさすがやのー6号はん。」

「あのー私の調子も狂うんですが……」

冬花の斬撃や蹴りを拳や足で応戦する5号と6号。しかし、この二人は姿とギャップが激しく冬花を困惑させる（それでも攻撃はしっかりやつっている）。

「しゃあないなーんじゃ、ピリツといくでー！」

「へっ？……きゃあああああっ！」

5号は手をお手上げ状態のようにして首を振った後、両手を冬花に突きだし放電させる。強力な電撃で全身を痺れさせ、動けなくなる冬花。そこに6号が両手から溶解液をいくつも付着させ服を溶かしていく。

「俺の溶解液は強力だ！そのまま……！で、でけえ！この女、高校生にしちゃあ、でけえ！」

「な、なんやと！……ほ、ほんまや……メチャでかいわ！」

冬花の制服や白いワイシャツが溶け、穴だらけになった時、液体効果なのかシャツが透けピタッと冬花の体にくっつき、そのスタイルを強調する。その様子に5号と6号は攻撃を止め、まじまじと冬花の一部分を見つめていると冬花が起き出し、二人の視線に気づきその視線をたどって行った瞬間、冬花は顔を真っ赤にし、叫んだ。

「きゃ あああああああつ！へ、変態！女の敵iiiiiii
iiiiiiiいっ！」

「うおっ！ちよっ！待って！ぎゃあああああつ！」

冬花は恥ずかしさと共に結晶の鎧を纏い、何度も6号を斬りつけそのままタイフーンも斬り裂き6号を撃退すると、5号の方を涙目で見える。

「うっ！？けっ、結構かいんやね君……。今からでも喫茶店にいかへん？」

「うるさあああああああいつ！」

「ああああああああれええええええええええまああああ
あああああああつ！」

5号は後ずさりつつ、話し掛けるが冬花の勢いよく投げた槍にタイフーンを貫かれそのまま空へと消えていった。そしてディカイザー

の方でも1号との戦いがラストスパートへと差し掛かっていた。

「お前の仲間は全員倒した！後はお前だ！」

「さすがはデイクイザーだな。あのお方の言っていた通りだ。」

デイクイザーのパンチを受け止めつつ、1号は呟き近距離から火炎を吐きデイクイザーの顔面を燃やしていく。それに耐えながらもデイクイザークイーンドライバーを1号の腹部に当て、そのまま光弾を連射する。それによって火炎が止まり、1号もいくらか離れたのを見てデイクイザーは4枚のカードを取り出しクイーンドライバーに挿入し発動する。

【KAMEN - RIDE・・・1GO！2GO！KICK HOPPER！PUNCH HOPPER！】

黄金の虚像が重なり昭和ライダーで伝説とも言われる新1号と新2号、地獄からやって来た義兄弟のキックホッパーとパンチホッパーが現れる。

「出たな、ショッカーライダー！」

「俺達に一人で挑もうなんて10年は早いぜ！」

「お前もこっちに来い……………」

「最低は最高なんだよ……………」

それぞれの性格を表す台詞を聞きながらデイクイザーは一枚のカードを発動する。

【ATTACK - RIDER・・・CROSS - ATTACK!】

電子音声と共に新1号の隣にキックホッパー、新2号の隣にパンチホッパーが並びそれぞれが必殺の態勢を取る。

「トウツ!」

「ライダージャンプ・・・」

【RIDER - JUMP!】

「ダブルライダーパンチ! / ライドーパンチ・・・」

【RIDER - PUNCH!】

「ダブルライダーキック! / ライドーキック・・・」

【RIDER - KICK!】

驚いている1号にまず、新2号とパンチホッパーがダブルライダーパンチを放ってひるませ地面に倒す。そして新1号とキックホッパーのダブルライダーキックが何とか立ち上がった1号のタイフーンを粉々に砕き遠くに吹き飛ばす。そのまま1号は、四人のライダーが消えるのと同時に他のSRとは違い黒い炎の爆発を上げるのであった・・・

デイルイト達の方も、黒い謎のライダーに善戦していた。最初は集団という事もあってその数やコンビネーションに圧倒されかけていたが、サソードがクロックアップを超えるスピードの「クロックデ

ユアル」を使って何体か倒し、四人で対応出来る程の数まで減らしたからである。

「それじゃ、これで行ってみようか？」

【SHADOW・RIDE：RYUGA！】

デイトライトだけが使える、自分の影を仮面ライダーに変化させるカード「シャドウライド」によってコウイチの変身するリュウガと同じSリュウガが出現し、漆黒のライダー達をデイトライトともに殴り蹴り飛ばす。

「全身真っ黒だからか・・・おっと、そらっ！」

その様子を見ながらリュウガは先程召喚した「ドラグセイバー」という剣で攻撃を受け止め、黒いライダー達を斬り裂く。そしてまとめて集まった所で、同じ紋章の描かれたカードを取り出し左腕にある「ブラックドラグバイザー」に挿入し発動した。

【FINAL・VENT】

「ハアアアアアアアッ・・・ダア！」

リュウガは契約モンスターのドラグブロッカーと共に空中へと飛び上がり、左足に漆黒の炎を纏わせ蹴り込む「ドラゴンライダーキック」を放つ。漆黒のライダー達は逃げようとしたがドラグブロッカーの炎で足を固められ、そのままドラゴンライダーキックを食らい爆発四散した。

「やったぜ！・・・ん？誰だ、お前？」

炎の中から出てきたリュウガが目の前を見ると、そこには黒い鞆を肩に掛け水色のジャケットに黒いズボンという姿の茶髪の青年だった。その青年はニヤツと笑うと懐からある物を出す。それは何とリュウガのカードデッキだった。

「俺の名は城戸真司……貴様と違い真なる像を持つ、本物のリュウガだ！」

「何だと!？」

城戸真司と名乗る青年がカードデッキを構え輝かせると、Vバックルというベルトを出現させ、そのままカードデッキを持った腕を下ろし、叫ぶ。

「変身！」

そしてデッキが挿入されると共に、黒いリュウガの像が一体ずつ重なり三体目が重なりと一瞬リュウガの姿になり、そこからさらに黒炎に包まれ、その炎を払うと同時に、リュウガ最強の形態「仮面ライダーリュウガサバイブ」へと変身した。

「ま、マジかよ……」

「さあ、貴様の闇を俺に寄越せ！」

リュウガサバイブは勢いよくリュウガへと向かっていった……その頃、スワンオルフェノクとサードも漆黒のライダーを残り3体まで減らしていた。

『ツルギちゃん、私があいつらを弱らせるから止めお願いね。』

「分かりました!」

影を変化させてしゃべったスワンオルフェノクは翼を広げて滑空すると、何度も漆黒のライダー達を細剣で斬りつけ翻弄する。それに合わせるようにサソードはゼクターの尾を動かし電流を流し込む。

「ライダースラッシュ、行きます!」

【RIDER - SLASH!】

そのままサソードは勢いよく走り出し、紫色の光刃となったサソードヤイバで漆黒のライダーをすれ違いざまに斬り裂く。そしてスワンオルフェノクが着地し、サソードヤイバから毒がしたたり落ちると漆黒のライダー達は爆発した。

「やったね♪」

「……いえ、まだです!」

「えっ?」

サソードがサソードヤイバを向けた方向にいたのは黒いスーツ姿に茶色い髪をオールバックにし、腰に金色のベルト「オーガドライバ」を着けた青年と白を基調とした服装の黒髪の青年。お互いにスワンオルフェノクとサソードを見ると、一人は憎悪の表情となり、一人は微笑む。

「俺はオルフェノクとして生きる……!」

「僕とひよりのために、そのゼクターと剣はもらっよ?」

そして茶髪の青年は金色の携帯「オーガフォン」を取りだし、それにコード000を入力、黒髪の青年は黒いカブト虫型のマシン「ダークカブトゼクター」と銀色の昆虫型マシン「ハイパーゼクター」を手に取り、それぞれ叫び、呟く。

【STANDING BY】

「変身! / 変身……」

【COMPLETE】

【HENSHIN! CHANGE・HYPER・BEETLE!】

茶髪の青年は金色の携帯をベルトに差し込み、そのまま倒す事によって流れる金色の光のラインに包まれ黄金の光に包まれるとギリシヤ文字のΩを模した赤い複眼の戦士に、黒髪の青年は黒い体に黄色い複眼のカブトムシを模したライダーとなり、さらにそこから分厚い装甲の姿へ変身した。

「俺は木場勇治……またの名を仮面ライダーオーガ!」

「僕はテンドウ ソウジ。この時はハイパーダークカブトって呼んでね?」

「オーガにダークカブト……!?!」

「私達が知ってるライダーに変身した……!?!」

驚いているスワンオルフェノクとサソードに向けて木場勇治という青年が変身した「仮面ライダーオーガ」は「オーガ・ストランザー」という大剣、テンドウソウジが変身した「仮面ライダーダークカブト ハイパーフォーム」はハイパーカブト専用のパーフェクトゼクターという武器が漆黒に染まり、金のラインが入った「ダークパーフェクトゼクター」という大剣を構え、ゆっくりと歩き出した。そしてデイルイトの方でも……

「あなたは一体？」

「俺の名はカブキ……ちょっとした事情であんたを退治しなくちゃならねえが、悪く思ふなよ？……歌舞鬼！」

「えっ！」

歌舞伎者が着るような服装に身を包んだ青年が、角の部分が黒く染まった「変身音叉 音角」を靴で鳴らし、額に掲げるとその額に鬼の紋章が現れ、桜吹雪と共にその姿が変わっていき、その桜吹雪が光と共に消えると青年は緑、赤、金に彩られた鬼の戦士「仮面ライダー歌舞鬼」へと変わり、音叉剣を肩に担ぐと歌舞伎の決めポーズを取り、デイルイトへ斬りかかっていった……

コラボ編！〜訪れたのは闇の世界〜（後書き）

まだ出てない人物は次回に出ます。トライRさん、キャラの口調は合っていますか？

コラボ編！〜現れし闇と破壊を司る神〜（前書き）

10000文字越えました・・・凄く疲れてしまいました・・・

コラボ編！〜現れし闇と破壊を司る神〜

デイルイト一行がダークライダー達と戦いを開始した頃、帝と制服を結晶で補っている冬花は、街を歩き回りながら人がいないか調べていたが、全く見当たらない。

「建物はあっても、人がいないっていうのはおかしい世界だな。」

「そうですね・・・」

帝はいつも通りだが、さっきの戦いで一悶着あった冬花は元気が無い。それを察して帝は、あまり追求せずに周りを見渡しながら、人を探す。それでもやっぱり見つからないため、一端家へと戻ろうとしたその時だった。

「漸く見つけたぜ！可愛いこちゃん！」

「あら、結構イケメンね♪」

「ハア？/はい？」

後ろから男性と女性の声がしたため、振り返ってみるとそこには、銀髪ショートで大きい胸を強調するかのような黒いビキニ水着を付け、その上に黒いジャケットを着込んだ黒いホットパンツの女性とウェーブのかかった黒髪を後ろで括った黒シャツ、黒半袖ジャケット、黒半ズボンといういかにも寒そうな服装着た男性の二人組だった。

「何だ？お前ら。」

「チツ、連れがいるのかよ。まあ、俺様には関係ないね！」

「いつも通りね、周。でも確かにあの子も中々ね♪」

「帝さん、助けて……」

「ああ……分かってるよ……」

冬花の助けに応えながら、帝は二人組を、特に周と呼ばれた男性の方を強く睨み付けると叫んだ。

「それに何か……お前が凄く、気に入らないしな！まずはめえから倒す！」

「おいおい俺様が何をしたんだ？まあ、邪魔するなら容赦しねえけどな。」

帝はデイカイザドライバーを構え、周と呼ばれた男性はボウガンに似た形状の武器を取り出し、二人はお互いにカードを構えると、驚く。

「ほう、貴様も世界を巡るライダーか……面白い、俺は元世界の帝王、天海地帝！またの名を仮面ライダーデイカイザーだ！変身！」

「マジかよ……噂だけかと思ってたぜ……全世界を一度は支配するに至った存在……おもしれえ！俺は戴問周！またの名は仮面ライダーディスタイル！数ある世界のお宝と美女を奪……ぐおおおおおおおっ！？」

帝はデイカイザーに変身しようと、ドライバーにカードを差し込んだが、周の方は水色と藍色を基調としたボウガン状の「デイスティールドライバー」にカードをスライドしようとした瞬間、冬花の投げた鞘が顔面にめり込み倒れる。それに馬乗りになると冬花は髪の毛を巨大な拳に変化させ、顔面に振りかざす。

「女の敵！女の敵！女の敵！女の敵！」

「ちよっ！？待って！俺は！ただ！話し掛け！ぎゃああああああっ！」

「……お前も大変なパートナーを持ったな。」

「結構面白いわよ？あつ、私は彩盗巡。仮面ライダーデিশーフよ。よろしくね、帝君♪」

「お、おお（君付けて……）」

段々と周にモザイクが増えていくのを見ながら、ドライバーを外した帝と手に持ったサバイバルナイフ型の「デিশーフドライバー」をクルクル回す巡は普通に会話しているのであった……

一方のデイライト達は、オリジナルのダークライダーに大苦戦していた。カードをドライバーに差し込む間も与えられぬまま、歌舞鬼の金、赤、緑の鞭で縛られ、何度も音叉剣で斬られるデイライト、リュウガサバイブのブラックドラグバイザーツバイから放たれる黒い光線を全身に食らい吹き飛ばされるリュウガ、オーガの強力なパンチとキックだけで何度も吹き飛ばされるスワンオルフェノク、クロックデュアル以上のスピードを持つハイパークロックアップに手

も足も出ないサソード、それぞれは一カ所に集められ、背中合わせになってそれぞれのダークライダーを睨んでいた。

「皆、大丈夫かい！」

「何とかな・・・それにしても、この世界は何だ？」

「私達の闇をもらうとか言ってるからダークライダーの世界なのかな？」

「今は確証が持てませんが・・・」

「とにかく、今はこのライダー達を片付けようか！」

「」「おう！／うん！／はい！」「」

そう言っで意気込むと、皆武器を振り上げて自分の敵へと向かっていく。それに対しダークライダー達もそれぞれ叫ぶ。

「いいねえ、そう来なくっちゃ！」

「虚像ごときが！」

「貴様も人間として生きるのか！」

「フフツ、仕方ないな。特別に本気を出してあげるよ。」

そしてお互いにぶつかり合うと、ダークライダー達は己の最強武器を構え、デイトライト達はお互いをカバーできるような布陣で挑む。

「本気って訳か。おい、木場って奴！あれをやるうぜ！」

「言われるまでも無い！」

そう言つて、ディライト達をリュウガサバイブとハイパーダークカブトに任せつつ、歌舞鬼はあの装甲響鬼が使う専用武器、アームドセイバー装甲声刃が翡翠色に染まった「翡翠・装甲声刃」ヒスイ・アームドセイバーを構え、オーガもファイズブラスターフォームの専用武器ファイズブラスターを黒、金、赤で彩った「オーガブラスター」を取り出す。

「歌舞鬼、装甲！つてな！」

【AWAKENING】

歌舞鬼は翡翠・装甲声刃に手を置き叫びと共に、己のディスクアニマルである消炭鴉達^{ケシズミガラス}に包まれていく。オーガもオーガブラスターにコード000を入力し、オーガフォンをセットし電子音声と共に金色の光に包まれる。そして歌舞鬼は装甲響鬼の赤い部分が翡翠色で、赤い短い角が各所から生え金色の装飾が装甲響鬼よりも多い「装甲歌舞鬼」になり、オーガは赤い複眼とコアはそのままに、全身が金色でフォトンストリームは真つ黒で肩と腕にオーガ・ストランザーの先端部分を模した金色のキャノン砲が取り付けられた「オーガ・カイザーフォーム」となりその重さのあまり地面をめり込ませる。

「ハアアアアアアアッ！ろっくすいせい楼鬼翠声！」

「一気に決めるしかないね！」

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・DE・DE・DE・DE・DELIGHT！】

デイルイトは両手からライトオレンジの次元エネルギーを集め、拡散させながら放つ「デイメンションプロミネンス」を、装甲歌舞鬼は翡翠色の清めの音の波動を放つ「楼鬼翠声」を放ち……

「虚像ごときが、調子に乗るな！」

「俺はもう、虚像なんかじゃない！」

【FINAL - VENT】

【STRIKE - VENT】

リュウガサバイブは自分の契約モンスターである、ブラックドラグランザーには乗らず、そのままリュウガと同じようにドラゴンライダーキックを放つ「F・D・R」ファイヤードラグオンライダーキックを放ち、リュウガは自分の思いや力を全て注ぎ込んで今まで以上に出力を上げた「ドラグクロウファイヤー」を放ち、巨大な爆発を起こし……

【EXCEED CHARGE】

「貴様も灰へと還るがいい！」

「絶対に負けない！私は人間よ！」

オーガKFはオーガブラスター・ブレイカーモードとオーガ・ストランザーの二刀流で放つ「クロス・オーガストラッシュ」を放ち、スワンオルフェノクはそれに細剣にエネルギーを込めてぶつけ……

「ライダースラッシュ！」

【RIDER - SLASH!】

「止めを刺してあげるよ……」

【KABUTO - POWER!】

サソードはライダースラッシュを、ハイパーダークカブトはダークパーフェクトゼクターの黒いボタンを押し、「ハイパーブレイド」を居合いのように放つ。それと同時に四つの大きな爆発が起き、その音は帝達にも聞こえるのであった……

「何だ？ 戦闘か？」

「もしかして闇影君かも。」

「闇影？ お前らの知り合いか？」

「一応ね。それじゃ、また後でね」

帝と会話していた巡は、モザイクがやつと消えた周を引きずりながら空間をデイスリーフドライバーで斬り裂き、そこに生まれた次元の裂け目の中へと消えた。そして帝と冬花も爆発の起きた方向へと走り出した。

その頃、闇影達は地面に座り込んで休んでいた。しかし黒深子は久しぶりに戦闘を行い、しかも相手はオリジナルのダークライダーのオリジナル最強形態であつたために、とてつもなく疲弊していた。

「ごめんよ、黒深子。君だけは戦わせたくなかった……」

「いいの……今回は……非常事態でしょ……？」

二人の空間を邪魔しない様にコウイチとツルギは離れていたが、ツルギの雰囲気は最悪だった。そう、黒深子とツルギは闇影に救われた者同士、恋をしてしまったために常に恋の戦いを繰り広げていた。そんな二人の前に次元の裂け目が生まれ、そこから巡と周がやってくる。

「はい、コウイチ君、ツルギちゃん、元気？」

「おっ！今日も可愛い……すいませんでした。」

巡の方は普通に話し掛けたが、周はツルギに憎しみを込めた単色の瞳に睨まれ、さっきのようにテンションが下がってしまう。

「それで……二人は……どうして……ここに……？」

「怖いわよ、ツルギちゃん。そうそう、この世界に実は……」

「漸く追いついたぞ、巡。」

と言い掛けた巡の後ろから声が聞こえ、振り返ってみるとそこには走ってきたのか、息が荒い帝と冬花がいた。それに気づいた闇影は自分のコートを枕代わりにして、そこに黒深子を寝かせると帝の近くまでやって来て話し掛ける。

「えっと、あなたは？」

「初めましてだな、俺は天海地帝。世界の元帝王だ……しつかり頭に叩き込んでおけ！」

「あつ、はい……。俺は煌闇影です。ちょっとお節介焼きな家庭教師、やってます。今、色々あつて、あそこで寝かせてるのが生徒の白石黒深子です（歳は同じくらいかな？）。」

「俺は赤竜コウイチ。職業は一応、記者かな？こいつらの旅の取材してるって言えばいいのかな？」

「私は……。諸刃ツルギ……。です……。」

「私は月海冬花です。帝さんと一緒に世界を巡ってます！」

お互いに自己紹介を終えた後、帝は闇影から同じ様な事を聞く。彼らもダークライダー達に襲われ、命からがら逃げてきたと。帝も、デイカイザーの事などを隠しながら話し合っていたその時だった……

「……！な、何だ！？時が止まってるのか！？」

そう、帝以外の全てが突如その動きを全て止めてしまったのだ。それに驚いていると、帝の目の前にあの支配と覚醒の虹が現れ、その中から全身に赤いフード付きのローブを被った女性が現れる。

「待っていたぞ……。世界の支配者、仮面ライダーデイカイザー。」

「……あんたは一体何者だ？俺の正体を知ってることは基本敵って事になるぜ？」

そう言つてデイクイザドライバーを懐から取り出す帝。しかし、その女性は首をゆっくり振りながらそのフードを取る。その下には銀髪でショートの美しい女性の顔があつた。

「私は紅蓮。貴様と会話していた世界の灰燼者、煌闇影こと仮面ライダーデイルイトを監視する者だ。」

「……デイルイトだつて？」

「そう……幾多もの世界を焼き尽くす灰燼者……私の力では到底及ばない存在……奴を止められるのは貴様だけだ……」

「

帝の周りをゆっくりと歩き回りながら、呟いていく紅蓮と名乗る女性。帝は既にデイクイザドライバーをしまいながらも、その顔に驚愕と怒りの表情が浮かんでいた。

「あまり時間は無い……貴様はただデイルイトを倒せばいいのだ……」

「あつ！おい待てよ！」

帝が手を伸ばすが、紅蓮は静かに消えていった。そして時が動き出し、さつきと変わらない風景へと戻る。帝は一瞬、夢なのかと思つたが確かな証拠があつた。

「帝さん？早く家に帰りましょう？」

そう、闇影達は既に帝達に背中を向けて帰ろうとしていた。しかし、帝は拳を思いつきり握ると叫んだ。

「良くも．．．良くも俺達を騙してくれたな！世界の灰燼者、デ
イライト！」

「．．．．．！」「．．．」

「あらあら？ばれちゃってる？」

「俺達は何も言っただけなのに．．．」

帝は振り向いた闇影達に向くのと同時に、更に叫ぶ。

「通りで、オルフェノクやワームの臭いがするわけだ．．．貴様
はこれまで、幾多もの世界を焼き尽くしたと聞いた！その世界を焼
き尽くす旅とやらも、今ここで終わらせてやる！冬花、邪魔になり
そうな奴らを全員縛れ！」

「えっ！あつ、はい！伸びて！私の刀髪！」

冬花は帝に言われるまま、雪月花を抜刀しながら銀色に染まり、刀
の模様のように青いメッシュが入った髪、「刀髪」を伸ばし、一瞬
のうちに闇影以外のデイライト一行を縛り上げる。

「グッ！？な、何だこれ！」

「髪の毛が．．．絡みついて．．．」

「離れません……………」

「アンツ……………こういうのも、たまには良いかも……………／／／／」

「俺にMの気なんて無いぞ！」

約2名、状況が分かってないような言葉を呟くが、帝と闇影の空気は相当やばい物となっていた。

「……………あんたは！俺という存在を倒すために、そんな卑怯な真似をするのか！」

「違うな。さすがにさっきの人数でやるのは、あまりにこつちが不利だからな。それなら敢えて、1対1の正々堂々とした決闘をやるうと思ったただけだ。それに俺はあいつらを、勝っても負けてもお前に返すつもりだ。」

帝の言葉に驚く闇影だが、その顔から不安は幾らか消え去ったようである。そこまで言えば十分だと思ったのか、帝はディカイザドライバーを取りだし腰に装着する。

「さあ、俺がお前の旅を止められないのか、止められるのかを決めようぜ？」

「言っとくけど、俺は灰燼者じゃ無い……………闇を光に導く光導者だ！」

闇影もディライトドライバーを取りだし腰に装着、そして二人はキングライドブッカーとライドブッカーからディカイザーとディライ

トのカードを取り出し、同時に構えると叫んだ。

「「変身！」」

【K A M E N ・ R I D E ・ ・ ・ D E K A I S E R !】

【K A M E N ・ R I D E ・ ・ ・ D E L I G H T !】

バックルが開かれていたドライバーにカードを挿入し、そのバックルを閉じ電子音声を響かせる。それと同時に虚像が二人を包み込み、その装甲や複眼に色を付け、顔面にライドプレートが刺さり、デイクイザーとデイライトの姿を形成する。

「「通りすがりの・・・」」

「世界に平和という支配を与える・・・」

「ちょっとお節焼きな・・・」

「元帝王だ！しっかり頭に叩き込んでおけ！」

「家庭教師さ！覚えておけ！」

二人はお互いの決め台詞を叫び走り出すと、お互いの顔面目掛けてパンチを放ち拳をぶつけ合う。そこからまずはデイクイザーが、パンチやキックのラッシュを放っていくが、それ全てを避けられると、今度はデイクイザーが腕と首を掴んで思い切り壁へと放り投げ叩き付ける。

「ぐわっ！」

「俺はお前よりも長いこと仮面ライダーやってたからな・・・いくらかブランクがあるとはいえ、経験と知識はまだまだあるぜ！」

そう叫びながらキングライドブッカードから光弾を発射するディカイザー。しかしディライトも負けておらず、それを側転で回避しながらライドブッカードから一枚のカードを取り出すとそれを直ぐ様発動した。

【ATTACK-RIDE・・・LASER!】

ライドブッカードからライトオレンジの光線を3発放つ「ディライトレーザー」がディカイザーを直撃する。しかし・・・

「この・・・ぐらいで・・・止められるか！」

「なっ!？」

ディカイザーはキングライドブッカードで受け止め、それ全てをどこかへと弾いてしまう。そしてディカイザーは二枚のライダーカードを取りだし、クイーンドライバーで発動する。

「闇のライダーと闇を裁くライダーで行ってみるか！」

【KAMEN-RIDE・・・DARK-KABUTO!IXA!】

電子音声と共に、黄金の虚像が出現し二人のライダーを形作る。一人はカブトのプロトタイプであるダークカブト、もう一人は対ファンガイア用に作られし仮面ライダーイクサであった。

「また・・・ソウタさんと・・・同じライダー・・・」

「あいつはどんなライダーでも関係なく召喚できるのか!？」

「恐ろしく強いですね・・・」

「そうね・・・」

「ちくしょう! あんな力が欲しいぜ!」

それを刀髪で縛られながら見守る冬花達。しかし黒深子だけは、闇影のコートで作られた枕に再び寝かされ、休まされていた。衰弱している事に気づいた冬花が黒深子だけは良いと許したからである。そして巡は何故か少し動揺していたが、冷静さを保っていたままだった。そして見守られている二人の戦いは更にヒートアップする。

「ひよりは・・・僕が守る!」

「その命、神に返しなさい!」

ダークカブトのゼクトクナイガン・アックスモードの斬撃とイクサのイクサカリバーの斬撃をいくらか受けつつも、デイルイトは一枚のカードを取り出しドライバーで発動する。

【FINAL - SHADOW - RIDE : FA・FA・FA・FA・FA
IZ!】

「なっ! 影がファイズになっただ!」

倒した力があるシャドームーンに変身しているため、デイルイトを上回るパワーで斬撃を浴びせていく。

「す、凄い……こんなライダーもいるなんて……」

「さて、そろそろ決着を付けようじゃないか？世界の光導者さんよ？」

「……！俺を信じてくれるのか？」

「ああ。戦って時のお前には、邪気という邪気が全く感じられなかった。しかももつと強い切り札を持っているにも関わらず、今持っている実力だけで俺に挑んできた。だからお前は敵じゃない、そう思ったのさ。」

元のデйкаイザーへと戻った彼の言葉を聞いた冬花は、その意思を理解したのかコウイチ達を刀髪から解放する。そしてデイルイトの仮面の奥の闇影は微笑みを浮かべながら、黄色い縁の自分のマークの描かれたカードをライドブッカーから取り出す。

「ありがとう。でも確かに、勝負は終わってない。だから……これで決着を付けよう！」

「望むところだ！」

デйкаイザーも自身の必殺技のカードを取り出すと、デイルイトと同時にドライバーにカードを挿入し発動。デйкаイザーの目の前には20枚の3Dカードが現れ、デイルイトは両手にライトオレンジの次元エネルギーをこれまで以上に集める。

「行くぞ！」

「来い！」

デイクイザーは勢いよく跳ぶと、そのまま3Dカードを高速で突き抜けながら強烈な左足キックを放つデイメンションダイナミックを、デイライトは集めた次元エネルギーを拡散させながら放つデイメンションプロミネンスを同時にぶつける。

「ハアアアアアアアッ！」

「ダアアアアアアアッ！」

二人の必殺技がぶつかり合い、辺り一帯に衝撃波を放つ。それに吹き飛ばされないよう、全員は近くのビルの影へと隠れながらぶつかり合いを見守る。そして二人の必殺技のエネルギーが最高潮に高まったその時だった。

「……！デイライト離れる！」

「えっ？」

突如、必殺技をキャンセルしたデイクイザーに無理矢理突き飛ばされたデイライトと、そのデイクイザーのぶつかり合っていた場所にどこからか漆黒の光弾が飛来し大爆発を起こす。それを見ていた冬花達も駆け寄り、何事かと辺りを見渡していると……

「ほう？今の俺の攻撃をかわすとは。さすが世界を巡る元帝王と光導者、そしてその仲間達と言うべきか？」

ちょうどデイクイザー達には、遠くの方から近づいてくる影が見えており、その影の眩きが聞こえると共に黒深子が体を震えさせる。

「黒深子？」

「せ、先生……あれだよ……私が恐いって思った物……」

そして、その場の全員の数歩手前で止まった影がその姿を現す。ドス黒いコートにシャツ、ズボンを着ていて、漆黒の髪を長く伸ばし、鋭い視線と威圧感を放つ光の無い純粹なる闇を抱えている瞳を持つその男は、デイクイザー達を見渡すとフツと目を閉じながら笑う。

「世界の元帝王に、かつて世界を焼き尽くしてきた光導者、虚像から生まれ変わった愚かな黒龍の雛に、ただの鳥と蠍。ああ、後こそ泥二人組と棒切れ使いもいたか……」

「な、何だとお前！黒深子達をバカにしたりするような奴は絶対に許さない！」

謎の男の言葉に憤怒したデイライトはそのままパンチを放つが、その男は指一本でそれを受け止め押し返す。そして更に男は眩いていく。

「自己紹介が遅れたな。俺の名は滅覇めつぱ 神司しんじ、この「全てを闇が支配する世界」の支配者だ。紹介された事を光栄に思え。」

その神司という男は腕を組みながら、一方的に自己紹介すると何かを言おうとしたデイクイザーよりも早く喋り続ける。

「お前らがこの世界に集められたのは他でも無い。貴様らを俺の中で飢える闇を癒してくれる糧とするためだ。だが貴様らが手を組んで、俺に反抗してくるのが目に見えていたからな。ダークライダー達を仕向けたり、お互いに破滅させようと、紅蓮にも協力して貰ったが結局はこうなってしまったからな・・・だからこの俺直々に貴様らの闇を頂く。」

「ハッ！俺様達の闇をどうやって吸収するって言っただ？」

神司の話す目的を鼻で笑いながら、まるで挑発するようにディスティルドライバーを構える周。それに合わせてコウイチ達も己の変身アイテムを構える。

「冬花、お前は弱ってるその女の子・・・黒深子だっけ？その子と一緒にいる。」

「分かりました！」

デイクイザーは未だ弱っている黒深子を冬花に任せると、腰に戻していたキングライドブツカーを引き抜く。隣では同じ様にライドブツカーを構えているディライトが。そしてその後ろではコウイチ達がそれぞれのライダーへと変身する。

「『『『変身！』』』」

【HENSHIN！CHANGE・SCORPION！】

【KAMEN・RIDE・・・DISHIRF！】

【KAMEN・RIDE・・・DISTEAL！】

コウイチとツルギは先程と同じく、仮面ライダーリュウガと仮面ライダーサソードRFに。巡は頭部がディケイド、身体がディエンドだが、赤いスーツに桃色のライドプレートが左肩以外に刺さり、複眼は右が黄色、左が黒という特徴を持つ「仮面ライダーディシーフ」、そして周は外見がディシーフと同じで、水色のスーツに藍色のライドプレートが右肩以外に刺さり、複眼は右が黒、左が紫の「仮面ライダーディスタイル」に変身し、ディカイザーとディライトの隣に立つ。

「さて、神司君だっけ？6対1だけど、どう戦ってくれるのかしら？」

ディシーフがディシーフドライバーを突きつけるように構えながら挑発すると、神司は余裕の表情で答える。

「問題ない。何故ならば、貴様達は今から驚きの光景を目にするからだ。」

「見せれる物なら見せてみやがれ！」

コウイチが神司を挑発すると、神司は懐から黒色のUSBメモリの様で、漆黒のD2つとGが描かれた物を取り出すとそれを見せつける。それを見たディカイザー達は驚く。

「が、ガイアメモリ！？」

「ど、どういった物なんだ！？」

「簡単に言えば、どんな人や生き物でも怪物に変えてしまう恐ろし

「いパンドラの箱だ！」

「そんな物があるの？」

「やばいな・・・欲しくなってきたぜ！」

「今はそういう事を言ってる場合じゃないぞ！」

デイクイザーは色々と叫んでいる中、神司がそのガイアメモリを起動しようとしながら呟く。

「そう、こいつは確かにガイアメモリって奴だ・・・けどこれは、この世界に渦巻く闇を吸収して生まれ変わったダークネスメモリだ！その味を、とくと味わえ！」

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！』

「そんな事させません！」

神司がガイアウィスパーを鳴らすのと同時にサソードRFがクロックデュアルというクロックアップよりも早い高速移動を使って近づいてそのメモリを取るうとするが、逆にその取るうとした腕を掴まれ・・・

「愚かな蠍よ、貴様の生きる力と闇を全て頂くぞ！」

「アグツ！？アッ、アアアアアアアアアアアアアッ！」

「『ツルギ！／ツルギちゃん！』」

神司が腕を掴んでいない左腕をサソードRFの胸に突き刺すと、彼女の中に埋め付けられている人をワームに変え、クロツクデュアルを可能とさせるワームストーンという物を無理矢理引き抜き、更に掴んでいる腕でサソードRFから黒い波動の様な物を大量に吸収していく。それを見た他のライダーが叫び、女性や少女を傷つけられるのが一番嫌いな周が今まで以上に怒りながら突っ込んでいく。

「てめえだけは絶対に許さねええええええええええ！」

【FINAL-ATTACK-RIDE・・・DI・DI・DI・
DISTEAL!】

ディステールはドライバーにFARのカードをスライドし宙に向けて、その周囲に無数のカードで出来た円が現われ、それにめがけて矢を放つ。そして上空から無数の光の矢が雨の様に降り注ぎ敵を一掃する「ディメンジョンスコール」を発動したが……

「こざかしい小雨だな。」

「アツ……ウアツ……」

微動にしくなり、変身が解け更に瞳から光が完璧に無くなったツルギを地面に下ろし、右手に闇を纏わせ振り払うだけでそのデイモンシヨンスコールを全て消滅させてしまう。そして突っ込んできたデイスティールのドライバーと頭を掴み押さえつけると……

「貴様もこの蠍と同じ様にしてやる！」

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！』

「何だ……ぐわああああああああっ！」

宙に浮いているダークネスメモリからガイアウィスパーが自動的に響くと、神司の両腕にディステイル自身とドライバーからバーコードのような物が吸収されていき、最後にディステイル自身のKR、AR、FAR、そして敵やライダーの力を奪うSRステイルライド以外のカードが全て光のバーコードとなって神司に吸収されてしまう。

「てめえ……ふざけんなよ……次は必ず……」

「煩いぞ、こそ泥め。」

変身は解けていないが、既に満身創痍となったディステイルを投げ飛ばし、近くのビルの中へと突っ込むと、神司は残っているライダー達を一睨みし……

「面倒だ。残った貴様らの闇も頂いてやる！」

「くそっ！皆逃げ……」

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！』

神司の叫びを聞いて、ディカイザーは全員に逃げるよう叫ぼうとしたが、時既に遅くダークネスメモリのガイアウィスパーが鳴り響き、神司の両腕から黒い光が放たれる。

「うわああああああああっ！」

「がああああああああっ！」

「何かが……吸い取られて……力があああああああ
っ！」

その光は3つに分離し、デイライト、リュウガ、デイカイザーに直撃し大きな黒い何かをバーコード状、龍の様なエネルギー体にして吸い取っていき、その光線を中断させようとデイシーフは神司へと向かって行き、そのままドライバーを振り下ろすが……

「闇影君達に何するの！」

「邪魔をするな！女狐め！」

「きゃああああああっ！」

神司の瞳から放たれた漆黒の光線がデイシーフを直撃し、デイスティールと同じ様にビルへと突っ込んでしまう。

そして漆黒の光が消え、デイライト自身のKR、AR、FAR、デイカイザー自身のKR、AR、FAR、他の主役級ライダー、サブライダーのKR、AR、FR、FFR、FAR以外の闇属性カードとダークライダーのカード、リュウガのアドベントカード、デイトを強化変身させる「カオスタッチ」というアイテム全てを光の粒子やバーコードにして神司は吸収する。

デイライトとデイカイザーは、そのままの姿で地面に倒れ、リュウガは額とカードデッキから紋章が消え、全身が灰色でブラックドラグバイザーがブラックライドバイザーとなった「リュウガプランク体」の姿で仰向けに倒れる。

「ふむ、その鳥からも闇を頂いておこつ。」

「や……めろ……黒深子に……手を出すな……」

ディカイザー達の間を通り抜け、黒深子と冬花に近づく神司に、力なくディライトは手を伸ばすが、現実あまりにも残酷な瞬間を与える。

「黒深子さんには近づかないでください！」

「どけ、棒切れ使い。」

「きゃあああああつ！」

雪月花を振り下ろすが軽く受け止められ、そのまま念動力のような力で地面に叩き付けられる冬花。そして鳴らされるガイアウイスパ！。

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！』

「その闇を頂くぞ！」

そのまま神司の左腕が右腕で持ち上げた衰弱が抜け切れてない黒深子の腹部を貫き、どんどん黒い波動を吸収していく。そして腕が引き抜かれ、白い羽根を散らしながら倒れる黒深子は光の無い瞳でディライトの方を見ながら口パクで何かを呟く。その言葉は……

（ドウシテ……タスケテ……クレナイノ？）

その言葉だと分かった瞬間、闇影の心を絶望が包み、ディライトの変身が解け、伸ばされ続けた腕は力なく垂れてしまう。そして神司はドス黒く光り出したダークネスメモリを掲げながら叫ぶ。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハッ！ついに俺は！全ての世界を闇で覆い尽くす程の力を！全ライダーを越える力を手に入れたぞおおおおおおおおおっ！……ありがとう、愚かな存在達よ。貴様らの闇は全て喰わせてもらった。そこで見ている、闇の戦士と破壊の創造神の誕生を！」

そして神司は、全体的に禍々しく鋭い形のロストドライバー、「ダークネスドライバー」を装着。そのままダークネスメモリを起動しガイアウィスパーを鳴らす。その声は先程とは違い、低く恐ろしい物となっていた。

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！』

闇の戦士達の記憶、創造神の記憶、破壊の記憶を宿すメモリをドライバーに挿入し、そのまま右腕をゆっくり掲げながら、英語のDを描くように回し顔の近くで思い切り握るとディカイザー達にとっては絶対に聞きたくなかった言葉を叫ぶ。

「………変身！」

『ダークライダー！ガイア！デストロイ！……ハカイシン！』

一呼吸置いてから叫んだその言葉と共に、ドライバーを傾け先程の電子音声と新たな電子音声を響かせ、空中に浮くと空に漂っていた黒い雲の様な漆黒の闇に包まれていく。そして黒い波動を放って闇を吹き飛ばした時、そこにいたのは神司ではなかった。

「ダークライダーを司り……破壊を創造する……神だとも言うのか！」

『その通りだ。仮面ライダーディカイザー……漸く俺もお前達の仲間入りだ……』

重く低くエコーの掛かった声、クウガRUのような装甲とマスクで腕や足、ベルトや装甲は勿論の事、触覚や複眼に至るその全てを漆黒に染め、仮面ライダーコアのように全身から闇の波動を放出し、その闇を背中から仮面ライダーエターナルのエターナルローブのようになびかせるそのライダーの名は……

『跪け、過去の戦士達。俺は全ての闇と破壊を司る絶対神……仮面ライダー、ダーク！』

全ての闇と破壊を司る絶対神、仮面ライダーダークは地面に降り立つと倒れたままの黒深子とツルギを担ぐと、静かに呟いた。

「この娘達は、俺の后とする。止められる物なら止めてみる……こいつらを倒してからな……」

闇の扉らしき物の中にダークが消えるのと同時に現れるリュウガサバイブ、オーガKF、装甲歌舞鬼、ハイパーダークカブトを含めた多数のダークライダー達がそこにいた。

「おいコウイチだっけか！早く闇影を連れてこい！後、冬花もこっちに来い！」

「お、おう！闇影、しっかりしろ！闇影！」

「……………」

「は、はい……………」

フラフラと立ち上がったディカイザーに叫ばれ、リュウガPはずっと黙ったままの闇影を抱え、冬花も何とか立ち上がりディカイザーの近くに来るとディカイザーは一枚のカードを震える手で発動する。

【ATTACK - RIDE・・・INVISIBLE!】

電子音声が響くと共に、ディカイザー達の姿が消えダークライダー達の目の前から居なくなる。そしてダークライダー達は逃げたのだと判断すると、そのまま闇の扉へと消えていった・・・

果たして、帝達は仮面ライダーダークから力を取り戻す事が出来るのか？連れ去られた黒深子とツルギの運命は？闇影は復活出来るのか？次回をお楽しみに・・・

コラボ編！〜現れし闇と破壊を司る神〜（後書き）

帝達の運命やいかに！？そして次回、黒深子とツルギが大変な事に
！（トライRさん、あなたのキャラを酷い目に合わせてすいません
！）

コラボ編！〜復活の光導者、迫り来る闇〜（前書き）

タイトルの通り、闇影は復活しますがちょっと無理矢理です。やってみたかった事を色々やってみたらグダグダっぽくなりました。作者が執筆していた過去の作品からある戦士が登場します。伏線もあります。

コラボ編！～復活の光導者、迫り来る闇～

世界の元帝王、天海地帝。彼はとある世界で助けた少女、月海冬花と共にとある世界へやってくる。そこは闇が渦巻き、ダークライダー達が存在する「全てを闇が支配する世界」だった。そこで二人は、闇を光へと導く光導者、煌闇影とその仲間達と出会い、一悶着を起こす。

そして、それを解決した直後、この世界の黒幕である滅覇神司が現れる。そして彼は自信の圧倒的能力で帝達全員を圧倒。彼らの持つ闇と力を奪った神司は、闇影の仲間である白石黒深子と諸刃ツルギを攫っていく。

そんな中、闇影は黒深子の言葉に大きなショックを受け、立ち上がれなくなってしまう。そのまま帝達は神司の召喚したダークライダー達から逃げ切ったが……

～闇の塔～

黒深子とツルギを攫ってきた神司は、吸い取った闇を使って巨大な塔を作り出した。その塔は、見るからに不気味で、壁には歴代の怪人達が生きたまま埋め込まれ、そのままうごめいていた。そして神司はその一番上の所を闇の空間で包み、その中である事を行っていた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「ハハハハハハッ！良いぞ！貴様の悲鳴をもっと聞かせろ！」

「ツルギ……ちゃん……」

その闇の空間の中で、ツルギの悲鳴が大きく響き渡る。それを見な

自分の一番の思い人、闇影へ対しての物だった。先生なら、例え今は助けられなくても必ず助けてくれる。分かっているのは自分なのに……そう思うと、涙が出てくる。

「さて、次はお前だ黒深子。貴様も闇に染めてやろう。」

神司に無理矢理立たされ、十字架へと繋がれていく中、黒深子は心の中で強く思った。

（先生……ごめんね……でも……今度こそ……言うよ……必ず私達を……）

『ブラックスワン！』

（助けてね……）

ガイアウィスパーが鳴り響き、自身の体に挿入される感覚と共に意識が離れていくのを感じながら、黒深子は闇の中へと落ちていった……

〈帝と冬花の家〉

一方、ダークライダー達から逃げてきた帝、冬花、闇影、コウイチと、いつの間にか居た巡と周は、それぞれ包帯を巻いたり、ライダーカードを確認したりしていたが……

「駄目だな。ディカイザーと闇系以外のアタックライドとファイナルアタックライド以外のライダーカードは形だけが無事なだけで、真っ黒に塗りつぶされている。」

「俺のも全部、契約前状態のカードしか無いっす……」

「俺様も帝王様と同じ感じだぜ……」

「私と冬花ちゃんは、傷の痛みが全く無くならないわ……」

「すいません……」

あやまらなくていい。と言いながら、帝はずっと座り続けている闇影の方を見る。彼の目には絶望と悲しみの闇が渦巻いていた。

（神司という男、これが目的で黒深子達を攫ったなら、とんでもないくらいの効果だぞ……！）

帝は皮肉めいた事を心で考えていると、闇影が突然立ち上がり自身のコートを羽織り、そのまま外へと出ようとする。それを帝は肩を掴んで止める。

「闇影、お前そんな状態で何をするつもりだ。」

「……黒深子とツルギを探しに。」

それを聞いた瞬間、帝は闇影のコートの襟首の所を掴んで壁に闇影の背中を叩き付けると、柄にも無いくらいに大きく叫ぶ。

「てめえ！今俺達がどういう状況か分かってるのか！」

「黒深子やツルギを助けられなかったのは……俺の責任だ……だから探し出すのは……当然だから……」

「バカ野郎が！」

帝は闇影の頬を強く殴る。それによって吹き飛ばされた闇影はフラフラと立ち上がり、玄関のドアノブに手を掛け、そのまま外へと出て行く。それを追いかけた帝は、背を折り曲げながら歩いて行く闇影の背中に叫ぶ。

「今のお前は！黒深子達を助けられなかったというショック、悲しみ、絶望とかで心が壊れかけている！それなのに壊れてないのは！お前が諦めていようと、お前の心が、未だどこかで黒深子達を信じ、絶対に助けると諦めていないからじゃないのか！

それだけじゃねえ！黒深子達を助けられなかったのは、お前だけじゃない！俺達も同じだ！だったら尚更、あいつらを信じて仲間達と一緒に、助け出そうと思わないのか！これは、お前一人だけの問題じゃ、無いんだよ！」

闇影の肩がピクリと動くが、振り返る事も何かを叫ぶ事もなく、そのままフラフラとどこかへと歩いて行ってしまふ。それを帝は拳を握りしめながら、見続けるしか無かったが……

「残念だったなあ！世界の支配者さんよお！」

「……誰だ、お前は？」

突如聞こえた叫び声。その方向へと帝が振り向くと、そこにいたのはボロボロのフード付きのコートを羽織っている髪が真っ白で濁ったオレンジ色の瞳で睨んでくる謎の青年がいた。

「俺かあ？俺は間口^{まぐち} 正一^{しょういち}だあ。またの名をお……ミラージュアギトオ！」

「……別世界で最近確認されている、アギトのダークライダーとも言える存在か。」

正一は大きく叫びながら、腰に仮面ライダーアギトの変身ベルトと同じオルタリングというベルトを出現させる。唯一の違いは、ベルトの中心がオレンジ色で白銀一色という所だった。そのまま乱暴に両腰のスイッチを叩くと、正一は鈍い銀の光に包まれその姿を変える。

「ほう、初めて見たぜ？ 悟りでは無く、憤怒で覚醒した闇のアギトとも言える存在……ミラージュアギト！」

「よく知ってるじゃねえかよお！ さあ、殺し合おうぜえ！」

「……」

帝はMアギトの叫びを聞きながら、静かにデイカイザドライバーを腰に装着、そしてデイカイザーのカードをいつもよりゆっくりとした感じで挿入し、バックルを閉じる。

【KAMEN - RIDE・・・DEKAISER!】

帝はいつも通りデイカイザーに変身。それを見たミラージュアギトは奇声を上げて両腕から鋭い刃を出現させると、更に力を込め先程よりも鈍い銀色の光に包まれ、その姿を進化させる。そしてそこに現れたのは、ミラージュアギトの白い部分はそのままに、アギト・シャイニングフォームの赤い部分が青く、銀色の部分が金色で複眼とベルトの中心が真紅のミラージュアギト・ダークネスフォームだった。

奇妙な笑い声と共に、ミラージュアギトは1本から3本になり、禍々しい鉤爪状となった刃を両腕から出現させながら走り出そうとしたが、いつもとは桁違いのスピードで迫ってきたデイクイザーの放った一撃で遠くまで吹き飛ばされ、胸の部分の装甲には穴が開き、そこから周りへとひびが広がっていた。

ディカイザーの姿は普通だが、ディカイザーの影は姿が全く違っており、両腕と両足の部分は禍々しい形状で、翼のような物が背中から広がっていた。仮面の奥の帝の表情は、とてつもない怒りを浮かべていた。

「やってみやがれええええええええええええええええつ！」

ミラー・ジュアギトDFは、赤銅色のアギトの紋章を通り抜けて放つダークネス・ライダーキックをディカイザーの言葉を否定するかの如く放つが、ディカイザーに左腕一本で掴まれる。そしてディカイザーはミラー・ジュアギトDFを地面に叩き付け、彼のオルタリング

を踏みつけながらドライバーにFARのカードを装填、発動した。

「まずは……一人目だ!」

【FINAL - ATTACK - RIDE・・・DE・DE・DE・
DEKAISER!】

「や、やめろおおおおおおおおおおおっ!」

ミラージュアギトの叫びと同時に、相手との間に現れる20枚の3Dカードはデイカイザーの左足に吸収され、黄金の光を纏わせる。そしてデイカイザーは躊躇も無く、その黄金に輝く左足を彼のオルタリングに叩き付け、更にそのままミラージュアギトの腹部に深々と突き刺した。

「ウツ!?!・・・ガツ・・・ギツ・・・ゲツ・・・」

その瞬間、ミラージュアギトのオルタリングは全体が粉々に砕け、ミラージュアギトは奇妙なうめき声と共に、真つ二つとなり下半身、ワンテンポ遅れて上半身という形で大爆発を起こした。デイカイザーはその爆炎の中に禍々しいデイカイザーの姿を見るのであった・・・

（今は……何だ……というより、俺はミラージュアギトを倒したのか?）

炎が晴れた時、デイカイザーは自分でミラージュアギトを倒したという感触や、何を言っていたのか等が抜け落ちている感じだった。その感覚を疑問に思いながら、デイカイザーは闇影の方にもダークライダー達が行ったかもしれないと思いながら、マシンデイカイザー

―を走らせた……

一方、闇影はフラフラと歩きながら黒深子達をその光の無い瞳で探していた。しかし、そう簡単に見つかるはずもなく、闇影はどこら辺か分らないところで足を止めた。

（お前一人の問題じゃ無いんだよ！）

帝の先程言っていた言葉が、頭の中で木霊し全身を突き抜けていく。闇影は目をつむり、今までの旅の中で出会ってきたダークライダー達と、コウイチ、ツルギ、巡、周の顔を思い浮かべる。そしてその中でも最も大きく輝いていた存在は、黒深子であった。

「そくだ……俺は何勝手に一人で悲しんで、くよくよして、悩んで、諦めてたんだ……俺にはちゃんと信じ合える仲間も、離れていようと心で繋がっている友がいるんだ……俺は一人じゃない！支え合い、支えられていく……こんなにも嬉しい事は無い！そくだ、俺は絶対に黒深子やツルギを助け出すんだ！」

闇影は、まるで自分自身に言い聞かせる様に叫ぶ。自分は一人ではない、離れていてもお互いに信じている限り、繋がり続ける……それを思い出した闇影の瞳にはもう、絶望も悲しみも無い、光がしっかりと宿っていた。

「さあ、まずは心配掛けた皆に謝ってこようかな……！誰だ！」

帝達のいる家へと帰ろうとした闇影は、後ろに誰かの気配を感じ、デイトライドライバーを構えながら振り向く。そこに立っていたのは、あまり他では見られない特徴的な姿を持ち、異様なオーラを放つ二人組の青年だった。

「あなたでしたか、滅覇神司様の偉大なる計画を邪魔しようとする愚か者は。」

一人は、胸ポケットの部分に多数の勲章を付けた金の装飾が至る所に施された軍服に身を包んだ、黒髪を左右に振り分けるように整えた、心地よいを通り過ぎて気味の悪い笑顔を浮かべている青年。

「確か・・・世界の光導者であり灰燼者でもある、仮面ライダーデイトライトだったな？噂は聞いてるぞ。」

もう一人は、リングに剣が突き刺さり、そのまわりに四匹の蛇が居るというエンブレムが施されたどこかの部隊のような服に身を包んだ、青いメッシュを所々に入れた茶髪の鋭い瞳を向けている青年だった。

「もしかしてお前達も・・・！」

「そうです。私達も、滅覇神司様に仕えるダークライダーです。あつ、申し遅れました、私、仮面ライダーグレイブこと志村純一です。以後、お見知りおきを。」

「そして俺の名は大道克己、地獄からやって来た永遠なる悪魔だ。」

二人の自己紹介を聞いた後、闇影はデイトライトドライバーを腰に装着しようとするが、克己が首を横に振ってそれを止める。どうやら言いたいことがあるらしい。

「俺を倒しに来たんじゃないのか？」

「いや、今の貴様ならいつでもぶっ潰せるからな、言っておかないやいけない事を言っておこうと思ったただだ……」

「そう、私達はあなたに自分のお仲間がどうなったかを聞いた後、絶望の中で倒されて頂こうと思ったのです。」

「俺は絶対に、黒深子とツルギを助け出す。それだけだ！」

純一と克己の言葉に、自分のやるべき事を叫ぶ闇影。それを聞いた克己は突如高笑いを始める。

「ハハハハハハハハハッ！そうか、お前は既に絶望まっしぐらかと思っていたが、違ったらしいな。まあ、絶望に墜ちていないなら、再び墮とすだけだ……そのお仲間を使ってなあ！」

「一体どういう……！く、黒深子……ツルギ……」

闇影が問いかけようとした瞬間、彼の目によく知っている人物が、純一と克己の後ろから現れるのを見て驚愕する。それは何だか恐ろしいオーラを纏った黒深子とツルギだった。

「……」

「アハッ……獲物だ……しかも闇影さんだ……殺して良いんですね……志村さあん……大道さあん……」

黒深子はずっと黙っており、ツルギに至っては、紫色の液体を垂らしながら純一と克己に変わった口調で問いかける。

「まあ、お待ちください。もう一人、彼を倒すためのお方がやってくるのですから。」

純一がそう言うのと同時に、闇影と彼らの間に銀色のオーロラが現れ、そこから見た事も無いライダーが現れる。

「カリス！？いや違う、このライダーは一体？」

闇影が驚愕していると、その謎のライダーは複眼越しに闇影を睨み付ける。その睨みからは殺気と憎しみがビンビン感じられる。

「紹介しよう。彼こそ、失われし世界からやってきた蒼き死神、仮面ライダーサイズだ。」

克己がサイズと呼んだライダーはその姿は闇影も共に戦ったライダーの一人、仮面ライダーカリスに酷似している。しかし、スーツは青く、腕や足にある装甲などの銀色だった部分と複眼は全て金色で、カリスラウザーの様な物は、赤い部分が青くなり、金の模様が增え、ベルト自体も金色な戦士であつた。

「それでは、時間もあまりありませんので、あなたの命を奪わせていただきます。変身！」

「踊るぞ、死神のパーティータイムだ！変身！」

「……変身。」

「はあい……変身！」
へんしんしん

『オープンアップ！』

『エターナル！……エターナル！』

【H E N S H I N ! C H A N G E - S C O R P I O N !】

純一は黄色を基調とした、グレイブバックルにチェンジケルベロスのラウズカードをセット。そのまま腰に装着し、バックルを勢いよく開く。

克己は右側にスロットのある赤い機械を腰に取り付け、神司の使うダークネスメモリにそっくりだが、全体が白く端子が青い金色のEが描かれたメモリのスイッチを押し、そのままスロットに差し込み横へと傾ける。

黒深子は、コウイチの良きパートナーだった女性が変身していたライダー、ファムのカードデッキに酷似しているが、金色の禍々しい黒き白鳥の紋章が描かれた黒いカードデッキを構え、金色のベルトを出現させるとそこに挿入。

ツルギは服の袖などから何本もサソードヤイバを出現させると、その内の一本を取りそれにサソードゼクターを装着する。

「行くぞ……世界の灰燼者！」

純一は黄色いケルベロスが描かれた壁の様な物を通り抜け、その姿を黄色いAを模した装甲とマスクが特徴の「仮面ライダーグレイブ」になり、口調が変わる。

「さあ、地獄を楽しみな！」

克己はもう一度鳴り響いた電子音声と共に、青と金の電流と白い細かな装甲の破片に包まれ、白いボディと青い炎のグローブ、Eを横倒しにした触角と全身に巻き付いたコンバットベルトが特徴の「仮

面ライダーエターナル」となり、決め台詞と共にサムズダウンをする。

「一緒に墜ちようよ……先生……」

黒深子はファムの白い部分を漆黒に染め、金色の装飾が全て禍々しい形状となった「仮面ライダーフラム」となり、この場で初めて喋る。

「ハイパー……キャストオ……オフウ……」

【HYPER - CAST - OFF! CHANGE - HYPER - SCORPION!】

ツルギは直接ライダーフォームに変身すると、左腰にハイパーゼクターを取り付けその角をさつきと変わらぬ口調で言葉を喋りながら動かす。それと共に電子音声の流れ、全身の装甲に紫色の電流が走り、装甲を肥大化させていく。

そして現れたのは、紫色の蠍が描かれた銀色の装甲、更に鋭く巨大になった蠍の鋏状の肩、腕部装甲は蠍の鋏を模した鋭い刃になっており、何も無かった右腿と両足にはサソードヤイバを納刀する部分が増設された「仮面ライダーサソード ハイパーフォーム」へと変身した。

「……俺はもう迷わない……絶対に前達を倒して、黒深子とツルギを助け出す！変身！」

【KAMEN - RIDE……DELIGHT!】

さつきまで抱いていた負の感情を全て拭い去った闇影は、ディライ

トドライバーを装着、そのままカードを挿入しバックルを閉じる。
そしてそのままディライトへと変身した。

「行くぞ……黒深子、ツルギ！」

「俺達を忘れるな！」

「地獄は始まったばかりだ！」

「……」

「フフフツ……」

「アハハハハハハハハッ！」

ディライトはライトブッカー、グレイブはグレイブラウザー、エターナルはエターナルエッジ、サイズはカリスアローの銀の部分を金、赤い部分を青に染めたサイズアロー、フラムはブランバイザーを漆黒に染めたフラムバイザー、サソードHFはサソードヤイバを二本それぞれ構え、戦い始めた……

果たして、負の感情を拭い去ったディライトは襲い来るダークライダーを退け、闇から黒深子達を救い出せるのか、ディカイザーはディライトの救援に駆けつけられるのか、そしてこの世界に平和と言う支配を与えられるのだろうか……次回、コラボ最終回！

コラボ編！〜復活の光導者、迫り来る闇〜（後書き）

今回はダークライダー総進撃だったり、最終決戦だったり、FFR（デライト版）とFWRが出たり、更にオリジナルと先行登場だったり、驚きの連続かと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7477u/>

仮面ライダーディカイザー～世界の支配者～

2011年11月21日10時58分発行